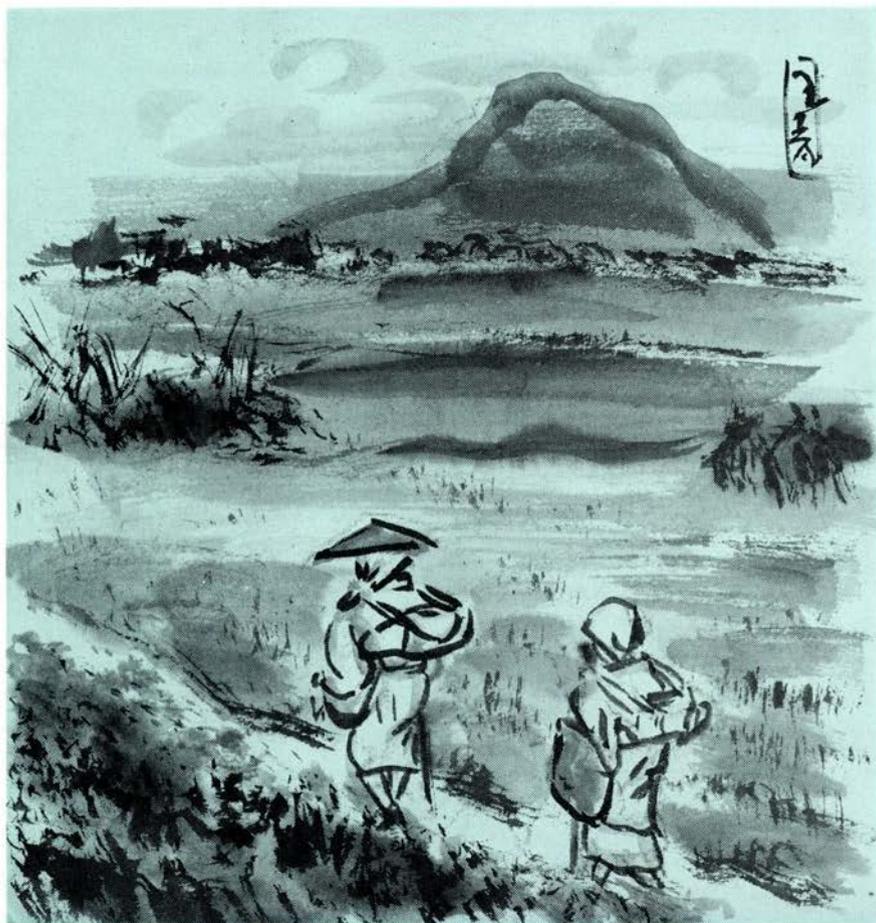


# 川柳塔

昭和四十二年一月九日第三種郵便物認可  
昭和六十二年三月二十五日印刷  
昭和六十二年四月一日発行(毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷七〇七号



日川協加盟

No. 707

中島生々庵追悼号

四月号

中島生々庵追悼

# 本社四月旬会

日 時 昭和61年4月7日(月) 午後6時  
会 場 メンズフアッシュンセンター3階

東区内本町一丁目 電話06(941)1918  
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口) 交差点西南角

おはなし

西 尾 栞

兼 題

「楽」 金井文秋選

「芝居」 阿萬萬的選

「生」 大坂形水選

「母と子」 橘高薫風選

席 題 2題 各題3句 締切7時  
会 費 五百円

☆追悼旬会のため予告の兼題を変更致しました。  
ご了承下さい。

川柳塔社

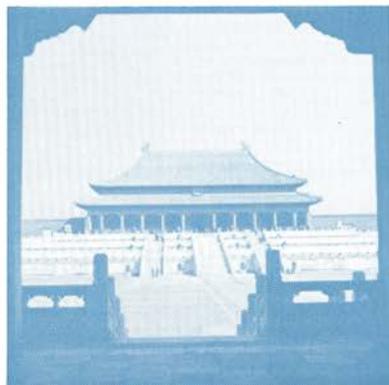
## 友好と観光 中国吟行の旅

北京—大同—万里の長城

- 61年10月下旬
- 6日間コース
- 費用24万8,000円  
(全食事付)
- 人員25名かぎり

(詳細は逐次、発表します)

川柳塔社



# お別れ

西尾 葉

前月号に、名譽会長のご快癒を祈つて、ペンを擱くと書いたのに、それを裏切つて、二月十七日に訃報のベルが鳴つた。二月十八日はお通夜、十九日は葬送であつた。

午後七時を待たずに和光寺へ行つた。その夜は凄しい嵐で氷雨が降つた。昔から偉人が歿くなると、その日は天地鳴動して暴風雨になるといふ言い伝えがある。やはりそうであつたかと感心して氷雨の音をきいた。

だが十九日の葬送の日は、温和な日和となつた。一時半から始まつた葬儀は、

いとも厳肅にとり行われた。先生御出身の佐賀の檀家寺からと、京都の南禅寺の最高の僧位の方と、和光寺の尼僧と列席のもとに式はすすめられた。そのうちでも不思議に思つたことは、南禅寺の貌下の弔詞のあつたことである。よほど故人に対して礼を尽され惜しまれてのことであらう。

葬儀委員長は医師会から、副委員長は医師会と川柳塔からであつた。私は別掲の弔辞を讀んで讀んだ。

医師会はじめ川柳会、町内会、曾て先

生の診察を受けられた縁者の方達の御焼香は延々とつづいた。

最後のお別れに私は白菊の一枝をもつて伺つと、ご生前からのあの秀でた眉が黒々と黄菊、白菊の中で香気を放つていた。

×××××××××××

告別式には、御多忙中のところ他柳社の方々のご懇ろなる御焼香を賜り、また川柳塔社の遠方の方々の参列を賜つたこと、謹んで茲に篤く御礼申上げる次第でございます。

合掌

偉人逝く春の嵐の吹くなかに

葉など盛らぬ名医の叱る声

名医という名の名医最後かな

座右の句

人恋し人煩わし波の音

( 栞 )

私の句

疲れたら来いと大樹が呼んでいる

田口虹汀

# 川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

お別れ

西尾 栞 …… (1)

一本のステッキ

工藤 甲吉 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 …… (4)

自選集

東野 大八 …… (28)

川柳太平記 (95) 川柳の群像 小林不浪人

東野 大八 …… (32)

連載 誹風柳多留廿六篇研究 (二十四丁)

黒川 紫香選 …… (34)

水煙抄

波多野 五楽庵選 …… (36)

秀句鑑賞 [ 同人吟

春城 武庫坊選 …… (31)

水煙抄

橘高 薫風選 …… (54)

愛染帖

橋高 薫風選 …… (54)

追悼

中島生々庵先生

栞 (58)

栞・茶六・いさむ・巨城・大八・好郎・水客・緑之助

甲吉・奇童・柳宏子・メ女・由多香・鶴丸・岳人・薫風

## 一本のステッキ

工藤 甲吉

私は一本のステッキをもっている。私の川柳の先生・小林不浪人の形見である。ふだんは減多に使わないが、雪が消えて北辺「津軽」にも春がやってくると、ときには朝の運動にご一緒を願うことがある。そんなとき

私が川上三太郎の「川柳研究」を離れ、前田雀郎の「せんりう」に身を寄せ、そして雀郎の死後、麻生路郎門下に加わり、こん日川柳雑誌「イコール「川柳塔」に在るのも、何かこのステッキが「道標」の役をしてくれたからではないか、と私は思うのである。

ところで不浪人と私のつながりは昭和三年東奥日報の「東奥柳壇(不浪人選)への投句から始まり、二十九年まで続いた。

何せ豪放、磊落、洒脱、ダンディーそして半面ではセンチメンタリスト、さみしがり屋等々多彩な「アルバム(横顔)の持ち主だっただけにその思い出となると「風景」に例えれば我が「十和田湖」とは違い「松島」のよなもので、島数が余りに多く、焦点を絞ることが出来なくなってしまうのである。

だが「秘話」が一つある。それは川柳界で

中島生々庵五十句	.....	(69)
北京好日	.....	(70)
ポタン社会おちこぼれ	.....	(73)
天の橋立吟行記	.....	(74)
往復富士の見えた旅	.....	(74)
初步教室	.....	(76)
「読む」	.....	(76)
一路集「合 図」	.....	(78)
「餌」	.....	(79)
柳界展望	.....	(80)
本社三月句会	.....	(82)
名地柳壇(佳句地10選/脇田米朝)	.....	(86)
東野 大八	.....	(70)
西出 楓楽	.....	(73)
西口 いわゑ	.....	(74)
林 はつ絵	.....	(74)
小出 智子	.....	(74)
阿 萬 萬的	.....	(76)
有働 芳仙選	.....	(78)
野中 御前選	.....	(78)
中村 優選	.....	(79)

■ 4月各地句会案内 99 ■ 編集後記 101

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな (薫 風)

私の句

道問うた人にまた逢う旅のこと 浜 本 久仁於



はあまり知られていなかったが、漫談が得意でその語り口も絶妙であった事だ。その一例「銀行の向いにソバ屋があった。そのソバ屋から或る月末書き付けが来た。曰く永年のソバのカマリ(香)代何円何十銭とあった。銀行もこのまま引っ込んでいては県一の銀行のこ券にかかわるといんでソバ屋の主人を呼んだ。そして支店長自らが手の切れるような札束を主人の目の前へ持って行きバラバラバラと弾いて見せた。そして曰く「ソバのカマリ代ハテ札の音鳴りコで払いしたじや」といった具合。こうしてよく人を笑わせた。そんな不浪人だったが晩年は淋しかった。三十数年頑張った川柳雑誌「みちのく」を失い、根が善良だっただけに友には背かれ、事業では人に騙され、終いは病で寝込み、そのまま世を去った。私はその間二度涙を見た。

「閉居以後四年、誰とも会わず(私)甲吉」は強引に一度会った)あれほど好きな川柳を一句も発表せず賑やかな事が人一倍好きな彼がそうして死んだということが何かしら口シヤ小説の中に出てくる人物が思われる」

右は当時、新聞社時代机を並べたある人の不浪人をしのんだ文中の一節である。

さて、NHKの大河ドラマ「いのち」の舞台「津軽」も長い長い冬が過ぎていよいよ待望の春がやって来た。私も久々にステッキをかざし「川柳群像」の不浪人と歩こう。



西尾 葉選

富田林市 岩田美代

不器用な話ばかりで春遠し  
そのうちに笑い袋も怒るだろう  
少うしいびつな円だがあたたかし  
ブラックのコーヒーに暗示かけてみる  
かげろうが炎えてきたので紅を買う  
そして春 人それぞれに思いあり

米子市 林 荒介

ゼンマイを一杯まいてまだいくさ  
単身のメニューに葱の芽が伸びる  
父の拳骨に説明書はいらぬ  
返し針亡母の小言は恙なし  
本心を確かめあつていて孤独  
逃げのびて花野の果てに尾を残す

岡山県 嘉数 兆代賀

聞き役に回ると温い風が吹く

世渡りが下手でめっぽう憎めない  
傷口が一人になってから疼く  
ここからは引けぬおんなの水溜り  
馬耳東風老母は笑顔を絶やさない  
死後の事考え乍ら爪を剪る

大阪市 中川 滋 雀

雪解けの便り靴でも磨こうか  
あすなろの希望はいまもふくらませ  
霞食うて生きてた話もうできぬ  
為になる話にチャンネル権がある  
一日が永い短い妻の留守  
記念日を思い出させる寿司がくる

桜井市 岩本 雀踊子

柳歴の長さに妻の愛がある  
上の子の夫で暮して来た歴史  
流れ矢に当る不運は考えぬ

忘却の出来る女の花暦

ニコニコした坊主に出逢う春彼岸  
よろこばす小さな嘘だよ許されよ

大阪市 西森花村

春彼岸蝶々お先に来てはった

無縁墓地大き過ぎるもなお哀れ  
神主さんお寺さん程肥えられず

狛犬の足の間を観察し

美容体操いずれ夫を見送る身

やまいぬけした頃通帳も白い儘

八尾市 高杉鬼遊

生まれたは猫の仔春眠おぼろなり

菜の花の道で訣れて忘れぬ

夜ざくらの灯影あやしきプロフィル

妻や子よ江戸の嘶を聴かせよう

宮城に会う人がいて砂利を踏む

裾野から駆け登れそう富士が晴れ

和歌山市 西山幸

春が来て汚れの目立つ鏡掛け

女ひとりを使い分けてる電話口

ざれごとの言葉に迷うチョコレート

紙の鶴あすは明日はと空を見る

朧夜に吐息ばかりをかえされる

遊戯です口約束も指切りも

兵庫県 遠山可住

節分へ易者が一つ齡をとる

弱虫の順に小鳥の森が明け

砂浜にあなたの鍵を返します

落としたボタンがみんな妻の箱にある

老人会で聞いたおかずを買って来る

もう少し悪女であつてほしい妻

出雲市 石倉芙佐子

戯れが何時かは本気になるゲーム

ガーベラが炎えて病室午前二時

紅の爪にはしない紺紺

矢絰が別れの夜をおぼろにし

藤色のネグリジエ着よう白い部屋

宿浴衣おんなは夫を子を想い

松原市 谷垣史好

桃霞む老子莊子と酒酌まん

悪乗りの最たるものよロンとヤス

南区は消えても消えぬミナミの灯

疣蛙お前見てからまた鬱に

この世には美人はいない午前四時

岡山市 土居耕花

神様が賽銭箱の中で寝る

ワープロをいろはにはへと言うて打つ

手術した事をカラスは知っている

ドングリは皆痛い目に遭うている

お仕舞のドラマは急ぐ事はない

堺市 高橋千万子

カブキ座の切符で春の謀りごと

グループの和服が似合う指定席  
燃やしても燃えぬ落葉に似た私  
受けうりの男に質問する女  
春の雪男のウソが溶けてくる

出雲市

原

独

仙

それぞれに長短の癖みなわが子  
お迎えはいつでもいいよが薬呑み  
山脈の向うはふるさと雪催い  
若かったそれも六十年前のこと  
両隣り男やもめと未亡人

美祿市

安平次

弘

道

漬物石と姑の重みにくたびれる  
水中花水の情けに溺れきり  
百円ライタト知らぬ振りする火の掟  
中流にしては貧しき図書費かな  
きび団子ぐらいで家来にはなれぬ

弘前市

波多野

五楽庵

月齢三日の寒さをいとう毛糸針  
地吹雪の町へ烏も来てくれず  
奴隷にも役にもつけぬ天邪鬼  
いまわしい電話を暗記してる指  
月の砂漠を妻と歌ったことがない

下関市

石川

侃流洞

晴耕雨読晴れに耕す土がない  
年金を噛る水引孫の数  
転んでも損にはならぬ手を挙げる

生返事新聞越しへ妻の愚痴  
四面楚歌横槍だんだん錆びて来る

松江市

柳楽

鶴丸

フィクションとノンフィクションのはざまに妻  
カード番号に妻の生年月日  
好きな花を初恋のひとが覚えてた  
旗色が悪くなったパピペポ  
再スタート待遇よりも義理をたて

松江市

舟木

与根一

鬼の豆持て余してる鬼の齡  
善人の順序にクラスメート逝き  
大正の物差し計れぬ物ばかり  
土地評価上げて車は通り抜け  
バレンタイン不倫も便乗しています

米子市

小西

雄々

大脳の皺ものびきるほど甘え  
ゴシップへ逃げるつもりのパスポート  
条件は揃えど婿に来てくれず  
笑わない人が笑って野火はしる  
読まれても困らぬように日記書く

熊本市

有働

芳仙

二次会へ付録のようについて行き  
その奥の秘密ゴキブリ知っている  
文鎮の重みぐらいの課長が来  
字余りと字足らずうまの合う夫婦  
ルンルンの色で柳の芽が弾け

羽曳野市 塩 満 敏

焼酎は平和主義者でございます

大げさに騙されてやる四月馬鹿

女王蜂只今列島北の旅

年度末予算オーバードないしょ

二人目の日取りが決まり夫婦酒

島根県 小 砂 白 汀

ときめけり辛夷まんさく花ざかり

格別の用も無いのが生きのこり

頼りない足へもつれる縄梯子

春眠を誘う波長で雨が降り

廃屋の軒へもオリオン輝くよ

大田市 藤 田 軒太楼

市議選に遠い戸籍をもち出され

天気予報信じて半日棒にふり

熟年の読みは体験物を言い

刻かせぐために合点打っておき

取るものはちやっかり取って袖にされ

大阪市 西 出 楓 楽

あほらしいことにあほらしいことばかり

天近し祈ることばを持つてから

くじ運にたとえられてる男運

陽がのぼる堂々巡りさせるため

自らを駄馬と認める闇の底

和歌山市 松 原 寿 子

空想のトンネルいまだ抜け切れず

ワンパターンのおんな見守る人がいる

泣いたらあかん再びネジを巻き直す

消極的なわたしを包む熱い胸

光陰の矢に流されはせぬ思慕一途

岡山市 時 末 一 灯

嗤われて嗤うてもみるおもしろさ

同情の言葉は吐かぬ友ひとり

新紙幣もう履歴書になつている

損得を捨てれば毬はまるく跳ね

わらべ唄ひとひらの雪掌に受ける

京都市 松 川 杜 的

バター一つ僕には分らぬ冷蔵庫

地図からも韓国にんにく匂いそう

拝観停止雪の金閣美しい

湯豆腐の湯気の向うに寒椿

ドラマ皆男哀れな役ばかり

京都市 都 倉 求 芽

早春の風が待てない花時計

人情が寄木細工を組み合せ

乗りかえの度に土産が増えてくる

新製品使用上注意がやたらあり

揃じやない本当の歯が抜けてゆく

伊丹市 樫 谷 寿 馬

春の言葉で遺言状を書こうかな

暗闇の握手に敵の暖か味

貞淑を通したひとのミステリー

緋ののれんから出るナウな首

この下に白き夫婦あり北の屋根

倉敷市

小野克枝

お揃いでただ行くだけの思いやり

目が合うたばかりに乗った縄電車

役に立ちたいと献体ふと洩らす

信頼の藁一本をたぐり寄せ

湯がたぎる妻はときどき他人です

八尾市

宮西弥生

聞き流す耳へ噂が多すぎる

恋におちて女少女のそのままに

春めきて重い会話をやめにする

梅一輪隣と溝が解けました

三月の噂赴任が戻つて来る

堺市 河内 月子

むつかしい話を嫌う赤い酒

熱い血も絆もとはみな他人

温室で出荷の出番待っている

義姉が姑の変りを引き受ける

テートからルンルン顔で子が帰り

米子市

林 瑞 枝

竹人形飾ると匂うてくる故郷

冬眠の窓に宅送便が届く

言い足りぬものを残した岬の灯

勢いをつけても翺べぬカタツムリ

珈琲がこぼれ笑いが止まらない

大阪市 津守柳伸

湯上りの水に自信を取り戻す

彗星がどう向うとも米を研ぐ

逢いに行く化粧を少し控え目に

逢えるかも知れぬ予感のまがり角

梅林の和服美人で柳腰

竹原市 森井菁居

影武者の父に多弁は許されぬ

百姓を止めて野菜の有難さ

現職に進むしかない棒グラフ

妻が書くシナリオに添いつつがなし

丸木橋渡った後は考えぬ

竹原市 小島蘭幸

盃に涙を溜めて男呑む

悲話ひとつ森の小人に聞かせよう

立喰いそば隣の男には負けぬ

先生の自動車が邪魔になる広場

故郷の冬風鈴が鳴っている

平田市 久家代仕男

過去帳を初日に戻す日の早さ

戦争もいじやないのと平和ほけ

悠久の平和そらごとだと笑う

雪解けの日射し野良着が着たくなる

賢兄も愚弟も同じ釜の飯

倉敷市 野田素身郎

勝ち誇ったようにバーゲンから帰り

問診へ瞬きもせぬ付けまつげ

主治医転勤治癒せぬ僕を置いたまま

薬一杯もらい病院出れば雨

寒がりの夫が帰ってから氷雨

倉吉市 奥谷弘朗

善人の手の内たわいなく読まれ

塞翁が馬と信じた果報者

男なら虎の威を借るのはよそう

湯加減を茶筌が一番知っている

似てくれと願う子供も無くて老い

島根県 堀江正朗

桜土手呼ぶからじっとして居れぬ

手の中に握った意地をもてあまし

靴下を脱ぐと喜ぶ足の裏

白杖も春の足踏み先にたち

安らぎの輪の中にいる花筵

寝屋川市 稲葉冬葉

ライバルの自信へ眼鏡かけ変える

仏に語る宵からの北枕

孤独から逃げてパチンコ繁盛記

マザーコンプレックスお髭が伸びている

とうさんの拳がほしい少年期

富田林市 藤田泰子

鬼やらい鬼は男と限らない

思いやり鬼を打つにも五色豆

英えんどういずれ他人になる姉妹

種にする豆を一粒残しとく  
齒車が少し狂って昼の風呂

桜井市 河合茂雄

山の神まだ死語でない妻がいて

欲言えばキリが無い無い生命線

要領の悪い男の向う傷

彗星の通る頃は夢の中

嫁がす日僕も世間並に泣く

島根県 西村早苗

その愛に答える花を真ん中に

ホステスの媚態に馴れる通い酒

女送る無人の駅の夜をひとり

すぐ返事しない女をやや憎む

マネキンが着るどの服も春の色

和歌山市 福本英子

身に余る情け再起の糧にする

綺麗ごとだけですまない血の絆

作るのも飲むのも独り卵酒

枕元のベルが確かな音で鳴る

冬眠から醒めて狭いと気付く視野

鳥取県 川崎秋女

泣けるだけ泣かしてくれる仕舞風呂

美しい笑顔が鬼に見えた日も

ヒユヒユウヒユウ風も一緒に泣いてくれ

潤滑油になろう小さな母の灯よ

鱗一つおとして雪の日が暮れる

岡山市 川端 柳子  
ふるさとの歴史にわたし欠かされぬ  
他人様事あれかしの外野席

脳に酸素腫に何も彼も入れる  
軽石の気泡に祖母をふと想う  
半分にしまししょう小さい方をとる

豊中市 安藤 寿美子

切株を蹴って憎しみ倍になる  
自信あるからあんなこと言わはんねん

留守の間に来たかて来たとは言わさへん  
義理チョコに毒が仕込んであるのです  
時計持つ習慣のない女です

綾瀬市 大山 と金

宿業はこれから生きる軌道かな  
ネクタイのオリブ色がなつかしい  
無駄骨のいつか役立つときがくる  
いざ訪わん百三十六地獄

六地藏わが行く道の鼻が欠け

倉敷市 稲田 豊作

武装捨て裸になりたい針鼠  
願い事でかい賽銭箱が待つ  
大衆が踊れば貧しいシルエツト

所帯ぐり覗く顔して寄付話  
誠実に生きた貧しい柩です

浜田市 中川 幸一

狷介と孤独自負して人を待ち

説教はたつぷりとして金貸さぬ  
阿呆らしいことも言わねばならぬ恋  
修身が邪魔して好きと言えぬまま  
老人の胸に阪妻チャップリン

名古屋市 越村 枯梢

短足の父と駆けっこなどしない  
初産妻は故郷の味を出す

鳩のいる帽子を買いに街に出る  
向う傷こんな深いと知らなんだ

ときどきは拗ねるライター持ち歩く  
今治市 矢野 佳雲

雪しんしん男も泊るつもりなり  
少し痛そうにタワシを持ってくる

やるだけはやったと灰になって言う  
白を白と言うて愛想のない男

湯タンポが冷えても朝がまだ来ない  
唐津市 久保 正敏

神無月貧乏神に足が無い  
発送を以て発表来たことが無い

裏作が出来ず軍手の旅に出る  
苦勞人善い人ばかりと限らない

上品な貌で言うても嘘は嘘

西条市 片上 明水

風船の群まるくする春の空  
骨壺の蓋ふるさとの山へ開け

鶯ののど北風の角がとれ

手袋が土で汚れる父の職  
艶のない靴はみやげもなく帰り

兵庫県

辻

文平

肩書を捨てれば変る風の向き

クレヨンで裁く容赦のない描写

負けて来た私へ妻がする拍手

帯を解く音に女の歳を積む

百点に指切りがあるランドセル

高石市

牛尾 緑 良

中年の常識で消す夢がある

四十過ぎて老母からもらう守り札

野心まだ暖めている影法師

二次会の女は色気かくさない

点字打つ音は私の応援歌

八尾市

山下 みつる

平凡に暮した父がすばらしい

二枚目は母父ちゃんは三枚目

階段をのぼると年がばれてくる

ロマンなど何も拾えず船おりの

ポルノ熱もうこれ迄の乱れよう

大阪市

長谷川 春 蘭

落葉焚く人の輪にいり背を灸る

きっぱりと愛煙絶ちて無策な日

寄進石金百円も夢の跡

霜柱けとばして行く野球帽

春の風邪粥の白さになごまされ

守口市 野呂右近  
どっこいしょ亡父の歳を越しました  
女の子許りで良かったとも言われ

同じ血を引くと思えぬ出来不出来

神経だ歳だと医者も取り合わず

妻にさへ気兼ね不聊をかこつ日々

藤井寺市

吉岡 美房

賛成も反対も嫌建国日

二人目を産んだら嫁は慌てない

真っ直にしか歩けない足だった

口癖になった「ころつと忘れてた」

実年で辱なくもチョコ貰う

西宮市

草刈 墮 駄

盗人に親方のいる勤め人

唇に流石卑弥呼は金を張り

雄鳥が巢を造ってる借家なり

君が代に護国の神が風邪をひき

友の譜よ生れし年と逝きし年

尼崎市

春城 武庫坊

水たまり越えねば春の顔見えぬ

いらちにもぐずにも人生八十年

口紅を塗るふりをして盗み聞き

しんみりと語り合うなら盃で

影法師俺より先を歩いている

呉市

林野 甦 光

花の芽をみつけた朝のタイムリ

フラミンゴ踊らせ動物園の春  
あきらめの良い銀行の貸眼鏡  
猫車飢えない物が積んである  
ふん切りの悪さを溜めた灰皿で

倉吉市 渡辺 独歩

大きめの堪忍袋に縫い直す  
結ばれた日からはじまる数え唄  
遮断機の心変りで人が死ぬ  
愚痴詰めた袋は蝶に見せられぬ  
焼けてからベルが鳴ったの鳴らないの

和歌山市 神平 狂虎

明日を指すゆびはいつでも燃えている  
夜ばり歩き続けるポールペン  
生意気な風は海まで押し戻す  
差別語は月の出ぬ夜にして欲しい  
淋しくて港に近い街に住む

鳥取県 森田 布堂

適マーク信用出来ぬ大惨事  
夫婦喧嘩電話が鳴ってそれつきり  
検眼に飯に無縁のしゃもじ持つ  
晩酌の電子レンジがチンと鳴り  
生きてゆく水が命を取る怖さ

大和高田市 岸本 豊平次

目につかぬ場所に載ってた訂正文  
里神楽おかめの腕を見てしまい  
道程だけ聞いて起伏に息がきれ

金儲けする話にも先ずは金  
縁側も無くて団地の陽があまり

松江市 恒松 叮紅

離婚届三下り半は書いてない  
筆ペンを嫌う世代の漫画文字  
人肌の温みが欲しい雪おんな  
くじ運が今年も悪い賀状束  
予算からいつもはみ出ている学費

宇部市 平田 実男

耳たぶで承知している初心な恋  
足よりも値段のほうへ合わす靴  
野良着着て出ると野菜の音が聞け  
水虫に定年延長喜ばれ  
老いて子に従いたくも寄りつかず

松原市 玉置 重人

パチンコ屋出ておや雨が降ったのか  
囑託の耳が動いた艶話  
PTA値踏みをされた目と出合い  
どんくさい夫婦になってまるく古い  
万歩計ピッチが上がる春の風

大阪市 江城 修史

投げげる愚痴拾う相手の居る幸よ  
ままならぬ世間はまこと良い教師  
義理という裁きこの世にある限り  
凋落を諦め切つて舞う枯葉  
親と子が別々に住みつなぐもの

京都市 山本規不風

石鹼の匂いを消してから帰る  
遺産分け他所の話を娘が告げる  
旅びとが離婚へ向ける地獄耳  
姉さんを変な目で見る運転手  
見飽きてる裸だが映ると見るテレビ

高槻市 辻白浜子

組んでするお祝いすんなり値が決まり  
露天風呂のんびり浸って雨に会い  
わがままが通って女傑ものたらず  
値切りよい端数がついている売値  
フルムーン引退らしいのが混じる

島根県 榊原秀子

単身赴任いつか家庭科うまくなり  
音もなく降る雪が積む雪のかさ  
冬苺味覚をそそるだけの色  
返礼の便りが届く寒日和  
まだ二分の本心かくす吹きだまり

大阪市 神夏磯道子

ちゃんちゃんこたがいに笑えぬ齢になり  
ばあちゃんはなにも知れへんそれでよし  
この寺ものら犬がいた小雪舞う  
雪しきり大根うまい日がつづく  
桃の花女の孫を期待する

米子市 石垣花子

木偶人形人情話聞きあきる

不思議にも噂話が的を射る  
三回忌まだしめつばい小抽斗  
時々斜に割れて見たい箸  
上り湯は少し熱い目にする情

米子市 政岡日枝子

病身な兄には重い鬼瓦  
画廊出て何故か襟足気にかかる  
絵画展急にブローチ欲しくなる  
デスマスク鼻が高くなっていた  
スパイスが足らぬ男に頼られる

大阪市 天正千梢

飾り言葉どっさり入れてる知恵袋  
春うらら毒けぬかれた知恵袋  
針目の秩序さかけひきありません  
布袋顔でカミソリのような頭脳です  
大海で何を学んで帰る鮭

和歌山市 堀端三男

腕章が非情にさせるレポーター  
春を呼ぶ雪シクラメンを買いにゆく  
風花の舞う夜しきりに人恋し  
お互いに無欲になって歩が揃う  
足元にある幸運は見逃され

島根県 梅みどり

門札へあらたな歴史きざむ文字  
つるを折る十指の力命づな  
床柱みがけば映る祖父の顔

逢いにくる嬉しさ風呂を焚いて待つ  
塩壺のひび割れ亡母の指紋かも

近江八幡市

前川 千賀子

また冬を越した重みに耐えている  
さよならと受話器春など来ぬがいい  
春の雪鷺よ目覚むることなかれ  
しまったと思うあわてん坊のつくし  
淋しさに傾く春のやじろ兵衛

寝屋川市

柴田 英壬子

時間制の採用に要る保証人

雑草は雑草なりの自負がある

島の内通る細胞として生きる

アップルシードとつても夢のある話

豆の木の種をことしも蒔いておく

和歌山市

内芝 登志代

髪型を変えれば違う血が騒ぐ

花言葉春の息吹きへ素直なり

人を待つ楽しみがあり置き炬燵

神様が聞いてくれるという自信

借りた方ミンクでしゃあしあ旅に出る

岸和田市

古野 ひで

立春へまだ降り止まぬ雪の国

やつあたりやんわり姉が受けて呉れ

老いぬれば婦唱夫随の幸もある

久し振りストレス溜めた友が来る

泣くところは此処しかないのと手を握り

花いちもんめ瘦せているのは私だけ  
わたくしを欺しべんべん草の花

松原市

佐藤 藤子

人形にもなれず女にもなれず

せつば詰るとおかあさんおかあさん  
完敗の息子とにぎりめしを食う

神様を見事騙した豆の数

富田林市

田形 美緒

春の陽に誤解がとける雪ダルマ

母をじくす

出棺の吹雪に哀しさ限りなき

骨壺の軽さ天寿と慰めん

病院へ行けば逢えそうひと七日

バスタオル巻く間に切れた電話ベル

大阪市

本間 満津子

姑の眼鏡大きく見えすぎる

健康で親しい医者がない不安

デntaxを確かめている五つ玉

良いお湯につかって聞いている風の音

出雲市

園山 多賀子

右手骨折(二句)

虎の威を借りすぎた悔いケセラセラ

でんでん太鼓がわたしの指を慰める

金婚の夫婦のデッサン戯画となる

「婦唱夫随」などと金婚たわむれる

反芻に自問自答の眠れぬ夜

着飾つてみても飢えてる影法師  
格闘技好きな女で情熱家  
高知県 赤川菊野

キサラギの月から貰う薄なさけ  
ハチキンと言われ五人の遺児を育て

キサラギの空を駆けぬく詔の知らせ

大阪府 大塚節子

都鳥京の若者など知らぬ

例年に早い遅いと花だより

華やいだ人も見送る天寿なり

指先で内裏の太刀を抜いてみる

河一つ貌が違つた泉境

和歌山市 山川克子

言い勝つて気になる事は負けだらう

一日の朝の五分に慌ててる

ロボットを作つた僕等が首になる

奥様に口が裂けても言わないわ

だから気になるの教えてその続き

尼崎市 春城年代

あざやかな野菜の色に騙される

某月某日の自分をとでも嫌い抜く

白昼夢ドラマの嘘を知りながら

マジシャンの種はあばかぬ方がよい

かりそめの愛とよくよく知っている

八尾市 宮崎シマ子

真新しい衿の白さよ梅日和

残雪へ黄砂が降りて春近し  
趣味一つ持つて回りが賑やかで

ジョギングをポストが見てる折返し  
再会へ言葉足らずを少し悔い

米子市 澤田千春

手さぐりでやつとみつけた森の鍵

父の椿咲けば想い出かけめぐる

こつこつといつかトップになった亀

横穴の手型古代の謎を秘め

とび出して巣作りできぬ籠の鳥

西宮市 西口いわゑ

谷あいのあかり一つに母おわす

しぶちんの金庫の鍵は錆びている

玉砂利へ親王様の青い眉

サッシ窓開けて潮騒聞いている

雪もいいなあなたのマフラー暖かい

西宮市 奥田みつ子

髪洗う姑は童女になり給う

追い抜いて抜かれて春の日暮れ道

ルージュだけ松阪慶子と同じです

二の腕の白さに風のひとり言

柳芽ぶく水の都のふれ太鼓

和歌山市 福井桂香

花曇りわたしの鏡磨かねば

白を着る喜び秘めて朧月

空想の中でアマンと逢う真昼

誇りなき人はブランド買いあさり  
筋道を逸れない程に酔うてみる

奈良市 宮口 笛生

一人娘残念ながらくれてやる  
子に送る宅急便を詰めている  
何もせぬ一日だった腹がへり  
酒ぐらい煙ぐらいのたのしみで  
屑鉄にされる国鉄民営化

今治市 越智 一水

出世などよいとやさしさ妻はほめ  
実力を単身赴任のためされる  
水溜りそこから早春の雲見つけ  
好きだから歩幅をあわせようとす

島根県 堀江 芳子

聞されど夫の掌ぬくし胸ぬくし  
二人いて二人の顔になつている  
手袋の片方なくし春に会う  
あまえてる七十五歳叱れない

西宮市 林 はつ絵

珈琲に言われた方へ歩き出す  
盗まれたわたしの味でもてなされ  
ある時は悲しわたしの風車  
絵のような嘘だが許すしか知らず

島根県 錦織 文子

二人三脚まだまだ転ぶまいぞ  
結局は妻の肩持つ独楽の芯

三面鏡正直すぎて嫌われる  
いいお人だったと心に抱きつづけ

岸和田市 原 さよ子

人の和へ時には阿呆になつておく  
ほどほどの距離で友情保つてる  
メンバーが揃うと旅に出る話

淡路島の黒岩水仙郷を旅して

潮の香に育つ水仙たくましい

町田市 竹内 紫鏑

ワープロに作文力が追いつかず  
マスク脱ぐ捕手老かしの影はなし  
投了は優雅にあとは棄権する  
電気敷布カチカチ山の夢を見る

倉吉市 渡辺 苦句

雑煮腹ポンポポンと拍つてみる  
餅ふたつぶんの力を見せる腕の瘤  
覗いてる白い鼻毛にひさしぶり  
不揃いの綺麗な靴もお正月

寝屋川市 宮尾 あいき

旧友の訃報小雪降る日の故郷だより  
生きている我身神仏の御加護知る  
にらみ鯛おまえを焼いたは僕じゃない  
妻子いて父母いてその上何が欲し

東京都 増田 次章

トラブルがあるからドラマ面白い  
幸せは宿題明日へ持ちこせる

金持ちの愚痴あいつちを打ちにくく  
終電車となりはどんな一日か

東大阪市 齊藤 三十四

体操は好き算数にはが手でず

税務署の呼出し主人病気でず

後姿少しお腰が曲ってき

スナックで四つ切豆腐好きという

大阪市 北 勝美

鉢の梅枝の曲りも俺に似る

あきらめか悟りかゴールもう間近

乱れ髪これもフアッションかも知れず

白魚のニュースへ並ぶ若牛蒡

玉野市 小谷 仙山

口閉じて妻のぐち聞く春ごたつ

老いの腰明日へゆれる万歩計

閉幕になって言いたい事ばかり

一円貨まだ大正の夢を見る

羽曳野市 榎本 吐来

罪はないニセアカシヤに梅もどき

雪ちらり詩情に遠き位置にいる

真直ぐに生きた背筋が曲り出し

晩酌に昼の決心持って行かれ

大阪市 藤田 頂留子

ワープロで若さもどして自画自賛

泣かないで又逢うためのさようなら

円高の今がチャンスと旅行ピラ

人のする事や出来へん事はない

仙台市 川村 映輝

個人なら張り倒したい国がある

倦怠期単身赴任の陥し穴

古い二人字を教えてから辞書をひく

ボケた振り聞えない振り老い達者

七尾市 松高 秀峰

富む国に住んでサラ金追われて居

知恵のない頭で男の数え唄

黒猫の交通事故で逝った朝

建前で本音を伏せて嫁姑

和歌山市 若宮 武雄

その日から疑いぶかいお人好し

いい事もなく本当のマイペース

赤ちゃんをあやすからには鬼でない

筋道だッ筋だッ道だッという紛れ

米子市 菅井 とも子

夕暮れに出逢った鬼が離さない

どの箸がねても気にせぬ箸枕

一杓の水で鎮めた湯のたぎり

二人居るから喧嘩まだ出来る

寝屋川市 江口 度

角曲るまでは教訓生きている

欠点をつつくと欠点つつかれる

予言者の不吉な予言当りだし

自転車天国休日駅前商店街

鳥取県 金川満春  
雪しきり今日じつくりと聖書読む

五目寿司心が通う母の味  
顔色を見ながら北の島返せ  
二人来てメニユーは女へ委せおく

米子市 寺沢みどり

ジョーカーを擲んでからの風の向き

煮えたぎる湯に決断をせまられる

手相見の予言はずれた亡夫の旅

捨て切れぬ悪女の面をふところに

宝塚市 丸山よし津

寒空に火災の多い朝刊紙

多弁でも舌足らずでも残る悔い

祖父のオーバーナウく着こなし娘は出掛け

美辞麗句代理の祝辞が長過ぎる

諫早市 原田メイシユン

老骨を鞭打ちぎつくり腰になり

減反にみず穂の国も草だらけ

制限を守れば他車に追い越され

女房が折れ俺も折られて老いの坂

米子市 田中亜弥

民話の里いまはやさしい鬼ばかり

宣伝の声もうつろに夕焼ける

偏差値を用もまないのに聞いて見る

歳時記を退屈させぬ花だより

出雲市 吉岡きみえ

ふところ手どうにもならぬ寒二月  
年金の枠でおごらぬゴミの量

ツーカーの夫婦喧嘩も派手にやり  
沈む陽といっしょに歩道橋渡り終え

鳥取県 林露杖

色褪せぬ裡に棄てよう水中花

その気持ないのに握手求められ

一一〇分焰の宴茶毘終る

母の骨抱く車窓に寒の雨

大阪市 黒田真砂

かじかんだ手足が語る冬の詩

カーペットの温もりに合う淡いうそ

思惑が外れてからの軽い酔い

つかず離れず息切れもせず夫婦坂

倉吉市 野中御前

新年の音のひとつに雑煮箸

無意識にお辞儀をしてた寺の門

三変化三面鏡が笑わせる

渋柿に真実つくす北の風

新宮市 川上溪水

税通知我が家の予算吹き飛ばす

母というふろしき何もかも包み

百葉の長とは飲む人だけの弁

人の裏見たい眼鏡のくもり拭く

岸和田市 福浦勝晴

日の丸を掲げて視つめて思うこと

ふる里の水車はまわる五十年  
大盛りのどんぶりめしに生きる味  
学のない人から教わる処世術

米子市 青戸田鶴

雪の降るくにはんなりした人情  
つましく二月を水仙耐えている  
花のない季節だけど友がある  
複眼でみる筋書きは面白い

岸和田市 清野こう

もう呑まぬ夫に悲しさこみ上げる  
民謡の集い八十路も若返る  
節分の祝詞冷えびえ聞く社殿  
梅便り北はまだまだ雪の中

唐津市 仁部四郎

日めくり恋の骸を包めとか  
大学がふえて日本語また乱れ  
日曜の青空人を区別せず  
いじめいじめ徴兵制がないからか

唐津市 浜本義美

機械化の農家に余る米と人  
野の石も注連縄張れば拝まれる  
山悠々影を写して川流る  
店長がきて雑談の輪が崩れ

倉敷市 小幡里風

右の手の爪がつかない妻を呼び  
節分の鬼に死角が見つからず

立春へツクシの親子背伸びする  
知人の名前見つけた計報欄

神戸市 仲 どんたく

小康を得てます一病なだめつつ  
小奇麗に装い町の顔が無い  
禁煙の手持ち無沙汰のティールーム  
よだれかけ変えた地蔵の初春の顔

和泉市 西岡洛醉

孫と俺お伽噺の舟を漕ぐ  
背伸びしたから首がころり落ち  
とてもだが民話に成れぬ核の事  
祝盃の中で肩書酔いつぶれ

柳井市 弘津柳慶

うつむいてトボトボと靴さげ  
風邪熱へ独り暮しの哀れなり  
お燈明を揚げて今日を終りにす  
宿酔の水を頼む人もなし

大阪市 河井庸佑

後進に道を譲れとせかされる  
報われるその日信じて耐えに耐え  
結婚へ船頭多いのに弱り  
仲裁を互いに待っている喧嘩

倉敷市 藤井春日

明け暮れを童心に還り老い給う  
伝説に真実性あり訪うて見る  
お隣も向いも自慰の見栄っ張り

パバゴルフママはカラオケ僕ファミコン

鳥根県 大森 孝華

ろを囲みわかさぎ匂う里帰り

薬草の湯気ほのぼのと冬の窓

触れ合わぬ風がさえぎる雪の宿

名産は郷土の誇り梅が咲き

鳥取県 清水 一保

白旗をかかげて妻の座に降り

激戦の町議選を終えて

六選の重荷は骨髓までかかる

握手した手から滲んで来る闘志

硬骨漢神と対決して恥じず

東大阪府 森下 愛論

見て歩く女の夢に宝石店

女湯で叱られているオトコの子

内輪のもめごと世間がうるさすぎ

噂する奴が現われ眼のやり場

笠岡市 松本 忠三

名ばかりの店です子供相手です

行動の範囲というにおいお前

おいしいを口癖に言う母の老い

犬までが恩を忘れて時代かな

西宮市 野呂 鶴汀

座をはずす二人噂を越えた仲

小走りへ小銭の音がついて来る

飲めぬ酒一合呑んで不倫かな

病院に行けば社長も患者です

名古屋府 大林 曲ん手

越して来てこの景色で棲んでいる

悪役を買って妻でつつがなし

耳掃除ばつばつ春が来るらしい

先き先きはいいいんばかり赴任する

浜田市 佐々木 裕

人生が小金を貯めてから狂う

サクラサクサクラが散るの泣き笑い

掌を握る幸せだけを信じ合ひ

耳にたこ出来て老母の良い話

羽曳野市 中村 優

ある時は正義の味方になるいじめ

梅を見ぬ二浪の絵馬が真新し

プラトニックラブの影絵は疑わぬ

三枚目を仮の姿と知る鏡

羽曳野市 佐野 白水

小春日が老人を法隆寺展へ誘ひ

年号をよくぞ書いてくれてた百万塔

見物の足玉虫厨子から進まない

仏像もここでは拝まず見て通り

姫路市 松浦 輝月

北風が吹いて古里いろりの火

ジーパンの娘が耳朶を染め頬を染め

一日を絃はりつめて夫看護る

北の島まだ見ぬ墓に眠る母

涙もろくなつても損得だけは別  
川西市 松本 ただし

妻入院 (三句)

看病をしてもやつぱり粗大ゴミ  
眠れぬと言いつつ覗けば眠ってる  
気儘言う顔も子供らしくなり

出雲市 板垣 夢 醉

年金がネック再婚すすまない  
辻褄が合わぬ不倫の時間帯  
月に身をやつして逢いに来たおぼろ  
偽りと知らずに貸した膝枕

大阪市 塩田 新一郎

風邪ひいて本格的な寝正月  
肉食化いじめ方まで凄まじく  
昨日より今日の日差しの本の位置  
後悔を重ねて何が喜寿かいな

兵庫県 藤後 実 男

雑煮碗姑も嫁も餅が好き  
てっちりの湯気へ明日をもう忘れ  
大根の食べごろ親子の血が通い  
がらくたを山程積んで母の性

大阪市 町田 達 子

寒いとの子報裏切る陽の温み  
万歩計の足辿り着く中之島  
日溜りの句座一輪の梅に沸く  
手話と手話山茶花の道青春の道

ゴミになる紙を配っている男  
尼崎市 角野 かず子

慰謝料でもめてる昼のテレビショー  
藍染めが出合った水の深なさけ  
神木と知らずに蟻が列つくる

寝屋川市 平松 かずみ

こんなこと言われてみたい四月馬鹿  
縞の服脱ぎたい寅の片想い  
寒がりかスカッと脱いだ入社式  
四月です軽いリズムの裁ち袢

姫路市 大原 葉 香

タクシーの一人の客にある虚勢  
ロボットがやがて人間部下にする  
懐具合よいと街の灯がきれい  
灯明を電気にかえた空しさよ

大阪市 中西 兼治郎

ヨッコラシヨ起居連発の老いとなり  
踏切のベル日曜も休まずに  
日曜日祝日遠慮と言う切符  
日曜日だけ画家になる中之島

島根県 北川 民 子

手の痺れ糸巻ごときに叛かれる  
アドバルーン掲げて構えは崩されぬ  
いろはにほへと散りぬる祖母の恋  
まっすぐな紫煙のあたりを春という

鳥取県 中原 汲 香

カレンダ―の絵に花が咲き四月来る  
四月一日その日わたしは誕生日  
嫁の振るタクトに姑がついて行く  
円高が響いて来ないくらしです

寝屋川市

岸野 あやめ

悟りには遠い私のアマリリス  
若さに乾杯！ 御油断を召さるなよ  
さくら貝心に残る恋の疵  
老眼鏡嫁との距離を測りかね

弘前市

田中 叶

母と子の会話先祖の罪に触れ  
雪深い里に宅急便が来る  
缶詰を開けて貴様と俺とかな  
五割引次の日妻と来て買わず

羽咋市

三宅 ろ亭

掛け慣れて国際電話子と話す  
平国祭気多の神馬は春運ぶ  
大芝居できぬ男の嘘を聞く  
終電車行くらし下巻読み上げる

高石市

浅野 房子

穏やかに説得したのに根に持たれ  
暦見てきめた大安に裏切られ  
好き嫌いはつきり言つてうとまれる  
ほめ言葉耳は決して忘れない

尼崎市

西村 かすみ

ストローが二本きれいな恋で終え

お言葉に甘えてからの強い酒  
みせかけのゆとり社長の高笑い  
乱れかご悪女に変わる袖だたみ

和歌山県

寺田 裕美

方便の嘘が効くからうそがない  
膝にきた猫を失意の手が払う  
すねている猫が魚を嗅いだだけ  
意地を捨て男を捨てた老父の背な

岡山市

行吉 照路

プロパーのノルマは億に首を出し  
鈍行に行き止まりの支線だつてある  
ヒョットコとおかめの面を持ち歩き  
冬終る花芽の順序決めなくちゃ

姫路市

人見 翠記

カニサボのピンクが春の部屋にする  
郵便受見に行く庭の冬景色  
弾き始めは松の緑の撥捌き  
再会に古傷疼く冬の駅

倉吉市

広本文子

新月に直つ赤なうそを見ぬかれる  
ごつごつの掌の中にいる安堵感  
許すしかなくて花屋の前に佇つ  
北風は山茶花ばかり問いつめる

鳥取市

森田 熊生

母さんが来てすり傷が痛くなり  
待つことに慣れて漫画の中にいる

情報はみんな釣れると書いてあり  
下積みで父のドラマを書き続け

和泉市 岡井 やすお

民営と決まり勉強会盛ん  
金利落ち悪徳商法再浮上

おじいちゃんおばあちゃんほど慕われず  
大概の所は歩いて長生きし

豊中市 田中正坊

ロボットに金属疲労という不安  
ひとりでも一日三度めしを食う

連翹忌(二句)

小糠雨まためぐりくる連翹忌  
連翹忌名づけし友も今は亡し

尼崎市 奥山 美智子

回復期冬日が匂う風匂う

豆の木に登る自信が欲しくなる  
身辺整理みんな煙にしてしまっ  
つつましく老いて死にたし花を買っ

東大阪市 崎山 美子

成功につながる勇氣はたたえられ  
家族の輪囀話がおびやかす

敵であり味方でもある家族  
あこがれのひとの握手にうろたえる

鳥取県 新家 完司

恥ずかしい兄貴は死んだことにする  
約束があり少年は口つくむ

万全の備えに酒がぬけている  
自殺するひまがないほどいそがしい

大阪市 山根 いつを

意見する方も意見をされた過去

先さまがよろこぶ品は値が合わず  
妻の手がたてがみ撫でて牙をぬく  
生れたがさしたる用はなかりけり

神戸市 山口 美穂

義理チョコを手渡し少しだけ嬉し  
ひとり生きる女の涙はひとり拭く  
シクラメン水が欲しいという情  
美しく老いたし終生女です

和歌山市 中島 正博

信仰へ疑い持った不幸せ  
着飾って女便秘の話など

半世紀土と対話がまだ続く  
生真面目に生きてお金の使いみち

和歌山市 坂部 紀久子

明暗を分けた雪崩が白過ぎる

裏返せばみんな淋しい色を持つ  
筋道を通した分だけ回り道

信じ切れぬ余寒に怯えている蕾

高槻市 竹内 花代子

寡婦独り男のブザーへするチェーン  
たこ焼を頼まれて出る市場籠  
梅少し膨らんでます月参り

民謡のお囃子セーターに編み込まれ

島根県 松本 はるみ

寒いとは言わぬ一輪梅の白

かんかんがくがお好み焼きを食べながら

春という風のリズムに酔いしれぬ

四十年二人で歩ける花の下

樺原市 岩井 本蔭棒

人骨の破片の上にビルが建ち

人権はまたも一転無罪にし

目を覆い耳に栓して土耕す

豊田では懲りて飛鳥にまたやられ

福岡県 横地 雅風

鶏が居るから残飯作られる

寒かった暑かったで本読まず

寺の艶信者の汗に磨かれる

唐津市 田口 虹汀

読み書きも出来ぬ社長の立志伝

傘寿猶嬰鏢妻の処方箋

制覇欲捨てた男のループタイ

箕面市 坪田 紅葉

一言を添えてある賀状のあたたかみ

姉妹で父母の思い出夜もふけて

本音より感情が生き古希近く

貝塚市 行天 千代

平凡な日を送りたい初ごよみ  
老い寄れば冬の陽だまり医者ばなし

枕元昔からのくせ袖だたみ

岸和田市 芳地 狸村

どないにもならず神様仏様

マル優で貯金するのを疑われ

窮すればなんとかしてと神たのみ

和歌山市 後藤 正子

噂の二人へサーモスタット作動する

蟹気楼を確かめに行く線路

ラブストーリーやがて始まる花時計

神戸市 山片 紀雄

勤勉が叩かれている平和国

衣がえ春の野山はみどり好き

近道に関所があつて白い犬

島根県 松本 文子

問うことがあつて崩せぬ夜の正座

亡夫の星探しに冬の天馳ける

慕情一途に風花の舞うしきり

西宮市 藤村 宏子

温室でだまされたまま枯れてゆく

日あたりがよすぎでのびた影ほうし

柱時計に父のくらしがまだ残る

鳥取県 森山 盛桜

人をさす指は手袋から出さぬ

草履編む指をせかせる春一番  
それなりの言い分が有る干しぶどう

大阪市 古川 美津枝

ひとひらの雪だからこそ瞬時燃え  
エンピツの六角型に由来あり  
春立ちぬ自我に目ざめた向い風

吹田市 園田 文子

嫁ぎゆく里に残した窓あかり

笛太鼓はずめば揺らぐご神燈

お人よし母によく似た損なたち

豊中市 奥田 満女

食べて寝て何ぞええ事おまへんか

歯のない妻を笑う夫も歯がのうて

星が衝突借金取りだけ死なんかな

和歌山市 玉井 豊太

アツハツハア嫁ごを付けた滑り出し

活発な取引さかな生きている

此の分でいけば持ち株波に乗る

米子市 光井 玲子

そして春こころの笛も鳴り出した

一度だけ予告信じてみるつもり

みどり児に早や空想の青写真

倉吉市 淡路 ゆり子

けだるさの中で聞いている寺の鐘

りんご剥く胸のつかえも共に剥く

暖かいカルピスを飲む二人きり

鳥取県 土橋 蛍

珈琲が高くなっても飲んでやる

おぼろ月なんて私はひとりだろ

貯金したいのに免許証がいる

交野市 山本 テルミ

節分が部屋の空気を春にする

忍の字で老いの余白をはは埋めて

鯉節を削る音亡母の音

鳥取県 中原 諷人

逆境を越えた老母です吾が女王

石蹴りの石を捜している四月

本心の言えず雪解け早くなり

鳥取県 中原 みさ子

イミテーション本物にしている淑女

廻り道してから知った夫の良さ

スカートめぐり春一番のジョークかな

鳥根県 城角 鶏生

湯煙りにみんな美人に見えています

メーターは降車寸前はねあがり

立春の薄氷ふむ浜千鳥

和歌山県 天満 三千代

跳ね返る誰はばからぬ雑魚でいる

達筆を捨てて機械にまかせきる

団欒の旅が悲劇となった事故

高知県 松岡 三吉

チョコレート女はみんな仕掛人

苦労したお話指がきれいすぎ

ぜいたくと思う水晶米洗う

枚方市 二宮 山久

セーラスの調子の良さに買わされる  
出稼ぎの父の便りに春がくる  
生きてきた今日一日の神の前

島根県 石田 清泉

八十で天寿でしたとはかなし  
本棚に囲まれている身の安堵  
のろのろへ舌打ちをした身を恥じる

島根県 藤原 鈴江

結び目をほどけば元の他人かな  
数々の祈りの彩で千羽鶴

島根県 藤原 鈴江

残り火は誰にも見せず埋めておく

芦屋市 竹中 綾珠

本当に暇が出来たら足が萎え  
りハビリに行った翌日尚痛む  
梅の蕾日々ふくらんだ暖かさ

河内長野市 北上 喜醉

しんがりで卒業してもお墨付き  
若返り四十女のおさげ髪

河内長野市 北上 喜醉

事なかれ主義で窓口うまい嘘

枚方市 稲葉 星斗

布袋尊日本第一顔の腹(清荒神)  
布袋の片手をぬいでみくじ読む

枚方市 稲葉 星斗

釣りの会マル秘のエサも役立たず

尼崎市 伊藤 春子

真夜中にさめてひとりの糸車  
母逝った空ろが残る白い皿

尼崎市 伊藤 春子

亡夫の墓心当りのないお酒

大阪市 吐田 公一

淋しさをまぎらすゲームの老いふたり

花吹雪諸行無情の石仏  
聖書など読む暇もない金儲け

岡山市 井上 柳五郎

单身赴任酒量ふやし婚帰り  
あと味の悪いドラマで寝つかれず

息子より若い上司に二度の職

羽曳野市 田中 隆二

三人のうちの一人が知恵袋  
二ん月よ忘るるなかれ多喜二の忌

水仙が背筋を伸ばす冬の庭  
西宮市 津山 冬子

大寒を無事に今年も豆を撒き  
毛を染めてバイトの仕事まだやめず

ある日ふとカルテに謀反したくなる  
豊中市 上田 登志実

宗教もレジャー業者と共存し  
共稼ぎ五匹の猫が留守居する

そうですなね好きも嫌いも女偏  
堺市 柿花 紀美女

雪こんこ童話の雪が牙をむく  
木枯へ薬袋が殖えて来る

子等巢立ち記念の桐は屋根を越え  
高知県 曾我部 裕

高知県 曾我部 裕

高知県 曾我部 裕

カラフルなタオルで視野をふさがれる

新米と言うおにぎりをつ取り

灰皿にみかんの皮を積む女

明治から見れば私ら魔女のよう  
からつばの頭で頭痛など知らず

毎朝の鏡に亡母と逢う思い

我が運命変えた女が愛おしや  
だまされた時のキッスと同じ味

濡れ衣を乾す春風よ早く来い

シクラメンの奮命を受けつげり

電線の風嘆かない星を知り  
どうぞもうお構いなくと仰言るが

持って死ぬつもりはないが吝嗇でいる

円高も円安もない暮し向き  
大正も遠し大正村が出来

戒律の厳しさ終えて詩仙堂

丈山の詩書あり庭に猪おどし  
清水の舞台は下より見るものぞ

耳寄せて軒せぬ夜の寝息きく

春炬燵去年しまった日記繰る

大阪市 岡田ふみ

境港市 細木歳栄

寝屋川市 堀江光子

大阪市 板東倫子

大阪市 坂本仙吉郎

吹田市 茂見よ志子

吹田市 茂見よ志子

吹田市 茂見よ志子

喧嘩して泣く孫背負い梅の下

美しく老ゆる難さを知る余生

幸せは袖すり合える嫁と姑

三猿も謀叛のしたい時もあり

吊橋の春の心へ揺れはじめ  
仲人の話も持って来た宅急便

広報紙町の幹部に婦人の名

長男が品行方正でもの足らず  
白旗を上げる勇気が僕にない

負けて勝つ負けてばかりに思案する

八十と言いつつだけ嘘をつき  
町長も一役団体迎えられ

喜びの電話に自慢つけ加え

摘みたての苺が好きな白い皿  
手品師の鳩は自由に飢えている

何んとなく弾む心を見ずかされ

マンネリの生活を変えた子が生れ  
あの日から遠くに去って母の味

仏壇に無事を告げ  
口閉じて和を保ち

姫路市 丁坪サワ子

岡山市 岩道博友

大阪市 北山悟郎

岡山市 二宗吟平

米子市 茂理高代

高知県 小澤幸泉

岡山市 直原七面山

岡山市 直原七面山

# 自選集

米澤 暁明

灰色の人生夢がないでなし  
幼稚園りんごは赤と決めている  
大輪の意地がありますこぼれ種  
外国の豆で日本の鬼は外  
月まるし日記へ嘘が書けません

高橋 操子

世代という孫の考えゆるしかね  
正月があるから賀状の中の人  
娘の世代に替る次々新得意  
病んで知る世にありがたき娘の心  
医者よりも鍼の治療に助けられ

八木 千代

それでも歌おうとたくらむ冬の鳥  
極寒の朱を見おとしていませんか  
まよなかは西へあふれる分水嶺  
霜柱 土を鞭打つかのように  
いつ仰いでも見ていてくれる旅の月

小出 智子

ユーモアの真ん中にあるさつま芋  
じゃが芋よ良妻賢母にほど遠し  
里芋ころころ子も父親になり申し  
とろろ芋怖いはなしがまだ続く  
兄弟はひとりもない芋蛸なんきん

月原 宵明

耐えてきた事は言わない坐りだこ  
番犬の任務発情して忘れ  
酒好きの家系で好きなメンタイコ  
灯を消して老人荘の話しする  
シャンデリア素顔を見せぬ人ばかり

金井 文秋

春を待つプランに夢を詰め過ぎる  
情報過剰のテレビにも罪がある  
上に倣う脱税だから絶やせない  
肩書は社長ナンバーズリーです  
老人性疾患いやな言葉聞くと

尼 緑之助

簡単に反対決めるユニホーム  
歩き出すよろめき婦権背なを押す  
気まぐれな元氣と相場政治まで  
坊さんも人間だった京の乱  
日々炬燵では困ります背が曲る

藤 村 女

突然の別居に戸惑う老い二人  
いささかの戸惑いもなく脱ぐ女  
その次は聞くまい君の瞳が濡れる  
美しくそびえて城の持つ悲劇  
近松の筆は悲劇で終る恋

川 口 弘 生

牡羊の眼はダイヤの莊嚴さ  
朝三暮四 人間すらも餌に弱し  
灰色を認めて平和がつづく国  
お互いの白髪に触れて孫談義  
この姑の息子と思う日の隙間

正 本 水 客

人生を少し覗いた口をきく  
馬鹿な金使う支度が長くなる  
手袋の穴を気にして下手な嘘  
窓口に才女の顔は似合わない  
貧乏くじ引いたと猫を抱いている

小林 由多香

あいさつに単身赴任ふれておく  
先生が年下絆あたたかい  
波音を聞近蟹なべつつき合う  
団らんの窓を横目に自炊する  
新築のプラン田高来てくずし

黒 川 紫 香

制服がきちんと似合う入社式  
もう蝶が来るよと庭の花の私語  
春の風おいてけぼりにしないでね  
絶え間なく流れ疎水も春の音  
手に止る蠅は友達かも知れぬ

市 川 鱗 魚

湯豆腐の湯気紅梅はまだ固い  
花有情花はかしこい事を言う  
少しみだらな女で髪をよく洗う  
五月生れの亡母に指折るさくら漬  
さむらいの首で五月の人形師

本 田 恵 二 朗

拙宅に一泊された日の追憶よ  
ご夫妻との歓談下津井の夜が長い  
生々庵居に泊めてもろうたこともあり  
思い出を走馬灯にして師を悼む

児島与呂志志

誰でもがいじめの悪は追えぬだろ  
もうみんな忘れられてた戦友が逝き  
ひと言が老人の胸突き破り  
みじめから抜ける空気は暖かい  
春らしい音は大きな子らの声

工藤 甲吉

アメリカの悲しい花火大花火  
生まれると死に場所の無い核兵器  
逆さまに見てもやっぱいいびつな世  
双六の上がりは悲しいご臨終  
さし麵をふうふう吹いて春を待ち

大矢 十郎

喜びの里へ洗濯物がふえ  
たしなめる言葉も父の句集から  
頼みごと聞くにわざわざ腕を組み  
棒グラフ高い男の声は嘎れ  
いじめっ子だったいじめっ子の親も

野村 太茂津

北国の便り雪溶けパーツと春  
宿題の作品先生当て込まれ  
赦すゆるさぬ苦虫噛みつぶす  
自信を持たす為の相槌なら打とう  
心眼で見えぬずしりと怖くなる

長野 文庫

あわてまい一度は通るくだり坂  
同い年の葬儀に重い靴をはく  
金出して食うとき軽く箸をとり  
無雑作にまぜて屋台の味になり  
断わるならことわりようもあるものを

山内 静水

こつてりと塗ってお歳は言わはらず  
すねている横顔が可愛ゆうて  
野良猫がうちを根城に子を孕む  
弥陀仏にぬかずき私はろくでなし  
仏壮のバツジ善人面をして

藤井 明朗

一日が暮れる家族の和が戻る  
円満な城のひとつとこ子がそむく  
甘い儲けに人間の欲離れない  
節分の鬼も飛び出す孫の声  
雪の舞い外はきびしいかくれ宿

水粉 千翁

せせらぎに哀歎があり雲流る  
人生の胸突八丁ばかりなり  
対決の筆に七言絶句呼ぶ  
花道はまだ途切れないつもり坂  
盃に齢を沈めて呑み乾され

— 同人 吟 —

## 秀句鑑賞

— 前月号から —

波多野 五楽庵

テレビで雪に慣れない都会人の怪我続出のニュースを見、同人句の中に散見する雪を拝見して、豪雪地帯という宿命を背負って生活している一人として雪のとらえ方がこんなにも違うものかと思いを新たにしています。

豪雪を越えても葉書四十円

塩田 新一郎

弘前の積雪は一米ですが、一步山手に入りますと丈余の雪も珍しくありません。その雪を踏みしめてくる新聞や郵便の配達屋さんに感謝を申し上げます。葉書四十円の中にその感謝と驚嘆を。

苦言聞く酢牡蠣つるりと胃の中へ

谷垣 史好

苦言を聞いている時は食事が喉から落ちてゆかないのが建て前ですが、噛まずに苦言と一緒に落ちていった酢牡蠣の消化が思いやられます。「つるりと」が効いています。

来る来ない少女は指先から熟れる

林 瑞枝

愛してる愛してない、来る来ない、花びらをむしり続ける多感な少女の指先に「まだ上げそめし前髪の」と唄いはじめる藤村の詩を思い出しました。指先から熟れてゆく瑞枝さんのするどきに脱帽。

天に星地に花 わたしに五人の子

嘉数 兆代賀

この流れるようなりズムの中に川柳でなければ表現する事の出来ない詩が生き続けています。理論も説明も超越した川柳の醍醐味に身をひたしております。

見当が狂って指をまた泣かす

堀江 正朗

痛くした正朗さんには申し訳ないのですがこの「また泣かす」が嬉しいのです。下五字の大事さを教えられました。痛みの中にかくされたかすかな情緒が私をとらえて離しません。多分見当を狂わせてしまった正朗さんの思いがそうさせたのでしょうか。

鬼よりも豆ぶつきたい人ひとり

前川 千賀子

本当に憎んでいるのであれば節分の豆ぐらいですむわけがない。ある程度の甘えと馴れ合いが存在していればこそ豆ぐらいですませてしまう千賀子さんの愛情が裏打ちされています。どうぞお伴せに。

ああ夫婦遠い昔に拗ねている

稲葉 冬葉

「ああ夫婦」がいい。しかも昔のことで拗ねている、なんて素晴らしい夫婦なんだろう。

五七五の中に秘められた夫婦の歴史と労り合ってきた愛が読む人の心を打たすにはおられません。

とてもとてもとてもと自信仄めかし

小砂 白汀

謙譲の美德もここまでくればユーモアになります。顔の前で掌を振っている様や小鼻をふくらませている様子が有りありと目に浮かびます。

友達になりたい人が敵にいる

西口 いわゑ

この句を読んで花いちもんめの童唄を思い出しました。汝の敵を愛せと言ったのはキリストですが、敵こそ貴女を理解してくれる一番の味方なのかもしれません。

売家ありかつて聞こえていたピアノ

田中 叶

家を手離さなければならなくなった理由はわかりませんが、「かつて」の中に過去の繁栄ぶりがかがわせます。ピアノを弾いていたのはだれだったのでしょうか。作者の暖い思いやりが感じられます。

さいころの数が出過ぎて上がられぬ

坂口 公子

ほどほどの数でなくては上がれない人生すごろく、気負ってはいは長続きいたしません。程々のところでのんびり歩んで下さい。中七のあつかい方が見事です。

## 小林不浪人

東野 大八

不浪人、小林長三郎は明治25年2月23日青森県南津軽郡黒石町の野呂米太郎の次男として出生。小卒後、東奥義塾に在学中、母方の小林家の養子となる。義塾卒業後の大正3年黒石尋常小学校の代用教員となり、足かけ8年勤めたが、その頃の教え子に後の有力柳人長谷川霜鳥、金枝万作などがいた。

不浪人は明治43年ごろから蝶三郎の柳号で川柳に手を初め、剣花坊主宰の「大正川柳」に投句し注目されはじめた。川柳は兄の野呂冬山の影響とみられるが、津軽地方はもともと青森港の町年寄で、前旬附の大家落合九三子の流れをくむ者が多く、黒石もそういう土壌をもっていたのかもしれない。

「大正の初期、私の川柳の師井上剣花坊主

宰の月刊雑誌「大正川柳」の編集を吉川雉子郎（英治）と私が任されてやっていたころ、遠く青森から常に雑誌を投句していた小林不浪人君から「今度、青森県から川柳の雑誌を出したいと思うがどうであらう」と相談をかけた。雉子郎と話合った結果「いいでしょう、できるだけ応援します」と返事を上げやがて「みちのく」創刊号が生まれた。これが

青森県川柳発芽の第一声で、その「みちのく」は今でも「ねぶた」と誌名は改称されたが、現在黒石市からズーツと続刊され、全国でも長命では一、二を争う有名な柳誌である（青森と私と川柳。川上三太郎・東奥日報41・5・12付）。川柳ねぶたは、本年一月号で第四三三三号を数えている。主宰者中林瞭象。

さて「みちのく」は大正7年8月みちのく吟社を創立し、その機関誌として誕生した。

不浪人は雑誌発行に当り青森の奥村巨魁来（本名慶蔵）油川の鶴谷登佐森（本名磯治郎）の兩人にはかり、その協力を得たが、発行の仕事はすべて不浪人が当った。佐々木董々子（本名義満）市田世寒平（本名木造）工藤甲吉らが同人に加わった。創刊号は騰写刷り二つ折で粗末なものであった。しかし東京の三太郎に選を依頼し洗練された秀句が載った。

昭和8年5月活版印刷となり三郵便便扱いになった頃は、多士済々の同人陣を形成し、俄然、県下の川柳熱勃興の原動力となった。

しかし、戦時の進展で昭和19年6月「応召号」として二八八号で休刊する。誌齢は当時日本第二の長い歴史を誇ったものである。

不浪人は大正10年教員を退職し、東奥日報社に入社し、社会部記者となりジャーナリストの道を歩むことになった。教員から新聞人に転身した不浪人は、その環境と仕事で川柳家としての成長に円熟の度を加えた。

「不浪人は柳誌「みちのく」に句に、文に縦横の活躍をみせ、毎号連載の「ちび筆」と題する一文は、中央大家の句に堂々と批判を加える一方、中央柳社に対しても、その傾向

と編集ぶりを批判し、日本柳壇から等しく注目され、東北の荒えびす」と称された。

また東奥日報が木毎庵与太郎(同社編集長・俳号木林横紋)柳屋與三郎(同社記者・のち社長)の選で県新聞柳壇のハシリとなった東奥柳壇に、不浪人ものちに選者となって参加新人の発掘、後進の指導に当った。

かくて昭和の初めごろの県柳壇は百花燎乱青森、黒石両市はじめ、県下主要町村十三地区に続々川柳会が誕生。不浪人はくまなくこれらの句会に足を運ぶ一方、北海道、東北、関東、関西まで乗り出して大活躍した。

このなかで青森で第一回海峡親善大会(昭和4)翌年には第二回を函館で催し、これらの大会には三太郎、雀郎、水府、路郎、紋たらを選者に招いている。(「小林不浪人とみちのく」工藤甲吉、昭和47年稿)

毎年恒例の青森県川柳大会は、今年で40回の長きにわたっている。昭和四年から通算すると、戦時休催を差引いても五十余年間と地方新聞社の単独主催として全国にその例をみない息の長さは驚嘆に価する。

こうした天下の不浪人の実力を贅えて明治大正・昭和三代の著名川柳人を捉えた宮尾しげを編の「初篇昭和川柳百人一句」にとりあ

げられ、青森駅にての不浪人のスケッチが載っている。眉濃ゆく鼻下の髭に太ぶちの眼鏡の不浪人は、なかなか重厚温顔のニコやかな紳士に描かれている。「燕雀の評に任じて通いつめ」の句がそのバックになっている。

「小林不浪人君は現在の青森県を川柳王国の五指の一つに盛り上げたーいや、それより青森県下に川柳の灯をかかげた最初の人であった。勿論、彼の周囲に工藤与三郎や野呂冬山などがいて、彼を援けた方も大きい、不浪人の力がその大部分であった。これだけでも現在の川柳作者は、彼をあがめ愛してあげてもいいと思う。彼のともした「みちのくの柳燈」を爾来、保持した山田よし丸、後藤蝶五郎たちも彼あつての彼等であった。この句集はこうした昔のような静かな花がひらいてる。」(句集「みちのく」川上三太郎序文)

戦後、21年2月「みちのく」を新生の名を付し復刊後、不浪人は東奥日報社会部長等を経て同社を退職。「川柳に熱心すぎて、当時の社幹部の覚えめでたくなり、そのため新聞人の生命を短くした」(竹内俊吉)このあと、昭和14年無尽会社の青森支店長や、青森市役所の課長など勤めた。戦災で家を焼かれ、糟糠の妻と死別するなど、戦時中の厭な思い

出から解放された不浪人は、昭和23年1月「月刊読物社」を設立し「小林不浪人主宰読物」を創刊した。B5判色刷表紙の仙花紙24頁の文芸雑誌で、執筆陣は中央の川柳人南北、雀郎、鞍馬、塊人などが地元有力作家にまじって参加している。

しかし、太宰治の絶筆や彼の追悼特集などを出し、話題を集めたものの、社内の悪い奴にだまされ、六号をもって廃刊、家産のすべてを失った。そのショックのためか、その生命とも頼む川柳も捨て、不遇のうちに無為の数年を送り、同29年1月29日脳溢血で死去した。享年六十三。

不浪人の死後、彼の門下や友人親戚知己川柳人らによって昭和37年句碑建設委員会が結成され黒石市森山に不浪人句碑が建った。

あきらめて歩けば月も歩き出し 不浪人  
同委では翌年「小林不浪人句集「みちのく」」を出版した。竹内俊吉、三太郎、路郎、水府、周魚らが序文を書いている。この句碑も句集も、今も現役の不浪人の愛弟子工藤甲吉の奔走努力によって実現したものである。

#### ★次回は「延原句抄録」

# 誹風柳多留廿六篇研究 (二十四丁～二十五丁)

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄  
石田普一・南 得二・小野真孝  
本多正範・石田成佳・多田 光

故岡田 甫

406 みなと川菊の流れるおしい事

大屋 南北朝争乱のとき、南朝方の忠臣、楠正成が拱津の湊川で、足利方の大軍を迎えうち、衆寡敵せず、舎弟正季と「七生報国」を誓いながら刺し違えて死んだことを惜しんだ句。

「菊の流れる」は、楠木の紋「菊水」を言つたもの。

感ぜぬものこそなかりけり湊川

傍五・20

南 贊

官軍の柱を流す湊川

一一四・37

菊水の流れ仕舞ハ湊川

一〇三・4

多田 贊。母袋未知庵氏が旧「古川柳研究」

の創刊号から「川柳楠公記」というのを連載、後で単行本になったかと思えます。

岡田 同。書物展望社から出ました。

407 かねこの十郎ひんぼうらしくなし

大屋 金子十郎という名は、金子十両に音が似ているところから「貧乏らしくなし」と言つたまでの滑稽で、史上の金子十郎をとくに詮議するまでもない。

八木 贊。「キンス十リヨウ」おもしろし。

多田 同。「金子」という名前の人を「お金持か」

などとからかった経験あり。この句も十郎は関係なく、「カネ」―貧乏らしくない名前―と単純に考えている。十郎は実在だったでしょうが。

岡田 同。

408 一千字ツ、傘屋で売れるのどやかさ

大屋 同。「一千字ツ」というのは字胤がポツポツと売れることをいうのである。胤は竹の骨と紙を材料とするから、同じ材料をつかう傘屋でも作って売ったものであろう。

八木 贊。

鶴という字も舞って居るのどやかさ

二六・20

多田 同。岡田 同。

409 かんしんへ剣のやうな口で売り

大屋 同。「かんしん」は中国前漢の武將韓信。

韓信が若い頃、市中の無頼の徒にからまれ

て、市場で彼等の股をくぐらされたという、有名な「韓信のまたくぐり」を詠んだ句で、下七・五は剣のような厳しい口調で韓信に喧嘩を売りつけるという意。

南||『漢楚軍談』の「張良売剣説韓信」を詠んだ句で、張良が韓信へ剣を売る場面を詠んだ句と解します。

張良は口も剣で売付る

四五・5

つるきのやうな口で韓信へ売り

多田||礎解のように考えていたが、南さんの説か。

天五智・5

岡田||南氏説、ご明解多謝々々。

410 代句たろうと九郎助の額をほめ

大屋||吉原の廓内にある四つの稲荷のうちいちばん有名なのが九郎助稲荷で縁結びの神として遊女の信仰が厚かった。

この九郎助に吉原の女郎たちが、いろいろな願をかけて絵馬をあげるのだが、ごく少数の女郎は別として、句や歌を詠めない女郎たちは吉原へ遊びに来るへエケエ連中にたのんで代句を書いてもらってあげることになる。

この句は、吉原へ遊びにやって来た客が、九郎助稲荷へちよつと参つて、あげてある絵馬の句を「どうせ代句だろうが、なかなかう

めえ句じやアねえか」とほめながらながめてるところ。

九郎介へ代句たらの絵馬を上

初2

九郎介ハどうぞと思ふ願ばかり

多田||賛。岡田||同。

拾七・17

## 二十五丁

411 欲の有たけ聞てとぶ放し鳥

八木||「放し鳥」は放生会の放し鳥。

かい名を鳥に聞かせて放す也

二六・5

に既出。

死んだ者の戒名やら、その他いろいろ欲深にもろもろの願をこめてから鳥を放すので、鳥の方からは「欲の有るだけ聞く」ことになり、というおかしさ。

多田||賛。本句はおかしさですが、

放生会母ハ十九羽施主に付

傍二・25

は死んだ娘のための放し鳥というあわれさ。

岡田||同。

412 美しいはつかりの嫁二十七

八木||二十七は吉原の遊女の年明。遊女上りの嫁だから、針仕事はおろか、何も家事はで

きない。美しいはつかりの嫁である。

美しい花をちらすと二十七

一四・31

かみさんといわれはじめハ二十七

多田||賛。岡田||同。

天二・八・五

413 雪の朝おのれくく

八木||雪の朝、吉原からの朝帰り。おのれくくくと、おのれが三つあるので待つ人は三人か。そうすると、父、母、もう一人は女房か。おのれよくつもって見ると雪のどら

安二・4

雪の朝親父火箸をしやにかまへ

傍三・2

鈴木||賛。待つ人三人と限定する必要もない気がするが……。

南||「おのれ」の数で、その人数を示すとは良い思い付きですが、本句はそうではないようです。切迫した状態を表現するために「おのれ」を重ねた技巧の句かと思えます。

大屋||十七音にこだわる必要はないでしょう。「おのれ」とドナリつけているのは、親父だろうと思えます。

多田||賛。

岡田||同。



黒川紫香選

熊本市 永田俊子

藤井寺市 赤木和子

見栄張って女切ない芝居する  
咳ひとつこぼして話に距離をおく

夢のある話に傾くイヤリング

お喋りが何より好きな桜餅

糸底にたまる或日のノラの唄

尼崎市 福田礼子

おもろい夫婦を演じつづけて二〇年

夜型の夫婦で深夜に顔が会い

時々父の話を子に聞かせ

遠出して夫婦で探す路のとう

日曜は夫婦で座る珈琲館

高槻市 河瀬芳子

陽だまりでくるくる遊ぶ糸玉

絵馬の山 神の吐息がチラと洩れ

北風へ衿立てて聞く梅便り

美しく老いる手だてを女坂

紙風船ほどの情けの人と知る

くすぐってあげる男の自尊心

さあどうぞ心に鍵は掛けてなし

せせらぎに放つは無念なる訴状

二匹目の泥鰌を狙う神詣で

化粧品だけは迷わず高い方

富山市 舟渡杏花

母方の血を引く客の引きやらす

てらない女に戻る十三夜

飽食の猫ヒゲを落して気がつかず

ゆきずりのおとこが残す柿の種

ナースにもウツな部屋あり二つ三つ

八尾市 高杉千歩

般若心経あげて一夜を留守にする

存分に働いた日の茜雲

ウインドに春があふれて揺れる午後

むつかしい話逃れて春炬燵

慰めてそっと帰した春の闇

大阪市 清水康恵

それからの女の旅は終わらない  
花言葉女は信じ易いもの

シャボン玉するりと抜けて空に舞う  
精いっぱい咲いて待ちますシクラメン  
騙されて心に鍵をしてしまふ

高槻市 笠嶋 恵美子

薄口の味に馴染んで夫婦老い  
切り返してくるから若いなと思ふ  
こと欠かぬ話題世間を広く住み

医者よりも夫のいがい処方箋  
本心を知った日からの失語症

西宮市 紀市 郁 栄

花を盗んだ時効はとうに過ぎている  
人妻と逢う日の脈が乱れがち  
孫に似た子供の歳をすぐに訊く

おないどしでもないのでに妙にうまが合う  
トランプの好きな女にしてやられ

名古屋市 藤井 高子

四かもしれぬ花卉が赤すぎる  
化粧落してピエロゆつくり手を叩く  
トラブルの外でうたた寝する羅漢

樹に登ると足の裏まで見透かされ  
ぬるま湯に浸り十把を抜け切れず

長岡京市 木本 如 洲

底ぬけに酔えぬ明日を持つている

ファイナレを賭けた坂から鈴が鳴る

つまずいた階段にある白い壁  
てのひらの傷の深さに悔いがある  
一つひとつ憶い出がある手紙焼く

ダイエツト中ですうるさい焼いも屋  
ほどほどのつき合いだから長続き  
震度5の地ひびき立てて深夜便  
仕送りへ畑売ったは伏せておき  
初雛の主役は無心に眠ってる

熊本市 宇野 昭代

根回しになってた日々の積み重ね  
そしらない顔が何でもお見通し  
夫の笛信じて今日を生きて行く  
張り合つて見たが隣には勝てず  
新入社椅子取りゲームの仲間入り

熊本市 大川 幸子

竹光と知らぬ男の慌てよう  
熱心な恩師でしたと弔辞読む  
誰にも言えぬ恋をカーネーションは知る  
懐剣をチラリと魔女に隙がない  
妻に手をひかれて梅の古寺に着く

久留米市 鶴久 百万両

文学の鬼というのに几帳面  
止り木の境界線は社のはなし  
パスポートの赤で日本人が続く

滋賀県 久保 和友

雨の日展乳房に艶のない女  
雪おんな恩を返しに来たように

東子市 小山 悠 泉

父さんの手では作れぬ騙し船  
いっぶくへ構想を練る庭師の目

朝霧が晴れて絶景取り戻し  
噂の種仕入れて帰る市場籠

妻の風邪我が家歯車狂い出し

今治市 野 村 京 子

耳にあて遠い日もどる桜貝  
ふり向けばつる慕情の風ばかり

雪を見て少女きれいな死を思う  
男気はないと女が色っぽい

埋れ火を女が起こす火吹き竹

大津市 安 田 志 津

水墨の谷間へ一輪花を添え  
正直にふだん着で来た席の悔い

ビル谷間きゆうくつそうなお宮様  
蛇口から水のおしゃべり朝の幸

ネジまいた分だけ動く娘の時計

竹原市 信 本 博 子

着飾った言葉を脱げば「愛」一字  
どこへでも自由に翔べる雲が好き

読み出して心奪った山頭火  
幸せはコタツの中で読む便り

大空に鷲が描くハート型

鍋かこむ地酒がうまいかにの味  
曖昧な気持ちではない百度石  
黒百合にひかれて谷に下りて行く  
賽銭をはずんでみようか痛む足  
切れ味がよすぎて庖丁ごちない

吹田市 井 上 照 子

こわいもの知らずむらさき色の恋  
みれん地獄の割り符あなたに贈ります  
胸で鳴る鈴は人妻らしく秘め  
ジエラシーを合せ鏡がしゃべりだす  
旧姓に還れと胸に棲む悪魔

佐賀県 寺 中 三 枝 子

春雷がはじけて届く計の便り  
七・七忌語りつくせぬ和蠟燭  
一握りの早春妊って沈丁花  
春はやて花のたよりの七めぐり  
傷つけてついて畳んだ女傘

羽曳野市 吉 川 寿 美

静けさを耳をかすめる風に聞き  
交友圏せばめて視野が見通せず  
一步下がって細かいマナー盗みとる  
白塗の柵へ紅梅媚びて咲き  
その辺にもう出迎えの春の彩

和歌山市 桜 井 千 秀

伴せが余って愚痴がこぼれ出し

兵庫県 脇 田 米 朝

限らない未来を詰めたおもちゃ箱  
窓開けて春のリズムを吸ってみる  
おしゃべりの舌で墓穴を掘っている

西宮市 松本一郎

宴席の隅の男がよく騒ぐ

追従の笑いの中にある敵意

花屋から都会の春がやって来る

雑念はまだまだあつて写経する

尼崎市 丹下玉子

野良犬に情の皿を置いてやる

爪あげて父子の絆強くする

夫の出世心に願ひ米を研ぐ

悲しい時は女化粧に念入れる

京都市 松川芳子

テルテル坊主天気予報へさからえず

無料パス弘法さんも賑おうて

殊更に親孝行へ背伸びせず

雲一つ画いて童話が動き出す

島根県 小田川智重子

カーブなど投げて私を惑わせる

私にも科白を下さいパンの耳

判ついてしまえばセールスそつけなし

つまみ喰ひ金魚は告げ口などしない

守口市 森川まさお

昔読んだ本を見ている冬の夜

前列に座つて賛成ばかりする

害虫もそつでないのも人を逃げ  
こわれそつな人形遠くから眺め

米子市 小村てい子

移り気な種を九つ植えました

美しい距離で少女は恋を知る

たんぼぼの綿毛に託す隠し事

寂しくて赤を慕うて紛れ込む

尼崎市 山田保藏

信号を守れと孫に叱られる

真夜中に札を数える音がする

塾やめて野球をやれとボクのママ

守る気もないのに規則読んでみる

新発田市 上鈴木春枝

花鉄花の気持ちは無視される

あきらめへまず思いきり泣いてみる

意地張つた涙へハンカチ持たされる

ロボットに背き人間らしくいる

堺市 桜沢あかり

駅前でコントを拾う春の風

蛇口からポトリと春の音がする

自己主張しながら蟹の横歩き

喝采に敏感になる馬の足

熊本市 黒田緑

立ち止る耳に八方からの音

馬鹿になる日は関節もゆるみがち

忘却も時にはよしと負け惜しみ

子は苦勞言わぬが遠くからながめ

熊本県 高野宵草

白魚の指を飛びたつ蝶結び

てっぺんに着いて尺取虫迷い

編棒の夢をさました震度四

野に出よう貧しい僕にも春の風

大阪市 上田柳影

肩書がとれた同士で仲がよい

人生れ人死に冬の風しみる

いい知恵は歳の袋にしようである

確信を深める刑事の顔の色

尼崎市 兄玉歌子

同居する条件妻がくどくなる

ほころびを直して縁が深くなる

平凡な暮しで家は借りている

ペン皿に見掛け倒しの顔がある

愛媛県 八塚三五島

めいめいが気ままに朝を食って出る

小言よりましと相槌うっている

気をとり直すレインコートの襟を立て

悪友がいて披露宴盛り上がる

堺市 小西小雪

積んだ薪残り少なくふきのとう

春雪に何やら楽し気配する

言い訳が更に心を曇らせる

昨日今日同じ機嫌の風車

静岡県 渥美弧舟

パソコンを孫に学んで若返る

風邪に寝て終日ラジオ聞いて暮れ

さり気ない言葉が友の心刺す

粗板へ妻のリズムも春めいて

高槻市 川島諷云児

やり場ない怒りは妻を的にする

逆境の涙を隠す蛇の目傘

泣かない約束で逢おう戎橋

京の雨濡れとうおへん裾からげ

岡山市 黒住美穂子

まずまずの余生茶漬をさらさらと

さりげなくくれた笑顔が気にかかり

言い負けて心洗える事もある

期する事あり本心胸に秘め

豊中市 辻川慶子

小春日に安産の知らせ梅匂う

シクラメン背伸びしている雪の窓

再会のと きめき鏡ふきながら

ブランコがひっそり揺れる冬の月

鳥取県 太田幸枝

ふんばって生き抜く男振り向かぬ

恋灯り波のうねりに碎かれる

舟舵を嫁に任すと風いでゆく

娘のくれた手袋だから温かい

静岡県 永倉僕川

論されて言葉の鞭に耐えしのび  
申告を隠せぬ馬鹿でまだ借家  
逢えるかも知れぬ予感へ回行道  
合格へ溜息が出る納付金

岡山県

小林 妻子

葉なぞいらぬ母の背をさする  
良し悪しはあの世で鬼が決めること  
皺くちやの小さな影についてくる  
無人駅あわ立ち草に占拠され

熊本市

北川 一進

兎も角も辞書引いて書く初便り  
酔って来たパパへ坊やの「ハイお水」  
再婚に犬も付録になつて来る  
ネクタイを結び直したプロポーズ

大阪市

藤森 小雅子

鈴振ってから闇笛を訊いている  
訳ありのビールにホンネ訊いている  
毒舌を茶の間のテレビで共鳴し  
たちこめた紫煙の中の妥協案

今治市

月原 つくし

ライバルを意識してから出来た欲  
啖呵切る女と飲もう落日の日  
敵のない男前歯が欠けていた  
知りすぎた女十字架負う暮し

青森県

荒田 つる

うたた寝をまたいで電源切るテレビ

ダイヤルを争う孫もない孤独  
乗り越した駅に忘れたい傘  
新築の屋根カラフルな村となり

兵庫県

東浦 砥代

年金を十二で割って読む寒さ  
愚痴聞いて愚痴をこぼして夫婦酒  
淋しくて出た盛り場で知る孤独  
点滴へ思い出ばかり駈けめぐる

尼崎市

森安 夢之助

町並へ取り残された藁の家  
誰れ彼れと下駄が揃った鬼の留守  
働いた汗の匂いは頼母しい  
ロボットが叛乱したらどうなるの

尼崎市

鈴木 良征

泥鰌掬いで鬱憤晴らす平社員  
ビルの窓煌こうとして富士眠る  
口の悪いおやじで流行るラーメン屋  
笹鳴きを今年も聴いている長寿

尼崎市

野瀬 昌子

一日が永い隠居の日向ぼこ  
名案を母の愚痴から教えられ  
黙ってても顔見てわかる母の愛  
叱られて尚すがりつく母の膝

旭川市

朝倉 大柏

真相を知ってますます腹を立て  
開店祝い過ぎて値札をつけ替える

沈黙に男の重み認め合う

コネのない扉他人の貌をする

貝塚市 池田 寿美子

預金通帳と睨めっこしても仕方無し

それでも宇宙へ翔び度い二十一世紀

黙々とシャンソン聞いて蟹つつく

終着駅時計を持たない独り旅

唐津市 浜本 治幸

一寸した仕草で妻の気が晴れる

二次会で遂に本音が出てしまい

世話役になって俄に経を読み

雑念を払えぬままに夜が白み

兵庫県 奥野 テル

北風を庇い合ってる夫婦の灯

いい話ばかりを運ぶ春の風

白足袋の律義涙にもろい日も

角封筒明るい声も封じこみ

鳥取県 羽津川 公乃

寅年に男でよかった孫を抱く

初孫の嫌煙権は認めよう

公害の煙ゆつくり村を攻め

あいさつも握手で足りる友が居る

出雲市 小玉 満江

トランプは結局孫に負けてやる

上等のカップで寡婦は紅茶飲む

おしゃべりなカラスが村を飛びまわり

羨望のまなこ背に受け天位とる

唐津市 相葉 あき

思い出を噛みしめて聞くシンフォニー

豊かな日父の写真が笑ってる

最夜中のベルは訃報の臭いする

粟田を読む成人の頭数

守口市 結城 君子

透明なブルーの視野へ豪華船

ひそと咲く梅へ観光バスつづく

漁火を夫のカメラにさらわれる

アンケート九〇パーの幸福度

吹田市 栗谷 春子

国会で貧乏ゆすりの多い国

お見舞にわざわざ固い八ツ橋を

システムキッチン二月三日は塩いわし

真っ白で鶴を折ったら寒くなり

京都市 森川 春子

法要がすめばガヤガヤ寺の中

福豆に落花生まく不動尊

外づらのよき娘の機嫌風さらう

土産ものくれたその日に又上げる

高槻市 芦田 静江

枷とれて嫁の優しい昼の膳

風運ぶ話に平和揺さぶられ

接点が合うと平和な風になる

ファッションに今年を漁る春の風

そのけそのけロボットが通る  
お札を山と積んで薄くなる情  
ふるさと西の方なり暮れなずむ  
新しがり屋今日はどこまで飛んだやら

鳥取県 西川 和子

足跡を辿って同じ穴に落ち

いつの日か足跡は消え糸も切れ

又一つ足跡が増え雛が増え

山坂を越え頂上の陽は眩し

鳥取県 さえき や え

雪を見て女のペンが強くなる

秘めている妬心がのぞく冬のぼら

北風が好きふる里に母が居る

七坂を越え暖かい風に逢う

愛媛県 石手 武

チェンソーの唸り与作の唄を消す

松葉杖日にちぐすりを持って余し

ひと昔前の記憶で迷う街

立ち読みに本屋活字を盗まれる

岡山県 山本 玉恵

返し縫してしたたかに女居る

からくりの糸がほどけて女病む

風止んで鏡の中の静と居る

兵庫県 森脇 和子

土曜日の午後がドラマになることも

バラ一輪部屋の空気をかえました  
指切りの指あたたためて夢を積む

唐津市 浜本 ちよ

友達で居よう態よく断わられ

裏表ない人何処か頼りない

女優さん傘の角度も心得る

大阪市 亀井 円女

お話のうまい人程聞き上手

順番でいつももめてる子沢山

大風呂敷も憎めん人で耳を貸し

唐津市 小峰 邦子

懸命にネオンの中で子を庇う

抱擁の鼓動に月の眩しすぎ

背を丸め祖父が作った竹とんぼ

岡山県 矢内 寿恵子

労わりの歩幅が温いフルムーン

冬の天風も心も渴ききる

下積みの火が執念で燃え上る

大阪市 山田 妙子

水炊きも嫌われ出して花便り

口下手もかかる火の粉は払わねば

雪と鴨仏が住んでる湖北好き

河内長野市 大西 文次

この辺で遊んだことのある小川

頼りないお医者も薬だけはくれ

その内に夫婦喧嘩に使う皿

島根県 森山英子  
アフリカへ少し分けたい雪だるま

風花は忘却からのメッセージ  
利子つけぬ年末調整過納金

大阪市 渡部さと美

先取りの菜の花漬けて春を恋う  
目の粗いザルで噂は聞き流す  
傷深く仏を探す遍路笠

豊中市 小畑よし子

夕映えの五重の塔を振りかえる  
片っ端引き出し開ける孫がいる  
ねじ巻かぬ柱時計が亡夫の部屋

十和田市 阿部進

定年の無聊にできた坐りだこ  
ゆっくりと飛車を取る手がにくらしい  
伴せに過ぎると愚痴がこぼれ出す

鳥取県 津村八重子

うきうきと女悔いなき厚化粧  
孫のため残す植樹が太く伸び  
香水を落して母の貌つくる

富田林市 片岡智恵子

こぼれ種春の陽仰ぎ背のびする  
病葉の椿寛に寄りかかり  
暖房が野菜の四季を嘘にする

西宮市 秋元てる

色白で何時も噂の種を蒔く

徳利を振って男の甘え方  
少しずつ歩幅を広げ春を待つ

年齢と条件だんだん不利になる  
姑が来る知らせに家中大掃除  
受験子に二月の空がのしかかる  
尼崎市 小熊江美

良心を先に眠らせ今日終える  
石一つ庭の表情決めている  
新築のふとんをかけ終り  
長岡京市 山田葉子

寒がりの娘が雪国へ嫁くという  
青い空越後はきつと雪だらう  
新興地大きな庁舎でんと建ち  
茨木市 堀良江

綱引いて翔ぶ子転ぶ子自分の子  
絵に書いた伴せ夫が裏に居る  
りんご園行く先ざきに父が居る  
弘前市 真喜内實

春の風二十歳の裾をちらつかす  
漫画でも今年の寅は勝っている  
寒餅が届いて里の味になる  
尼崎市 的場十四郎

あるだけのお皿を使って妻の留守  
両隣り犬が留守番してくれる  
手造りを楽しく皿にのせる嫁  
尼崎市 古川幸次郎

豊中市 一瀬福一

ポケットにスリル待つてる花名刺

さわやかな顔で患者に嘘を言う

さりげなく身の上話をきかされる

静岡県 青柳金吾

伊勢丹のチラシ財布が葛藤し

初産は祖母の予感の女の子

万分の一の予感で籤を買う

堺市 矢倉五月

曇天に人恋しくて受話器取る

積立の満期に嫁くとは限らない

振り袖にお腹の虫も行儀よい

岡山県 千原理恵

悲しみを救うてくれた夕茜

お荷物にならぬ老後を考える

新しい都会へ素顔を捨てにゆく

大阪市 井上白峰

相槌を打てば女房得意がり

長手紙追伸だけで用が足り

調子良く昇った梯子が降りられず

広島県 田村新造

初釜の客華やかに下駄揃う

牡蠣いかだ水鳥も来て波静か

野を行けば春何の花か匂う

富田林市 友碓雅子

一回で美人になる様なレモン風呂

コマーシャル唱って今日も風呂呂平和

ライバルは美人戦がやめられぬ

自己顕示テレビカメラへ工夫向け

弾千発的を射るまで撃ちつづけ

知らぬ地へ行って存分羽根のぼし

ライバルが隣席にいて落ち着けず

和解した友と一緒に歩幅踏む

岡山県 戸田種子

裏木戸を開いて家の奥に来る

漫画本なら雪明りでも読める

夜もすがら自販機雪の路照らし

鳥取県 乾喜与志

餌を漁る野狸に会う朝配り

柳句載る朝刊へ茶を酌み直し

高冷地野菜出荷の雪払う

唐津市 筒井朴竜

鼻筋は無いが心の温い嫁

おもちゃ箱ママの嫉を嘆く声

信号が赤です風の百叩き

佐賀県 米倉彩女

金婚式似たもの夫婦に祝われる

粉雪にホームを出れば妻が待ち

条件をつけて別れる二人仲

尼崎市 木下義嗣

富田林市 松本 今日子

豆まいて春の足音待っている

刃こぼれの庖丁女の歴史かも

妖しさについて負けましたお月様

鳥取県 土橋 なるお

当たたら怖い宝くじを買う

胃袋を鉄で切った人に逢う

食卓に嫁の訛が盛ってある

羽曳野市 麻野 幽 玄

風邪で寝て孫学校のことばかり

老舗でないから店名よく変り

風花を見舞うて来たが別れなり(姉逝く)

岡山県 松本 元 江

古木からわき出るように新芽吹く

川の流れもゆるりゆるりと暖かし

孫二人てんやわんやの日が暮れる

大阪府 秋田 茂

幸せをじっと見守る古時計

一息ついたら明日に向って歩こうか

日々それなりに四天王寺の鐘が鳴る

堺市 宮本 かりん

離乳食かあさん先に口があき

こたつから口出しをする雪日和

蔵の中ロマン飛び出しそうな箱

岡山市 中嶋 千恵子

黒幕に踊らされてるヤジロベエー

眉墨を引いて決意の女坂

風の子と赤い頬への園児たち

桜井市 前山 美恵子

住宅フェア売る人買う人急ぐ春

くやしくて眠れぬ夜に本を読む

くぎ一本子供のパッケであたためる

鳥根県 菅田 かつ子

おしゃべりが無口な彼を連れて来た

ほほえんで苦い言葉を飲みこんだ

さらさらとおいしそうに食べてくれ

鳥取県 乾 隆 風

つばくろ来るから二人の巣を教え

どん底を語る蓮根掘りさぐる

亡父の手袋へ油が滲んでる

鳥取県 福田 あや子

トップ行く蟻が迷った水たまり

鬼の首どこへ置いたか二日酔

根の苦惱春の花芽を信じ切る

竹原市 岩本 笑子

着飾って見ても犬には白と黒

星がまたたくと泣けてくる男

菜の花の春待つ色で媚びている

尾宮 弘 治

昨日まで英雄今日はピエロです

鶴を折る色紙を膝に日向ぼこ

二階への手摺りを嫁がつけてくれ

寝屋川市 立床晴風

正論を言う言い方が気に入らぬ  
定年で使い捨てとは驚いた

土管から星を眺めている孤独  
来客へ母の櫛がかしこまり  
鬼の面外せば僕のお父さん

岡山県 富坂志重

美辞麗句辞典にはない国訛り

藤井寺市 菊地繁男

春が来て又会いましたおひな様  
旭川ポツポツ春が見えて来た

近道はやはり他人も知っていた

岡山県 富坂志重

長靴が生甲斐感じる雨の日に

迷うことなく春の日へ雪を掻く

弘前市 齋藤 劼

髪染めてシルバースhirtに目もくれず  
そっくりと言われて亡母の故郷に行く

じゃっば汁犬にも分けて寒しのぎ

大空と手を結ばせる風の糸

倉吉市 田中 八太郎

愛媛県 西山 えつ美

犯人と同名だから気がひける

ボヤで済み野次馬なにか物足りぬ

春来た和小川も風も耳打ちし

高知市 北川 竹 萌

あちこちに訃報の多い大寒波

故里の豪雪を踏む葬の義理

三球団高知へ春をつれて来る

唐津市 中山 ふじ枝

小正月まだ手つかずのプラン持ち

補聴器がうるさい世間に引き戻し

話し好き涙もまじえ我れに酔い

鳥取県 田村 きみ子

お釈迦さまレンゲの花へおわします  
前向いて暮そう過去はちりぬるを  
不束な嫁ですなどと言わないで

大阪府 横山 為子

デジタルの順序通りに出て消える

新潟県 高野 不二

子沢山みんな嫁いで猫と住む  
雪だるま片目のままで解けて行く  
吹雪く夜は風呂も熱めの鍋料理

和歌山県 森 三枝子

ふしん場は焚火囲んで無駄話

千鳥足形くずれた寿司を揚げ

道筋を聞いてる方が地図を持つ

島根県 山 根 志保子

何処までも過疎は過疎なり雪積もる

味気ないコーヒーを飲む紙コップ

古里は安泰若い木が育つ

樺原市 西 本 保 夫

現代のおとぎ話が夢が無い

おみくじの一度は信じて見る好運

老眼鏡拭き出すと怪しくなってくる

米子市 川 上 より子

殻を脱ぐのに時間のかかる蟬を飼う

道行きの傘に模様がほしくなる

指人形切切切と春を恋う

八尾市 松 下 蕉 露

名刹の門を閉ざした古都の税

頭数やつと揃えて草野球

もう飼わぬ言いつつ犬の医者に行く

鳴門市 八 木 芳 水

突き放す情けもあって広い海

長電話掛けて手紙の札を言う

人混みをいともあざやか車椅子

出雲市 小 日 金 房 子

漬物の甘辛ほめて置炬燵

長話ポケットベルがせき立てる  
披露宴祝辞に小さなうそもませ

指宿市 渡 邊 伊津志

セロテープ貼った封書が気に入らず

ストローの先を競り合うシャボン玉

拾われる迄を哀れに啼く子猫

青森県 波 ただお

冬眠のガマ羨まし厳冬期

忙中閑除雪の後に飲むコーヒー

二週間ぶりお日さま仰ぐ眩しくて

山口県 高 崎 雀 声

野次馬を満足させて全焼す

年度末あまった予算工事中

終業のベルで女をとりもどし

出雲市 竹 治 ちかし

苦労買う気持にさせた愛一つ

平凡を幸と感じる年齢となり

会葬の喪服が臭うナフタリン

八戸市 島 田 昭 治

もう一度怒鳴って欲しい人が灰

他人の眼ばかり気にして乗り遅れ

かしわ手を沢山打って妻頼み

愛媛県 宮 尾 みのり

親方日の丸下にいくほどみな呑気

高価薬だからすこうしいみたい  
ゴミ入れに秩序があつて几帳面

大阪市 大倉圭介

話に夢中コーヒーさめました

鉛筆に人それなりの削り癖

大倉圭介

筋道を通す男の口説き癖

唐津市 山口高明

餌の店ちらほら見えて海近し

同じとこ繰返し読む目の弱り

公衆電話春の会話が詰めて有る

唐津市 山口高明

同じとこ繰返し読む目の弱り

今治市 山田宝保

富田林市 大沢三四子

芽を出したばかりにジャガ芋嫌がられ

今治市 山田宝保

雨だれの音耳につく昼下がり

富田林市 大沢三四子

頬杖の鼻先猫が走り抜け

今治市 山田宝保

もみ手してわびる口からうそをつき

田辺市 染道佳明

ハガキなら妻に読ませて用が足り

泉南市 坂根流水

広告は塾のお誘い二三枚

田辺市 染道佳明

春近し御詠歌ながれる坂のぼる

泉南市 坂根流水

ストープに向いふくらむ梅の花

鳥取県 横山房子

知恵おくれお地藏さまと同じ顔

泉南市 坂根流水

ふんばりをつけて余生に鞭を打つ

鳥取県 横山房子

建国日反対するが休みます

京都市 小林英子

門限のない母の胸温かい

鳥取県 横山房子

いとおしむ文と添寝の月あかり

京都市 小林英子

ゴッホ展知ったかぶりのベレー帽

大阪府 榎本落児

一人寝の窓に優しいお月さま

京都市 小林英子

看護婦に御主人ですかと念押され

大阪府 榎本落児

熟年も恋してみたい港の灯

京都市 小林英子

子は明日の親は昨日の虹を描き

兵庫県 野々口ゆう也

甘酒にぬくもる茶店雪景色

大阪市 高橋八重

淡々とその日を話す老夫婦

奈良県 和田萬里

ふくらんだお餅見ている孫の顔

大阪市 高橋八重

寒中に白梅紅梅ふくれ出す

奈良県 和田萬里

好きな本一氣に読んだ若い頃

大阪市 高橋八重

休刊日朝の仕事も早く済み

奈良県 和田萬里

あやまちを隠したメッキ喋り出し

鳥取県 鈴木ふみ子

コーヒーの香りおしゃべりみんな好き

鳥取県 坂本雪路

パーゲンで心の皺を少し押し

鳥取県 鈴木ふみ子

雑踏のリズムが合わぬ雨が降る

鳥取県 坂本雪路

同棲と言いい嫁の座を温めてる

鳥取県 鈴木ふみ子

雪の日の一日柳誌と炬燵です

鳥取県 坂本雪路

雪の日の一日柳誌と炬燵です

鳥取県 鈴木ふみ子

雑踏のリズムが合わぬ雨が降る

鳥取県 坂本雪路

散髪の台に坐れば眠くなり  
肩書が邪魔で入れぬ店がある

岡山県 牧野秀香

酔うままに本音つらつら並べ立て

窓際で眺める社会暗く見え

岡山県 福原悦子

冬空に心を洗う一人旅

焚火してゲートボールの輪がなごむ

高槻市 笠松高子

春霞水子地蔵に手を合せ

ひとり居は糸屑付けたまま暮し

島根県 岩田三和

春風がバラバラめくる日の早さ

かやぶきの屋根からぬける煙だけ

岡山県 平田たけよ

音痴の夫が詩吟に自信持つ

運勢はどうであろうと今日の無事

八尾市 椎尾公子

ちらかしの癖はなおらぬ夫婦とも

国文出才女売れない原稿紙

大阪市 富岡温子

車内売り刻々移る地方色

大相撲終えスケジュール一つ消え

堺市 安西カネ

はぐれ鳥餌を深して庭にくる

吾が背中ふと見たくなる夜半の月

餌やった野良猫裏口からのぞき  
実年で眼鏡かけたりはずしたり

西宮市 待田麻黄

読むたびに慈愛のこもる母の文

風呂の中コミュニケーション広場です

富田林市 田原久子

道しるべさがす女のひとり旅

アメリカのポケットにあるアメと鞭

岡山県 伏見すみれ

親切な駅長発車を待ってくれ

三歳の知恵が足つき提げて来る

大阪市 末永芙久枝

病氣して読んだ医学書役に立ち

立春の空から雪花春遠く

富田林市 新開千代女

忘れてた誕生日娘に祝いされ

白髪の老婆に出会う田舎道

岡山県 後安ふさえ

夕食を一寸はずんだ年金日

張りこ寅何を聞いてもくびを振り

大阪市 今西静子

真すぐに打つ釘曲る日のあせり

関係はないが名前を知っている

和歌山県 北山凡太

切羽詰まって抜け穴捜す慌てよう

呢愁になつて本音が出てしまふ

茨木市 井上盛雄

厳寒に慎ましい蓄梅古木

手応えがあつて力の入るドー

高槻市 宮野四郎

風邪ひきが隣人愛の証になり

信仰と勘違いする拝観料

堺市 江辺天鳳

税務署の窓口にいる可愛い娘

吊るところも無いほどもうカレンダー

堺市 江辺天鳳

大輪の夢をいだいて土いじり

玄関で一寸つまんだ清め塩

泉佐野市 大工静子

変つたなと背をなで妻をあわれがり

古里の田んぼに大きな喫茶店

川西市 野村静雄

すっぱんの血液型を問うて飲む

ぼちぼちと貯めて細ぼそ食いつなぐ

岡山市 池田半仙

孫が病む替つてやれたらなと思ふ

気が知れて言いたい事が言え

奈良県 山村有佳

あの箇所を知りたいばかりに立読し

子供等に聞かせし童話孫に読む

大阪市 川原章久

微力でも我が家のたがは締めてある  
円高の差益は何方の懐に

島根県 園山世似

禁煙をした苦夢の中で吸い

我流だが心ゆたかに花を活け

大阪市 喜多佐津乃

綺麗なら何でも置いとく紐の端

話題にはいつも乗らない父がいる

吹田市 西岡豊

発言をすれば白矢がとんでくる

ひとことに根掘り葉掘りの母心

大阪市 宮下とし

近づけば羅漢も何か言いたそつ

梅干しと茶がゆで祝う米寿です

河内長野市 植村喜代

風上る窓に岩湧今日晴れて

彗星が運んでくれる夢の数

静岡県 丹羽定次

万歩計一歩一歩の積み重ね

墓参り思いがけない人に会い

西宮市 飯森泰世

花でさえ思い思いの方をむく

たたく音布団太陽吸うたらし

島根県 喜島ノブ

鶯も部屋で咲く梅知らぬだろ

鉢巻きがゆれて通つたオートバイ

立春を小鳥も肌を感じてる  
禁猟区鴨も悠々餌拾う

京都市 山脇正之

福豆を年程にぎり笑いこけ  
息子から母に読ませる本が着き

高槻市 大池好古

おせちにもあきて茶漬のうまいこと  
夜泣きそば受験の窓に笛を吹き

岡山市 杉本伊久栄

入学は近し桜もあわてだす  
疲れ寝が酒の話に起きてくる

藤井寺市 福元みのる

割勘でいつも円満女連れ  
新聞を読む眼しよぼしよぼ初老かな

大阪市 橋本悦子

立読みの第一番はマンガ本  
餌やりで九官鳥に逃げられる

兵庫県 伊沢午郎

バラのような女で男を迷わせる  
生花展知ったかぶりの評を聞き

大阪市 工藤陽子

お正月又寅さんに逢いにゆく  
賑やかなお通夜世話好きだった叔父

大阪市 田中節子

寒行の太鼓夜空に遠く聞く

岡山市 後安久江

小春日に布とんを干して花を替え

和歌山県 田中隆積

荒波を避けたばかりに風来坊  
幹事とは勝手な理屈のまとめ役

大阪市 平井露芳

県人会俺より偉いのがずらり  
長生きをするぞと鱒食べさせる

兵庫県 円増貞子

自画像の過去を美化する彩を溶く  
どちらにも義理を立ててる低い腰

吹田市 山田里子

街角でふと見た君の白き髪  
合格をしました春がもうそこに

益田市 里本たかし

すすきの穂の高さを貨車が通過する  
水道屋蛇口をゆるく絞めてゆき

鳥取市 若林一止

肝も目も都会で抜かれユーターン  
温暖の子報は雪崩連れて来る

八尾市 鷺見章

着膨れて柩見送る路地の葬  
還暦の酔いは地酒を良しとして

兵庫県 山崎敏子

古都税でにらめこはもうおよし  
電話料値上げで挨拶ぬきにする

泉佐野市 真崎浪速子

初孫が寝ています静かに願います

烈帛の聲に寒さも飛ぶ稽古

新宮市 船越正

父の忌に父母に似た顔笑い声

閉店後マネキン達よ寝れますか

大阪市 高森文子

豆煮えてほっと一息背伸びする

家族愛湯タンポに似た暖かさ

大阪市 堀口欣一

追分という名の通り雪の坂

明日があるといううれしさのトリス呑む

守口市 若林市郎

節分のすし丸かじり持てあまし

あの時の招待券が餌だった

大阪市 服部頼一

咀嚼して何でも食べと言う名医

欲しくない顔で酌する娘は持たず

大阪市 神崎貴代美

名作は何度読んでも胸をうち

喫茶店通い新聞熟読す

大阪市 北脇清治

近頃は小さな声で福は内

熱心に読んでる本は皆マンガ

広島市 花田繁子

老友は互いに便り遠くなり  
待つ間読む本で意外の物知りに

大和郡山市 岡田寿美礼

花の種風に抱かれて未知の園

吹雪舞う秋田の娘に心馳せ

島根県 高尾よし子

さりげない老いの助言が座を丸め

三猿になつて老後を生きて行く

米子市 宮本佳女男

入院の余徳悲願の煙草止め

杞憂でもその慎重さだけは買う

兵庫県 山崎亀男

数がふえ中身を減らすお年玉

豆よりもお菓子がほしい鬼がいる

静岡県 丹羽定次

手紙読む母の口元良い笑顔

世間読む隆元言葉まとを突く

豊中市 額田明吉

明日ありと思う心を花に問い

頑固も老い恥ずかしながら入院し

ジュニアの部 枚方市 二宮拱子

かぎおきば家族以外はひ・み・つ

お母さんかぎもちながら長話

枚方市 二宮正彦

鳥の声ピーピーチュンチュンもう春か

ふとつてるとなりのおばちゃん雪だるま

# 愛染帖

## 橋高薫風選

戦略として雨風の日に訪ね  
親と子が背を流しあう名場面

茨木市 井上盛雄

蛇皮を脱いで眩しい別天地  
ハイテクも人間も呑む五七五

米子市 八木千代

夕ぐれの間から月と重ねけり  
この中に春を動かす星がある

米子市 堀江光子

廃線ときまって切符よく売れる  
衝動買い本であろうと悪い癖

高知県 松岡三吉

爛漫へ金いる話しなさんな  
平和主義妻の下着も洗います

和歌山市 神平狂虎

鈍な刀でとても酒好きで  
うどんそば君も男になるんだぞ

岡山県 福原悦子

中流の意識で白い花が咲き  
戻れない若さを想い道譲る

島根県 堀江正朗

箸の先なに摘んでも春匂う  
盃に浮かせる花を描く臉

唐津市 田口虹汀

モールスのように七草たたく音  
鹿の目に若草山が燃えている

岡山市 川端柳子

母さんを探す泣き虫おこりんぼ  
マりは手をそれて本心打ち明けぬ

豊中市 上田登志実

義理子ヨコの代りと妻のプレゼント

早ばやと花満開のアーケード

藤井寺市 福元稔

夫婦岩春にしつかりしめなおす  
質問を利用し意見ひけらかす

米子市 沢田千春

雪とけて椿ふくらむ父の忌よ  
月の夜の砂の涙が光ります

富田林市 藤田泰子

母女お面をときどき間違える  
城下町古くからある豆板屋

米子市 菅井とも子

鶯に先を越された花鉢  
神様が渡ると消える虹の橋

愛媛県 石手武

過去はもう忘れる水が澄んでくる

鳥取市 森田熊生

正座して淡い希望が視野にあり

富田林市 岩田美代

寒天に一言こだまかえらない

島根県 松本文子

行先を知ってる靴を履いている

鳥取県 土橋はるお

盗む気がなくて不倫の仲となり

西宮市 草刈墮駄

生きる事の輝きを持つ車椅子

指宿市 渡邊伊津志

涸れた井戸もう児の顔が写らない

鳥取県 川崎秋女

善人はいとも手軽に決意する

唐津市 浜本ちよ

和歌山市 西山幸

笠岡市 木山遠二

寝たきりの天井が暮れ日も暮れる  
寝たきりが怒ると笑う妻である

五つ六つ恩師に呈す露の臺

守口市 結城君子

朝の鏡に葬頭河婆が一人いる  
薄氷の神経みんな足のうら

静謐やたぎる湯のおと床には椿

青森市 工藤甲吉

こぎん刺し雪雪雪に明け暮れる  
集金もとうとう来ない猛吹雪

大阪市 小出智子

夫の知らぬやさしさがある物干し場  
清め塩人の絆は断ちやすし

寝屋川市 岸野あやめ

家の中ひとりぼっちが二人居る  
妻の心を疑ってみた事が無い

寝屋川市 平松かすみ

フルムーン地獄めぐりもして置こう  
あんなことこんなことまで写真帳

今治市 月原宵明

世の中は春マシユマロとチヨコレート

夏屋川市 宮尾 あいき  
御自分の御店みたいなコマーシヤル

堺市 高橋 千万子  
ぼたん雪音もなく来たラブレター

吹田市 栗谷 春子  
便利さに愚弄されてる新居です

守口市 森 川 まさお  
絵馬堂は風吹き抜けるここにあり

吹田市 後藤 火鳥  
冷蔵庫大きなものに妻の夢

尼崎市 春城 年代  
きさらぎや影踏みなどをして帰る

唐津市 山口 高明  
墓守りの嘆き造花が色あせぬ

岡山県 土居 耕花  
天皇に殉死するまで生きとろう

岡山県 小林 妻子  
鯛焼をふきふき食べている地蔵

大阪市 中西 兼治郎  
馬券などあるとは走る馬知らず

鳥取県 新家 完司  
居酒屋の壁の日付が変わったよ

尼崎市 春城 武庫坊  
盗み酒時計三時でとまってる

吹田市 西岡 豊  
別居した子の表札が光ってる

和歌山市 三宅 一郎  
哀歌が塗り込められて城の闇

近江八幡市 前川 千賀子  
つくしんば春の狩人らに摘まれ

米子市 政岡 日枝子  
結び目をほどけば明日が消えている

松江市 竹内 寿美子  
曳舟や一途に岬恋しがる

米子市 茂理 高代  
想う人あつて流れてゆく椿

茨城市 堀 良江  
紙吹雪緋鹿子に降り髪に降り

伊丹市 樫谷 寿馬  
花落つる音に一瞬たじろぎぬ

益田市 里本 たかし  
日記帖の白い頁を読んでゆく

米子市 小西 雄々  
マルクスを読んで男の気が晴れる

鳥取県 乾 隆風  
鶯が啼いて挫折の顔洗う

高槻市 笠嶋 恵美子  
花曇り傘は一本あればいい

西宮市 奥田 みつ子  
コンテナの並ぶ港に春洗し

田辺市 染道 佳明  
春の音運動靴を脱ぎなさい

堺市 桜沢 あかり  
立春大吉卯を立てた五黄の寅

藤井寺市 赤木 和子  
あいうえお順で園児の代表に

弘前市 波多野 五楽庵  
アドリブを笑ってくれぬ鳥たち

小松市 小森 靖江  
心機一転放哉の句を抱いてみる

出雲市 竹治 ちかし

自信過多周りの濼を深くする

広島市 望月 はるひこ  
資源濫用地球に穴を開けすぎる

唐津市 仁部 四郎  
雛の宵男児ばかりでカツカレー

唐津市 岩崎 實  
月と舌へだてるもの何もなし

島根県 堀江 芳子  
孫の瞳の輝きへレンケラー読む

唐津市 久保 正敏  
生き残るだけの余生は唯救し

今治市 月原 つくし  
ドラマにはならない砂を一握り

富田林市 松本 今日子  
かけがえの無い愛だからだまっとく

高槻市 河瀬 芳子  
プライドの白さで匂う胡蝶蘭

岡山県 千原 理恵  
炎の女雪の女と戦いぬ

岡山県 松本 元江  
暁の空ほのぼのととして広し

名古屋市 越村 枯梢  
戦犯は鳥居を出たり入ったり

西条市 片上 明水  
朝の市みどりが二つ三つ増え

吹田市 井上 照子  
春の色濃くなり子らの声ひびく

唐津市 小峰 邦子  
重い石抱いた細腕繁盛記

鳥取県 土橋 螢  
昭和生まれでまだ戦争が終らない

八戸市 島田昭治  
振り返る足跡薄きに涙する

米子市 田中亜弥  
割箸よ素直に裂けて下さいな

米子市 林荒介  
踏絵からハンカチだけは汚さない

倉吉市 田中八太郎  
はち巻は宝くじなど考えぬ

和歌山県 北山凡太  
自分さえそれと分らぬ恋がある

堺市 小西小雪  
惚れっぼさ血液型と決めている

河内長野市 植村喜代  
石焼きいも石の心になれぬもの

大阪市 今西静子  
金儲け下手な夫婦が顔に出る

名古屋市 藤井高子  
冬の雷計の一枚が掌に残る

大阪市 山田妙子  
苦勞性1から10まで知りすぎる

新発田市 上鈴木春枝  
すんなりと過去が許せる今の幸

岸和田市 芳地狸村  
紙漉きの嫩しい彩に冬の川

島根県 榎原秀子  
恋人のように逢いたい人に会え

岸和田市 古野ひで  
小石積むひとつひとつにある折り

東大阪市 津雲一  
小正月喜の寿を越えて小豆粥

和泉市 岡井やすお

マラソンはびりでもラストスパートし

島根県 小砂白汀  
枝を折る風の味方としてみよ

高石市 浅野房子  
水ぬるむ頃故郷の流し雛

島根県 岩田三和  
小言いウコップの水をこぼしつ

西宮市 上念小菊  
菜種花寒さ凌いで咲くを待つ

米子市 光井玲子  
終りの絵まだ画けなくて揺れている

兵庫県 東浦砥代  
倦怠期へのセーター仕上らず

唐津市 筒井朴竜  
友招し隙間背に坐す山頭火

唐津市 中村今子  
追羽根を乗せて逃げてく交換車

唐津市 中山ふじ枝  
こだわりは柳の歯一本欠けしこと

羽曳野市 中村優  
マドンナもときに裸になるドラマ

島根県 西村早苗  
つぶやきが一杯はいつているグラス

和歌山県 桜井千秀  
花吹雪いつとき華やく吹きだまり

和歌山県 山川克子  
右左どちらに転んでも悩む

島根県 福田あや子  
終章を飾る模索の旅つづく

兵庫縣 脇田米朝  
式済んで初めて識った夫でした

豊中市 額田明吉  
四五針と縫う間も野戦憶い出し

和歌山県 坂部紀久子  
雛の軸悲喜交々に同い年

米子市 小村てい子  
どしゃ降りの道が女の念を消す

大阪市 亀井円女  
口裏をうっかり合せ残る悔い

和歌山県 三谷周三  
分身の息子の悪は皆背負い

島根県 板垣夢酔  
シャボン玉二人の愛がそとと吹く

西宮市 松本一郎  
兄弟の顔が揃って悲しい日

豊中市中校塚三丁目13-15  
投句先 二560 橋高薫風苑(ハガキに3句)

\* 橋高薫風苑(ハガキに3句)

### NHK川柳募集

課題「友だち」 選者 森中恵美子

締切 4月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 4月27日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

春城 武庫坊

瞳を見つめたただそれだけのレモンテイー

野村 京子

「小さな喫茶店に入った時も二人は／お茶とお菓子を前にして／一言もしやべらぬ」もう五十年になりましょうか「小さな喫茶店」という当時の流行歌を想い出しました。今もこんな純情な恋のあることが嬉しいですね。お二人の恋が実ることを祈ります。そして半世紀たったら此の日のこと思い出して下さい。

群集を抜けて自分の顔になる

福田 礼子

朝目を覚まして妻と母親としての顔が始まる通勤に雑踏の中を抜け職場へひとりひとり接する人に心をこめた応対、夫々に顔は変化する。仕事を終えやっつと解放されて自分本来の姿にかえり、余裕の時間を持った時の安堵感、満足感、元気で働ける幸福を味わっている女性美がそこにある。

葬いの家で雨傘もたれ合い

永田 俊子

亡き人を偲んで空も涙雨、玄関わきに傘を次々立てかけて一見乱雑のようだが、もたれあつて立っている。傘は人々の温い心の支えのようである。下五の「もたれあい」が効いている。

間違つた電話の中へ鳩時計

舟渡 杏花

「うち違いまつせ何番にかけはったんどす」先方から指摘されたたん受話器の中に鳩時計のぬくい音が入つて来る。一瞬とがった気がやわらいだ。鳩時計は精神安定剤だったか、瞬時の出来ことを巧くつかんでいる。でもこれから氣イつけまひよな。

踏切りを渡ると朝の顔になる

木本 如州

起されて泣き起き、寝ぼけまなこのままトーストとゆで玉をコーヒード流し込んでコーヒーをひっかけ外に出る。まだ脳の半分はお休みのようだ。踏み切りまで来るといつもその辺りから出勤の顔になる。さあ七人の敵がいるぞ、がんばろう。

血統書つきの犬が皿なめる

結城 君子

××種の血統証明書付きでトツテモお行儀もよくお利口なんですよ……と低い鼻を高くして令夫人はおっしゃった。頭に赤いリボンをつけた着を着ているワン君、お手を差し出して一応お利口ぶりを振りまく、しかたがなしいかなワン食を食べ終るとベロベロ皿をなめ廻す。風刺の効いたユーモアの句。

部屋部屋に白髪残して母は去に

相葉 あき

茶の間の掃除を始める和白髪が落ちている。この間から来ていた母のだらう客間にも廊下にも、しばらく一緒に過した老母をなつかしむ娘の温情。この次に来た時は愚痴をこぼさず温かく包んであげよう。心温まる句です。

年末に夫婦げんかの姉も来る

山田 妙子

十二月も二十日過ぎるとなんとなく落ちつかず人の出入りも多くなる。子供達も冬休みになるとあわただしさが倍になる。そんなある日、子無しの姉が飛び込んで来て「クヤシイワ、チョット話聞イテンカ」挨拶もそこそこ早く口で毎度の一件をまくしたてる。一応浮世の義理を果すために坐つて聞かねばならないが、用事が次々に返事もうわの空、年末の取り込みがリアルに描かれている。

酒好きな医者ほどほどに飲めと言う

脇田 米朝

この先生川柳やつてはるのと違いまつつか？うまいこと言つてまんない。「飲まん」とけと言つてもかくれて飲むやつちゃあいつの酒は愉快やからな」。老先生の独言。ほどほどで先生何合位ですか、お酒にまつわるユーモア心理描写満点。

自分史にいくさばかりが幅をとる

さえき やえ

小学校以来戦争に巻き込まれた苦しい悲しい日々、子や孫にこんな目に合わせたくない悲顔が含まれている。



# 追悼 中島生々庵先生

昭和61年2月17日歿 89歳

戒名 瑞龍院蓬山憲雄居士

## 弔 辞

西尾 栞

謹んで川柳塔社名誉会長故中島生々庵先生の御霊にお別れを申し上げます。

昭和四十年七月故麻生路郎先生の歿後、同年十月、川柳塔社を創設され爾来十有余年、川柳塔社主幹として、我ら同人誌友の御指導育成と塔社発展に御努力下さいましたが、昭和五十六年五月病に倒れられ、その後、鋭意御療養中のところ、この度八十九歳の天寿を全うされました。安らかな眠りにおつきになりました。私達は慈父の如くお慕い致しておりますが、身のひきしまる如月の今日、お別れする淋しさ悲しさに打ち沈んでおります。

先生は大変趣味の多い方で、一芸に秀ずるものは万芸に秀ずるの譬えの如く、行くとして可ならざるものなしの努力家であり実力者でありました。

昭和十四年、麻生路郎門下として入門以來不朽洞会理事長となり、昭和十九年に大阪府文芸賞を受けられました。昭和四十二年より五十年まで八年間NHK川柳部門選者として活躍されました。そして昭和五十五年、日本川柳協会理事長として川柳界に君臨されました。

昭和五十一年三月に「生々楽天」という句画集を発売されました。直原画伯の序文に、「先生ご夫妻は舞踊に川柳に絵画に、常に趣味を一つにし、之だけ全ての点で一致したご夫婦も少ないのではないだろうか、その意気の合ったところが立派な後継者二人もの男子を育てられたゆえんであろう」と言うておら

れます。これは随所作主とか、歩々道場といった禅語の、その時その時を精一杯に生き抜くという心に通ずるものであると、画家であり、僧籍におられる玉青先生のお言葉であります。こんな立派なお手本を示して下さいました。生々庵先生とお別れするにあたって、私達は先生に御恩返しとして、川柳の発展と人間形成に努力することを誓わねばならないと思うのであります。先生の創設して下さいた柳誌「川柳塔」を大切に、益々発展することに努力致しますから、先生ご安心して安らかにお眠り下さいませ。同人六〇〇人を代表して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生さようなら

昭和六十一年二月十九日

合掌

忌籠りの愈々暗き水雨かな

栞

## 嗚呼 日川協二代目理事長

藤 島 茶 六

私は片山雲雀、中島生々庵の二代に亘る日川協理事長に副理事長として長い間お仕えして来たことから、その任でないのに三代目を継ぐことになりましたが、今日まで大過なくその責を果して来られたのも、この二人の理事長が敷かれたレールの上を走っていたからで、私にとってこのお二人は恩人とも言うべきでありましょう。それだけに雲雀さんを失い、今また生々庵さんを失ったことは誠に痛恨の極みで、その悲しみは私や川柳塔のみなさんばかりでなく、全川柳界の嘆きであり、また大きな損失でもあります。

思えば昭和五十五年第四回日川協岡山大会に引続いて翌五十六年第五回金沢大会には、何れも生々庵さんを理事長として開催されましたが、その頃から健康が思わしくなかったか、岡山大会では私が理事長を代行し、また金沢大会の折は開会寸前の協会総会で理事長を辞任されたので、とりあえず私が理事長に推されて以来今日に至っておりますが、その頃から生々庵さんの静養は続けられていたのではないのでしょうか。

八十九歳という御高齢だっただけに、特に

私にとつては生きて行く目標だったのに誠に残念無念という他はありません。承れば今回の御逝去は安らかに大往生とのこと、羨ましい限りであり、ありし日のあの高邁な温顔が眼に浮かぶばかりであります。きっと今頃は

### 告 別 式

日時 昭和61年2月19日午後1時30分から  
場所 和光寺和光殿(大阪市西区あみだ池)



かの地で雲雀初代と生々庵二代目の会談が開かれ、その後の日川協をなじり合っているかわかりません。  
茲許謹んでその御逝去を悼み、心から御冥福を祈るものであります。 合掌。

祭壇正面には、生々庵名誉会長の心なしにお疲れの見える遺影が、それ故一層親しくやさしく見つめておられる。

南区医師会役員一同、川柳塔社主幹西尾菜大阪心齋橋ロータリークラブからの白菊黄菊の生花をはじめ、式場は菊の花で埋められる。厳粛な儀式は読経の声とともに盛り上がり導師の鎮魂の祈りの中で、参加者は故人との思い出にひたり、ひたすらご冥福をお祈り申し上げる。

生々庵先生の川柳への何よりの貢献は、昭和四十年七月、麻生路郎先生亡きあと、その門下生をまとめて川柳塔社を創立、基礎を確立して第一歩を踏み出されたことにある。川柳塔誌のタイトル文字が金子塔として永遠に残り輝き続けることでしよう。

南区医師会、南区小児科医師会各会長の弔辞のあと、葬儀副委員長の西尾菜主幹が心のこもる別れの言葉述べられた。

川柳と医師会関係の会葬者は千名を越え、弔電も二百通以上を頂戴する盛儀で、お見送りすることが出来た。

## 名医・生々庵氏をしのぶ

磯野 いさむ

島の内には名医ありと教えられて、しつこく腸を患う幼い長女を妻が背負い、巖谷の中島小児科の門をくぐったのは、昭和二十六年だった。満員の待合室で長い時間まって診療をうけ、ひとり子の過保護を叱られて、養生法を説かれ、妻と子が帰ってきた。

その名医・中島蓬太郎が川柳雑誌社の生々庵氏だと教えてくれたのは、番傘同人の医師川村伊知呂氏だった。健康保険の適用がなく何回かの通院で高い費用を払ったが、幼児はめきめき元気になったことを、妻は今もよく覚えていて、幼児も一児の母になった。生々庵氏が、岸本水府氏と揃って大阪府文化賞を受賞され注目されたのは、柳界が戦争災害から立直った頃の慶事だった。

路郎氏歿後、川柳雑誌社解散の報は、私たちを驚かせた。岸本水府氏を失いながらも「番傘」は近江砂人氏を新しい柱に前進していただけに――。

しかし生々庵氏によって、新川柳塔社が生れ、川柳雑誌と路郎精神は受け継がれて、生々庵、砂人の二代目は大阪柳界を背負って起

った。

柳界振興と交流のため二人は、しばしば歓談の場をもち、雲雀、宣介、塊人、橘次氏らを加えた席で、柳界の横のつながりを強化するため、日本川柳協会設立の企画を立てた。

川柳塔も番傘も動き日川協は名古屋で創立総会をもった。砂人と生々庵の結社を超えた友情が、実を結んだ。

昭和五十五年、故近江砂人氏の句碑が福岡県飯塚市の公園池畔に建ち、九月十四日除幕式が行われたとき生々庵、小石夫妻は遠路わざわざご出席された。私は飯塚駅に夫妻をお迎えして式場へ案内、建立者安武九馬氏に紹介して、固い握手が交された。

も一つの肩書、日川協理事長として式に臨まれた生々庵氏は式のと、九馬番傘九州総局長と懇談、九州柳界挙げて日川協加盟の促進方を強く要望され、九馬氏も何分の協力を約された。

日川協の第十回全日本川柳大会が、来る六月八日、初めて九州の地へ渡り、別府温泉で全九州一丸となって催される。

七年前、生々庵氏が福岡へ足を運び、日川協のあるべき姿を説き、九州柳界の協力を求められた理事長の夢が、いま実現する。

その大会の模様を知って頂けず、いま生々庵氏を失ったことは残念である。謹んで冥福をお祈りする。

## 哀悼のことば

去来 川 巨城

流れるでもなく、湧くでも無い縹渺の川霧が一面に立ちこめて、まさに、昏れんとする山村の早春がそこに在った。

小京都と称ばれるにふさわしい情景をいつもたえているのであるが、いまは、墨水の妙とも謂われよいたずまいが静かな誘いを囁いているようでもあった。その入口ともおもえる丘陵の一隅に、森鷗外ここに睡るの碑があった。その人の歳月の多くを知らず、名声だけが絆ともいえるだけの距離ながら、何故か、この武人文士の碑に接したとき、直ちに通じる一人の風貌を思い浮べていた。姓は中島・名は蓬太郎・号して生々庵というその人であった。

《明治晩年の鷗外・昭和実年の生々庵》とこんな紹介文がまことによく似合うその人は柳友仲間の殆んどがひそかな畏敬の念を抱いていたろうと思う。温和な微笑の中に溢れている現代の叡智が静炎となつて、先達の風格を漂わせておられたチョット近寄りたがたいとおもふことしばしばであった。これはひとり私だけの刻印で、普く多くの方々の、正しいうつくしい情趣の影像を傷つけてはならぬ。

閉じると臉にある面影に、教えを受けると  
いう形でその一端をひもといてみよう。

「無韻の詩」という語があるが、聚めて、  
組立て、創造することは以前の実在を、つね  
に注視しておられたのであろう。発表される  
作品はいつも、虚飾を捨て、冗漫を避けて真  
如のみ躍いた。

にこりともせぬ貫禄で医師・倫理

そうだ、この人は国手であった。人に与う  
るに、ことばよりこころを。神に代つて人の  
苦しみを除いてやるの本業であれば、この地  
上に遺すものに素晴らしい人類愛があつたこ  
とだろう。多くの先達の中に、誇らず、語ら  
ず、形なき無韻の詩を数多く遺して下さる人  
もあつてよいではないか。

訪う気になれば二時間もあれば足る。他用  
の名を借りての欠礼の中で訃音を知る。まこ  
とに赤面のほかは無いが、私たちより一段高



中島生々庵句碑

うき草は浮きくさなりに

花が咲き

昭和57年6月13日建立

岡山県久米郡久米南町弓削 川柳公園

い境地に在られたことを思えば、教えを請う  
ことの無くなったほうの残念さが大きい。  
惜別の念はときと共に深くなるだろうが、  
いまは、ご冥福を祈るのみである。  
どうか、あの世とやらで多くの仲間・知人  
と楽しい宴でもと念う。改めてご冥福を……

## 中島生々庵先生・合掌

東野 大八

七十過ぎの老人にとつて、親しい人の生命

の終熄をきくほど苛酷なものはない。中島生  
々庵先生御逝去の報に接したときも、思わず  
背筋に冷たいものが走り、受話器を置いたあ  
とも暫くは立ちつくしたままであつた。やが  
て仏間に灯を点してじつと坐っていると、在  
りし日の先生との思い出が走馬燈  
のよぎっていくようであつた。

先生との初めての出会い、随  
分と昔のことになる。麻生路郎先  
生をなかに、生々庵先生とよもや  
まの話のあと、立派な路郎先生の  
寿像を下さつたのは生々庵先生だ  
つた。

天王寺の路郎追悼句会に出席す  
るため、小石先生をはさんで会場  
まで、先生と私は楽しい川柳だん

ぎをとりかわした。それから日川協創立総会  
で名古屋でおあいし「麻生路郎物語」連載に  
ついて御相談申しあげた折、手をさしのべて  
私の手をとられ、願つてもないことと御快諾  
を得た時のよろこび。

そして昭和57年4月川柳塔二〇〇号記念大  
会で私を表彰して下さい、「路郎物語はこころ  
うさま、とても昂奮して読ませて貰つたよ  
と仰つた。とてもうれしかった。この時、  
先生は車椅子だった。私と先生の間柄はこの  
出会いが最後だった。お優しい小石先生とも  
この日をしおに今日まで、申すなく御無沙汰  
の不義理をつづけている。

昭和51年春出版された御夫妻の立派な句集  
「生々楽天」は、水災を切り抜け今も拙宅の  
書架を飾っているが、この本の「跋」は見事  
な夫唱婦隨の中島家御一家の温いムードに溢  
れて、川柳を通じて生々庵先生のすべてが語  
り尽されていて、今もつて感銘深い。

先生は「佐賀県人」である。「人間死ぬこと  
とみつけたら、これは武士道のことじやない  
よ」と石原青竜刀氏らとの会食の折、私はさ  
り気なくきいたが、今もこの言葉は忘れるこ  
とができない。有名なこの佐賀県人の誇りを  
抱かれた先生は、その私への言葉通りに、その  
人生観に充ち溢れた実践生活を川柳にも活用  
され「生々楽天」の境地で浄仏国土へ昇られ  
たのである。ここから生々庵先生の御冥福  
をお祈りせずにはいられない。合掌。

# 先生 ありがとうございました

川村好郎

生々庵先生

先生を徳び筆を執ると走馬燈のように次から次へ先生の温顔、厳しいお声が出てきて、尽きるところがありません。

顧みれば昭和十六年頃、松坂倶楽部に於て麻生路郎師が講師となり、川柳講座を開催されたことを私も知り、川柳を教えてもらおうと思いついたのが先生とお会いした初めてでした。いつも先生と同じように机を並べて個人教授を受け勉強しました。川柳とはどんなものか漸く理解出来るようになり、その時いつも親しくご親切に手引き下さったのは先生でした。もしも先生の御教導がなかったら私は川柳から遠去かったかも知れません。先生のあのやさしさ、うれしさは忘れられません。ありがとうございました。

生々庵先生

あれからがきっかけになり、実弟松江梅里を誘い共に川柳に打ち込み、先生にどれ程引つ張られ教へられたでしょうか。先生を敬慕しながら各会にも出席し、先生の地方大会にも随行させて頂き楽しい吟行へも参りまして。ある料亭で路郎師を囲み先生と梅里と私

と四人で夜が更けるまで飲んだり叱られたり、唄ったり談笑したことを先生覚えておられますか。あんな酔われたのは私知りません。こんなことから大萬川柳会が生れたのですね。

生々庵先生

NHKラジオ放送「老後をたのしく」の川柳は多分十年間近く放送されたのでしょうか。近江砂人氏と隔月に月一回でしたが、どれだけ全国に川柳人が増えたでしょう。先生の功績は大だと思います。昭和五十年頃先生は退かれて下さったのでした。身に余る光栄とありさせて頂きました。その間先生はラジオを聞いて下さって注意をされたり、教へ頂いたことは感謝一杯です。大過なくつづけられたことは先生のおかげです。ありがとうございました。

生々庵先生

先生の医師の重責と川柳塔社主幹との御活躍の最中、昭和五十六年五月突然倒れられた報せを誰が信じましょうか。びっくりしました。それからは私はあの懐しい浜寺諏訪森の御邸宅へよくお見舞に参り、一日も早くご全快なさるよう祈っておりました。しかしてお伺いするうちに次第に御病状が悪いのがわかり心配していました。そんな時先生は「長い間僕は堺商工会議所報の川柳の選をしてきたが心身共弱ってきたから君、代りに選をしてくれ、

## 弔 吟

春寒き現世厭いて行かれしや	直原 玉青
川柳の塔浮かびそ阿弥陀池	里 小路
雨男雪舞う朝を旅支度	岸本豊平次
アルバムに師の温かき笑顔など	西村左久良
お別れはたとえみ親の里ながら	山内 美幸
生々流転くうてなの大往生	大路 静幸
雲の峰へ行く道程は早すぎる	植山 武助
再会の握手が堅い雲の峰	高橋 幸代
茜さす西方浄土へ逝き給う	古野 ひで
大木の支えるすべのない無情	原 さよ子
遺影から声漏れそうな通夜の席	清野 こう
路郎師と浄土で連れ立つ川柳塔	芳地 狸村
独り行く雪が浄めた雲の峰	西田柳宏子
生々楽天ぶじ舞い終えし春の雪	高杉 鬼遊
鰻谷 塔も主幹も若かりき	谷垣 史好
麗筆の色紙に重ねる師の御影	園山多賀子
師を悼む声なき声とまた出逢う	黒川 紫香
パベルの塔に植えつけた柳の芽	関 水華
如月の空轟々と巨星墜つ	土居 耕花
アルバムにあの日の笑顔こぼれる	松原 寿子
温顔のところに重い春の雪	堀江正朗 芳子
春待たず逝く師に捧ぐ哀悼を	田形 美緒
如月の雲重く垂れ計報聞く	小西 雄々
温情を徳ぶ遺影の眉あたり	増田 竹馬
梅の香を残したままに雲の峰	沢田 千春
大御所が散りぬ二月の雪の日に	政岡日枝子
温かい笑顔塔から一つ消え	石垣 花子

君も頭の回転運動にいいからやれ」と仰せられた。先生が快くなられるまで代理に務めさせて頂きますとお受けしました。いつかお返ししようと思つていますうちに、早いものでもう三年過ぎ今年目になっております。先生と話し合ひ、御命令を頂きましたのがこれが最後でした。なぜお元気になつて下さらないのですか。もつと教えて下さらないのです。二月十七日遂に御逝去なさいました。もう何も書けません。涙が止まらないのです。先生ありがとうございました。御霊ながらいつまでも御教下さいます。

## 生きてゐる風貌

工藤 甲吉

大阪の人からの電話は十八日午後二時二十分だった。慌てて郵便局へ。途中歩きながら申句を考えた。失礼に当たる句だった。

さて私が先生の温顔に接したのは三回だけで第一回は四十三年十月一日。小石夫人同伴で北海道への途次。夫妻は前日、十和田湖を経て浅虫温泉に泊。私は浅虫へ招かれたのだが、都合で失礼し一日朝、青森駅棧橋で連絡船が出るまでの短時間懇談しただけだった。残念だった。「北へ行く船白白と秋の鷺」は函館へ向う夫妻を見送つての句である。

二回目は四十五年七月十二日で、私の新聞社、東奥日報主催の二十四回青森県川柳大会へ特別選者としてお招きしたときである。先生は、八年前、路郎師の時の同伴者の一人、薫風さんを先達に来青された。

その堂々たる風格と選句披露や講演などについては、万人知るところ、なので省くことにするが、大会へ寄贈された手拭の句、「一声出してみたいとかまきり身構える」は、大変好評だった。

翌日は車を飛ばして津軽半島の突端、青函トンネルの入口、竜飛岬に川上三太郎句碑「竜飛岬立てば風浪四季を噛む」を訪ねた。岬の風は人間を吹つ飛ばすが如き勢いで、下の海は白い牙をむき、文字どおり巨岩を噛んでいた。その岬に立った先生の風貌は今も私の心に生きていて。又、後年の拙句「みちのくのさい果てここで石拾う」(三十四回同大会・薫風選)は、竜飛への道すがら海岸で錦石を拾つた先生を回想して生れた句であった。寒さむと青森の夜のミニ美人

日本語が時々まじるかの如し

学名も添えて山菜のおもてなし

岩を噛む波濤のはるか目に聞こえ

蒼々亭ここに極まる謎がとけ

これは先生の青森での句であるが、ミニ美人は何んとかというパーでの句。日本語は私の津軽弁を詠んだ句である。

最後は五十五年八月二十六日。私が大阪へ

春待たず星の一つが燃え尽きる 青戸 田鶴  
おだやかな笑顔は胸に生きている 林 荒介  
温顔の浮かんで消える牡丹雪 川端 柳子  
師を憶ふ数珠をくる手が冴えかえる 野村太茂津  
雪明り旅路を急ぐ雲の峰 高橋 操子  
巨星墜つ浄土に続く白い雲 羽原 静歩  
なつかしき母のみもとへ今日の旅 安藤寿美子  
浮草の悔いを真白き雪が埋め 浜野 奇童  
引き止める術なし御霊天駆ける 本田恵二朗  
鰻谷大きな虹の立ったとこ 川口 弘生  
彼の世でも生々楽天たり得べし 橘高 薫風

出かけた時であったが、あの夜が最後になるとは。昨秋りんごをお送りしたら「摺って喜んで食べてくれた」というのに。合掌。

## 思ひ出すことども

正本 水客

昭和四十年、路郎、水府の両巨星が相次いで天涯に姿を消されて以来、川柳の上で練達の方々が数多く居られるのは言うまでもないが、人間的な大きさに於ては中島先生を第一に押さねばなるまいと思ふ。普段は物やわらかな先生であるが、病気の事ともなると人を肅然とさせる厳しさがあつたことは有名である。こんな話を聞いた。川上三太郎さんが諏

訪の森の生々庵宅で一夜を過ぎたことがあった。一献傾けているとき「センセイ、センセイは私の命の恩人です」と言い出された。

二、三年前に三太郎さんが大手術を受けられたとき、食事の時間や量など徹底した監視のもとに置かれて、自由人の三太郎さん少なからず反抗的になっておられたとき、丁度お見舞に行かれた先生が「病院のベッドでは我まは許されませんが、医者の言うことは至上命令ですぞ」と言われたことが精神的に立ち直らせ、手術は成功したんだという。

毎年お正月には路郎先生を囲んで鰻谷の先生宅で、お目出度う会が持たれるのが恒例であった。ミナミのきれいだころも髪に稲の穂を差して現われた。しもた家に出掛けて来るのは異例のことで、先生の顔だったのである。多久志、梅里、白柳、春果、古方、いわを等々の今はもう会えない顔が浮かぶ。

月一回の不朽洞会の常任理事会には年末だから、いい酒が手にはいったから、など理由を付けては一本提供されることがあった。「水客君が居るから一本では足りんな」先生の口癖のジョークであった。

「川柳雑誌」のあと「川柳塔」を背負う輝かしい宿命を立派に果し、小唄に日本舞踊に日本画に、その天分を余すところなく示して豊かな天寿を全うされた。生々楽天そのものの具現である。

小石奥様と二三夫さんと私とは同い年であ

る。一三夫さんひとり慌てて逝ってしまったが、小石さんの御自愛を祈ること切である。

## 生々庵先生を偲ぶ

浜野奇童

計報聞く受話器へ春の雪しきり

生々庵先生の計が、弓削川柳社の事務局から、そして家内から相ついでもたらされたのは、思いもかけない春の雪が、朝から窓外に降り頼る最中であつた。

先生の句碑を川柳公園に頂くことになり、その句を戴きに伺つたのが、川柳塔改題二百号記念川柳大会の席だった。春霞に煙る六甲の山脈を望む阪急ランドビル二十六階の部屋でお会した先生のあの温顔と、慈悲溢れる眼鏡の底の穏やかなまなざしが頭を過ぎる。

生々庵先生が、山間の辺地弓削に初めてお運び下さつたのは、川柳社創立の第一回西日本川柳大会（昭和二十四年）だった。以来、

私達の川柳町運動に深いご理解を下さり、西日本大会にお出で下さつたことも二十回に余る。エピソードも少くないが、交通機関がずたずたに寸断された台風の最中をお越し頂いた五十一年の感激、こ米弓の度に路郎句碑に御神酒を浴びせられ、沁々と師を語られたお姿が特に印象深い。また膝を交えれば、私達

の頭からさえ消えそうな弓削の先人へのお心遣い。その一言一言が温かく耳底に残る。

私達が川柳公園の計画を実行に移したとき期せずして先生の句碑をとの話が持ち上がった。しかし、その管理に多少の不安が残つていたための私の慎重さは、本身ご不自由なられた先生に揮毫を強いることになり、是非一度はお越し頂きたいという願いも空しいものにしてしまった。悔まれてならない。

先生に頂いた路郎師の川柳額は、久米南町の中央公民館で町民に語りかけ、「浮草」の句碑は、公園を訪れる人達に呼びかけ、いついつまでも柳界の動向を見つめて下さることだろう。

春の雪に包まれた句碑に、生々庵先生の温顔が浮かぶ。合掌

## 灯台の夕陽

尼 緑之助

昭和四十八年五月十三日、大社町日御崎海岸に建立していただいた句碑

灯台の夕陽神話を抱きよせる 緑之助

この除幕の日。真下に展開する日本海、さわやかな汐騒、多数の参列者がバックに、先生の祝辞、毅然たる御容姿と声が、今更の如く蘇ってくる。

そして眺瀾荘に於ける記念句会、祝宴も終り、会場の玄関に出られた時、先生はふとカメラを西空に向けられた。見ると東洋一と言われる灯台の肩のあたりに、正に西の海に入らんとする夕陽が、周辺を彩りながら、丸い顔を見せていたのである。この日を祝福するように。そして先生の瞬間的川柳眼に恐縮した。

後日御恵送にあずかったカラー写真は、こよなき記念としてアルバムに残っている。

等々思い出は走馬灯だが、再び温容に接することが不能になったと思うと、果てしなく哀悼の情に包まれる。

流れ星一閃 余寒のすすり泣き

合掌

## お別れの一ト言

西田 柳 宏 子

2月17日夜10時過ぎ、敷居をまたぐが、またがぬ内に家内の声がとんできた。生々庵先生が亡くなられたと薫風さんから電話があったとのこと……早速薫風さんに電話して、続いて生々庵宅へ電話を入れる。小石夫人の落着いた声で、ご生前のご交誼のお礼と、生々庵先生が口癖のように遺言のように、自分が亡くなったら柳宏子に葬儀の手伝いをさせる

よう言っておられたことを承る。

先生がご発病以来6年、当初夫人はもとより、ご子息方お三人共医師のお立場より、本当に行届いたご看病、リハビリに専念されたが、不運にも小石夫人が病を得て入院、手術をされたことが大分先生にはショックだったように思われる。この時期のリハビリが思いがちなになり、夫人が快癒退院後も情性的になり、寝たきりの状態になられたようである。そして昨年永年住み馴れた浜寺のお宅から現在のマンションに移られたのも一つはご令息の近くに……という先生の気の弱りとも拝察された。

この間、日川協理事長並に川柳塔理事長を辞任されたが、川柳塔に対するお心配りは、お見舞に伺う度にいろいろお尋ねになり、川柳塔の前進を心から喜んで下さったようだ。本年1月15日おめでとう会の帰路、栗主幹

とご一緒に生々庵先生をお見舞したのが、お別れになろうとは……。ともあれ先生のご遺言に従い十八日昼前から自宅へ伺い、納棺、和光殿式場への送り出し、通夜から十九日の本葬儀告別式とお手伝いさせて頂いたが、この間、夫人はじめ御令息お三方並に御親族の皆様のご理解ある御協力、また川柳塔関係の皆様のお援助を頂いて大過なく勤めさせて頂いたことを心から感謝しております。

最後に、心なしか淋し気な表情の遺影の前で葬儀式も終り出棺前の御親族方のお別れ：

次々と黄菊、白菊にご遺体が埋まり、お顔だけ花の中に浮いているように見えた。

愈々棺の蓋をするので顔に白布をかけようとした時、すつと傍に寄せられた小石夫人が静かな声で一ト言！

「おじいちゃん……さようなら」

そしてそつと手で頬に触れてから合掌した後姿に、しみじみ夫婦愛の美しい別離の絵を見るように私の臉に焼付けられた。

「おじいちゃん……さようなら」

「生々庵先生サヨウナラ！ 静かにお眠り下さい」

## 思い出

藤 村 女

母の三回忌を終えて雪の中を帰阪、我が家によつと到着いたばかりのところへ紫香さんから電話があり中島先生の御逝去を知らされました。思えば先生とは三十年来のお付き合いでありました。三十二年婦人友の会に同席させて頂いたとき、毎年新年句会は浜寺の先生のお宅でお世話になり何かと御協力を戴き、楽しい句会にしていたのだと思います。句会では驚愕夫婦の川柳家として羨ましい限りでした。

川柳はもとより絵画、舞踊と共にライブ

としての御夫婦は素晴らしいものでした。

友の会では子供のように「句を見せてと言つても小石は見せてくれないのだよ」と私に話されたことがあります。ほんとにほほ笑ましくて羨ましく思つたものです。

先生と打ちとけてお話し出来たのは路郎先生と青森に出向いて以来でした。近い内に先生が行かれた青森から八甲田山、十和田湖と回つてくるのだとうれしそうに語られました。

そんな時の先生は人なつこいやさしい先生でしたが、病院での先生はとて怖く孫を診ていただきにつれて行き、よく叱られたものです。その孫達も今は大学、高校と元気に成長しました。瞳を閉じると走馬灯のように次から次と頭の中を駆け廻っています。どうか安らかにと遺影に心から合掌いたしました。

平凡を愛している私の部屋に先生の色紙がいつも話しかけてくれています。

うき草は浮きくさなりに花が咲き

## 寒中見舞

小林 由多香

一月二十一日の消印があるので二十二日から二十三日であろう、奥様と連名の寒中見舞をいただいた。去年までは来ていた年賀状が今年見えないので、お具合いでも悪いのかなと

案じていた矢先の、住居の移転と無事越年されたという丁寧なご挨拶であった。

この寒中見舞で、お変りないのだと信じて一月もたつていない二月十七日の訃報に一瞬あたりが真つ暗になった感じがした。同時に車椅子の生々庵先生のお姿が目の前に浮かんだ。車椅子ではあったが、お元気でご挨拶された昭和五十二年五月の誌寿六百号記念川柳大会での面影そのものであった。

生々庵先生とお話できたのもこの日が初めてであり、この日が最後となった。

生者必滅というが、川柳界の大先輩を失つてしまった。残念であり、さみしい限りである。

日本川柳協会理事長の藤島茶六さんが叙勲を受けられ、また四月からNHK学園で川柳講座が開講されるなど、ますます川柳が理解されて来たとき先生を失つたことは痛恨にたえない。

先生の印された川柳の歩みを、より大きくより深く発展させて行くことを誓い、ご冥福をお祈りいたします。

## 謹厳と洒落

そしてご母堂の句

橘 高 薫 風

川柳塔前号の巻頭の文章で、西尾菜主幹が

病中の生々庵先生の、一見人を喰つたうまい洒落のエピソードを紹介しておられる。それは、風呂上がりの小石夫人が病室へ来るのが遅いといつて「十二単を着るわけじゃなし」と洒落を飛ばし、「昔の女友達の噂から、みんな致くなられたでしょう」と言えば、「美人薄命というからね」と、夫人に対して辛辣な、川柳家らしい応酬をされたという話である。

また、私は、かつて「なにわ川柳の一句」に、次のように書いたことがある。

中島 生々庵

表札に中島蓬太郎と書き、雅号も書き添えた。ともに貫禄のある名だと、思わず顎を撫でそうになる。日本川柳協会前会長で謹厳そのもののお人柄だが、微醺を帯びてタクシに乗ると、三休橋の蕎麦屋だと言うユーモアも持ち合わせる。

そば屋の生々庵というわけだが、先生の洒落は、お人柄が謹厳だけに効果があった。

今少し、そこはかとなきユーモアの味の句を挙げると、

可愛らしい目になって来た酔っている

迷子札妻は俺にもつけたがり

枯れてから又糞虫の役に立ち

蛸壺の蛸は用心したつもり

悪筆がこの大臣の取りえなり

籠の鳥なに淋しがるさし向い

さて、先生本来の謹厳さをうかがえる句は

浮き草は浮き草なりに花が咲き

尉は古稀媼は還暦わか緑

表面は茶の会にして両巨頭

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

などで、「浮き草」の句は、岡山県久米南町

の川柳公園に句碑となっている。

先生の句で忘れてならないのは、ご母堂を

思ふ孝心あふれるもので、

日に疎くなれそうもなく母恋し

というご母堂と死別後の句をはじめ、

母と往く心齋橋の片日照り

飛行機で来たのを母は知らぬなり

伴せは夜長に母と卵酒

など、すべてさりげなくて良い句である。

先生が雨男といわれたわけも、佐渡の旅で

経験して、思い出は沢山あるが、青森での旅

の印象を書いとおきたい。

東奥日報社主催の青森県川柳大会に招かれ

た生々庵先生に随行して、青森の川柳家多数

と歓談したときのことを、

日本語がときどきまじるのかのこしし

と、句にされたので、生々庵流のユーモア

を私はこの時に気付いたのだ。大会の前

夜、浅虫温泉の宿の南部屋で過したが、その

日は私の誕生日であった。先生は、電話で鯛

のお頭つきの塩焼を特別に注文し祝って下さ

った。「男は、誕生日には鯛のお頭付きを喰

わなくちやいかん」と、儀式を重んずる先生

の一面に、涙しながらご馳走になったことだ。

先生は昭和四十一年、

余命十年三千六百五十日

という句を詠まれたが、実際にはその倍の

歳月を生き抜き、天寿を全うされた。

先生に受けた恩愛を噛みしめながら、心か

らのご冥福をお祈り申し上げます。

## 生々庵先生をしのんで

柳 楽 鶴 丸

先生と初対面は四十五年の路郎忌でした。

立派なお人柄に強い心臓も萎縮し挨拶もそこ

そこで退散した。二度目の出席した時には、

ニコニコ笑顔で迎えて下さった。そして多忙

な時間をさいて地方や同人の事を聞かれ、時

々冗談を言って豪快に笑われた。初対面の時

とは別人のようだった。句会が済んで挨拶に

行ったら、鶴丸さん、祥月さんの還暦句会に

家内と出席するから、松江の皆さんに土産に

して下さいと言われ、大変嬉しかった。お蔭

で予定より参加者が多く、会場が狭くて嬉し

い悲鳴、懇親会後、沢山の会員に色紙をニコ

ニコ笑みを浮べて

可愛らしい目になって来た酔っている

と書いて下さった。その姿が先生のように

思えた。川柳塔まつえの良い思い出になった。

岡山で風来子先生宅で留守番していた時、先

## 川柳塔社常任理事会（3月1日）

出席者 紫香・薫風・太茂津・柳宏子・鬼遊  
萬の・文秋・雀踊子・白浜子・杜的・武庫坊  
凡九郎・重人・小路・敏・正坊・史好

（議事並に報告事項）

▽中島生々庵名誉会長の逝去から葬儀・告別式まで献身的にお世話をされた柳宏子氏より委細報告あり、本社4月句会を追悼句会とすることに決定。

▽NHK学園（通信教育）が4月から開講する「川柳教室」の講師に、川柳塔社から七名（菜・薫風・柳宏子・鬼遊・智子・由多香・可住）が委嘱され、2月28日東京で打合せ会があった。鬼遊・柳宏子両氏より概要説明あり。

▽中国旅行の計画も煮詰まり詳細次号で発表の予定。

### ■4月の常任理事会は1日（火）

生から電話があり応答に出た。どなたですかと聞かれ、鶴丸です。と答えるとやっぱりそうか、と言われた。ホテルで三人夕食を囲んで談合したことも楽しい思い出である。

先生はまた大変時間音痴で、旅に出られると奥様が心配されたそう。本社の方から頼まれて、大阪夜行までお付合いしてお送り

したこともあった。不思議なことに、沢山思  
い出があっても一度も句についてお話しした  
ことはなかった。七不思議の一つです。

合掌

## 大樹倒る

板尾岳人

樹々はすでに根つこの胎動を開始し、芽を  
吹き出さんとする頃なのに、通夜当日、大阪  
地方は大雪に見舞われ白い街と化した。

大阪堀江阿弥陀池の浄土宗別格寺蓮池山智  
善院和光寺の別室に眠る生々庵先生の御遺体  
に對面、再会の歎びを永久に奪ってしまい、  
人生の哀しさを味わった場所である。

大樹が静かに倒れた音がすっしりと心の奥  
に響いて来たよう、生れて来る者よりも彼  
岸へ旅立つ先生に對して不思議に心の落着き  
を覚えたのである。

生々庵先生との邂逅は、わたしにとって予  
想した以上の多くのものを与えて下さった。  
その一つの想い出に先生の披露にはいつも爽  
やかな戦慄を感じたものだった。この機会にわ  
れわれは川柳の原点に立ちかえり再出発しな  
ければならない、と同時に先生亡き報に接し  
た時、鼻をつままれてもわからぬ闇と化した  
が、その闇の中に灯る小さな光を見たよつて

もあり、生々庵先生に一層近く自分を感じた  
ということは年齢の影響によるものであろう。  
これからも私が多くの仲間たちと一緒に歩ん  
で行くであろう未来をお見守り下さい。

## 弔電

川柳塔社・日本川柳協会・日本川柳協会東京  
事務所・番傘川柳本社・ふあうすと川柳社・  
鷺羽川柳会・川柳塔唐津支部・白百合川柳会  
弓削川柳社・倉吉川柳会・米子きやらばく川  
柳会・川柳篠山一同・鳥取うみなり川柳会・  
鳥取三月川柳会・川柳塔松江同人一同・岸  
和田川柳会・川柳わかやま吟社・西宮北口川  
柳会・京都塔の会・城北川柳会・ねやがわ川  
柳会・川柳翠洋会・豊中もくせい川柳会・南  
大阪川柳会・菜の花川柳会

藤島茶六・山田良行・平賀紅寿・柴田午朗・  
深尾吉則・渡辺蓮夫・大森風来子・延永忠美  
本庄快哉・東野大八・高鷺重鈍・尼緑之助・  
長野文庫・岡村久志良・藤井明朗・水粉千翁  
八木千代・三井醉夢・直原七面山・柳樂鶴丸  
川竹松風・久家代仕男・渡辺独歩・藤岡花梢  
赤川菊野・田口虹汀・奥谷弘朗・嘉数兆代賀  
藤田軒太楼・藤田恒子・野中御前・桑原伊都  
本間満津子・菅井とも子・松下たつみ

樫一对 川柳塔社・川柳塔常任理事会・日本  
川柳協会・番傘川柳本社・ふあうすと川柳社  
時の川柳社・岸和田川柳会・富柳会  
生花 川柳塔社理事長 西尾菜

番傘わかさ川柳会創立40周年  
片岡湖風句集「ともしび」発刊

記念川柳大会

とき 昭和61年5月18日(日)10時開場  
ところ 大阪府中小企業文化会館

地下鉄「谷町九丁目」下車5番出入口  
谷町筋南へ徒歩7分東入る

講演 「上方芸能」編集長 木津川 計氏  
安井 久子氏  
加藤 翠谷選  
保木 寿選

宿題 「救つ」  
「恋」  
「続く」  
「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

片岡 湖風選  
榎川雄次郎選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

保木 寿選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

片岡 湖風選  
榎川雄次郎選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

片岡 湖風選  
榎川雄次郎選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

片岡 湖風選  
榎川雄次郎選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

片岡 湖風選  
榎川雄次郎選  
森中恵美子選  
田向 秀史選

「湖」  
「近所」  
「鶴」  
「めし」  
「信頼」  
各題2句・締切12時

# 中島生々庵50句

大雷雨虹一本を置いて去に  
移り香のまだ残つて置く手紙  
お薬はお薬 信心もなされませ  
表面は茶の会にして両巨頭  
乳呑児に生き抜く力教へられ  
箸箸箸目目目すき焼煮え始め  
闇をせぬ人は手をあげ手をあげて  
電話口わたしよわたして判る仲  
悪友のこうした時のたのもしき  
名案へ妻はふふんと言っただけ  
我ながら見事な嘘を思いつき  
麗人の欠伸は扇のかけに消え  
大掃除パパもお役に立つつもり  
気付かれぬように脇役腕のさえ  
立ち話もう三度目のさようなら  
祝膳一つは亡母へ奉り  
生々流転 宿命論者の無精髭  
自尊心町医者だから髭をおき  
浮き草は浮き草なりに花が咲き  
十字架を背負うた同土信じきり  
つぶし値でもつたいなくも観世音  
育児書の通り弱い子に仕上げ  
せかせかと童話の結末知りたがり  
枯れてから又糞虫の役に立ち  
どないでも書きまっせと領取書

良心のかけらがあつて伏し目がち  
決心がつき紙くずとして丸め  
安らぎと不安を積んだ救急車  
家庭医学の知識で院長とわたりあい  
手本どおり書いて師匠の気に入らず  
喜寿愉し緑の夢は舞い狂い  
切り貼りで生きぬいて来た喜寿と古稀  
十万億土句帳離さぬ一人旅  
人間ドック訊問される既往症  
面憎いまでにライバルゆきとき  
竹割った気性でなどと腹黒さ  
無気味なやすらぎ底抜けに空が晴れ  
絹糸草春のいぶきもつつましく  
心おごる朝ふと山頭火の詩にふれ  
白い眼で念を押して設計図  
小さくとも夢一つ描くおらが春  
間の抜けた顔して痛いところにふれ  
雨乞いの神事は雨雲見えてから  
雪だよりあの村あの森母の墓  
向い風いたわり合うて老夫婦  
忍従につくり笑いはやめたまえ  
身の程を知るから重く行き詰り  
軍歌でごめんこれしか知らぬ花の下  
重宝な男 葬儀屋とも懇意  
横車ではない直情炎えざかり



北京：故宮

■中国吟行の旅への誘い ①

## 北京好日

東野 大八

北京の秋は世界一だといわれている。天高く気爽やかなこの季節は、旧暦八月十五日の仲秋節が中心である。兎兎爺という人身兎首の泥人形を飾り月餅を供える。そして月見の酒と洒落る。月と兎は何も日本だけではないらしい。

故宮の北の景山は「景山秋月価千金」といわれ月見の宴の極上棧敷といわれているが、この景山で明の崇禎帝は、李自成が北京へ攻め込んだので首をつった。つまり明王朝に終止符を打ったところだ。中国四千年の歴史の興亡は、歴代帝王の殺戮の歴史でもあったわけだ。「未来永劫、二度と王家には生れたくない」と嘆いて死んだ宋の順帝の台詞に尽きて

いる。清の廢帝溥儀も「紫禁城を出た時、余ははじめて人間になった」とその自伝「わが半生」にうれしげに記している。

北京は俗に「杜の都」といわれている。芥川竜之助が北京に遊んだとき「誰だ、この大森林を都だなどというの」と言っている。

北京の樹海は槐である。そして榆・アカシア・合歡・E.T.C. 私は北京の有名な北海・中海などの公園より太廟が好きだった。樹齡何百年という槐の立木の下庭には、随処に籐椅子のセットが置かれ、そこで中国名産の銘茶を啜り点心をつまむのである。森閑とした静寂そのものの悠揚たるその時間は、全く動くことを知らないようだった。

「いま啼いたのは郭公だよ。日本でいうホトトギスだね。この辺の郭公は、背黒郭公といって「氷混好苦」と中国語で啼く。意識すれば「独り者は辛いよ」というんだ。吾輩のこれは古今の名訳だと思っている」

と得意の貌で言ってるのは、嚴撤さんと石原青竜刀さんだ。

昭和十五年、間組北京支社長として古川柳畑の大家森東魚さんが着任された。青竜刀さんと私の二人で歓迎宴をもったのは、前門で有名な北京烤鸭子店だった。一名北京ダックの烤鸭子を満喫した三人は、それから太廟の椅子に収まったのである。卓を隔てて小柄な東魚さんを眺めていると、失礼ながら深海の章魚を思いうかべた。東魚とはタコの事だ。

黄菊が咲く頃の蟹は美味い。蟹は百味の基だ。暇をみて三人でいこうという話になって別れたが、話はそのままで東魚さんは私が出征中の終戦の年、北京で客死された。

昭和十四年満鉄が北京に進出、「満鉄北支事務局」の看板を長安大街と王府井大街の角のビルに掲げた。これがやがて「華北交通株式会社」になった。私は満鉄記者クラブ員の肩書で北京に駐在したが、やがて設立間もない蒙疆新聞社員になったのがその翌年で、北京支社編集室勤務となった。こうして私は北京

で四年間の快適な生活を過した。

二十歳も半ば過ぎて独身。気假放題の北京の青春は、正に南柯の一夢に似ていた。

在北京の記者クラブ員は二百名を超えていたが、私達若手は京劇研究会や中国文学研究会を作り、蒙疆新聞社では蒙疆文学を創刊した。この同人だった石塚喜久三が芥川賞を貰った。年輩の中央紙の支社長や支局長クラスの連中はすべて文人墨客気取りで、終戦後はいずれも東京や大阪本社で編集担当の重役に就任するという人物ばかりだった。

この才気喚発、もの怖じしないやり手ぞろいのジャーナリスト群を、古都北京はそのうつ然たる大樹の鷹揚さでしつかりと抱擁し尽くしていささかも飽かせることのない一大浪漫都市だった。そこに私の青春が躍動した。

華北交通の招きで横光利一、久米正雄、柳瀬正夢が北京に現れた。この頃、北京には中央文壇、画壇、詩壇の大物がよく訪れたものだが、文学青年の私は、横光利一をびつたりとマークし、琉璃廟や頤和園視察に連日ついて回った。ホームスパンのオーバーに毛帽を離さぬヒョウの様な顔付の横光さんは、話せば気のおけぬ気取らぬ文士さんだった。

帰国されて私宛の挨拶状を貰ったが、その中に「貴台の東野という姓が気に入ったので

私の作品に使わせて貰いました」とあった。

その作品は「旅愁」であった。私はこのハガキを小さい額に収め、机上に護符のように飾って得意になったものだ。

北京には「武徳報」や「新民報」や「庸報」の華文日刊紙も出ていた。これらの中国人の記者連に、あえば私はコーヒーや酒の中で必ず老舎の消息をたずねるのを常とした。私は彼の「駱駝祥子」にしびれ通して、その頃既に三度もよみ返していた。老舎はちやきちやきの北京ツ子で、彼の代表的大長篇「四世同堂」が病みつきであった。

駱駝祥子というのは、駱駝が綽名の若い洋車曳きの物語で、彼は北京で極上の金ピカの車を持ち、お金持ちのお抱え車夫になることが夢だった。その夢がやがて粉々に破れ、北京の路傍で哀れな行倒れとなつてその生涯を終るのである。私はよく北京で洋車を乗り回したことが、いつも梶棒を握つて懸命に走る洋車夫の背中に必ず駱駝祥子の姿を思い描いたものだ。

洋車とは日本製の俵から出た中国の俗称だが、人民中国は建国と同時に、北京市内外の洋車を一カ所に集めて焼却した。その数万台だったという。この日から北京から洋車の姿は忽然と消え失せてしまった。洋車のない

北京、私は駱駝祥子に今も涙する想いだ。最後に北京・大同の旅に当り次の事を書いておく。

「俳句（角川刊）の昭和59年10月号に「海外詠を創り味う」という特集をやっている。

○夏山の嶮長城に威を加う 大野 林火

○長城の足下養蜂家族いるわいるわ

金子 兜太

○石舫の動かむとして薰風裡 鷹羽 狩行

○纏足に故宮の片陰濃し 伊丹三樹彦

森澄雄は大陸各地を歩いても俳句が一句も作れなかったそうだ。その発言は貴重だった。

「大陸の感銘をどう俳句に詠むか。一つの方法として兜太の方法もあるとは考えた。つまり徹底的に具体で責めていくか、或いはそういう具体をおさえながら徹底的に抽象的に詠うか。この二つしか方法がないような気がした。中国は日本の所謂俳句的な思考や方法というか、心理の感情の移り、或いは情緒的なものではとても手に負えないと感じた」

私はこれを眼にして、川柳は俳句に優るものとふと潜越な考え方に捉われた。不遜かな。

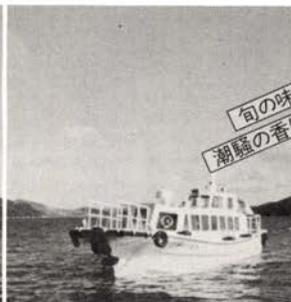
## 柳箋

一冊 二百円

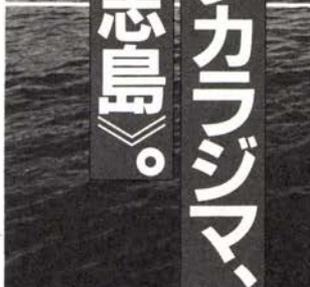
送料 二百四十円

# 鳥羽《答志島》

# 海族のタカラジマ



旬の味覚を存分に…  
潮騒の香りでおもてなし。



鳥羽随一のフィールドアスレチック。



仲間と自然の中で楽しむバーベキュー。

海水浴、釣り、ウインドサーフィン…  
プライベートビーチで、ちょっとリッチに。

幹事さん  
ラクラクのご宴会  
バックから、ご家族・  
少人数さまのプライベート  
プランまで、各コース  
をご用意いたして  
おります。

- 料金のごあんない
- ◆大漁コース…13,000円
- ◆潮騒コース…10,000円
- ◆松籟コース…8,000円

※1泊2食、税・サ込です。※休前日は2,000円増です。  
※12月31日～1月4日 4月28日～5月5日 7月20日～8月25日は除く

#### 交通のごあんない

- 大阪ナンバより鳥羽(近鉄特急)……………2時間
- 名古屋より鳥羽(近鉄特急)……………1時間40分
- 伊良湖より伊勢湾フェリー……………60分
- 大阪よりお車で西名阪～伊勢自動車道を経て一約3時間  
(専用駐車場あり)

#### 施設のごあんない

- 全館冷暖房完備 ●大・中・小宴会場、ラウンジ、展望大浴場、  
アスレチック、プライベートビーチ、キャンプ場

とっておきのパーソナルアイランド

リゾートホテル



## サンペチ 鳥羽

伊勢志摩国立公園 鳥羽・答志島

三重県鳥羽市桃取町字平石1591番地  
鳥羽郵便局私書箱16号

お申込みご予約は●大阪案内所 ☎06(226)0931 ●ホテル ☎0599(37)3315

## ボタン社会おちこぼれ

### ●西出楓楽

「二三、四年、急いでいるとき私は、商店やオフィスのドアに、危うくぶつかりそうになることがある。とくに、気の急かない時や手がふさがっている時は、「あれ、おかしいな。故障かな」と考えながら、開かないドアの前でじっと立っている自分に気付く。このようなところは、当然自動ドアだと思っ  
い込んでいるのである。

昨年、公的機関で売り出された都心のマンションでは、近い将来キャブテン・システムが使えるよう装置が組み込んであるそうだ。ボタンひとつで、あらゆる情報が得られ、買物ができ、外出先から冷暖房の加減、お風呂もわかせ、ごはんも炊きあがるように指示できるとか。

けれど、マスメディアの情報の渦に、すでに私達は溺れそうになっているし、特に知りたいことには電話を使えばよいのではないか。お風呂には給湯器のお湯を入れればよいし、炊飯器やエアコンにはタイマーがついていてすきな時刻に始動、停止してくれる。

少なくとも主婦の仕事に関しては、もっただけ便利であれば十分——とは歳のせいで頭が固くなり、新しいものについて行けない者の負け惜しみなのだろうか。

### ニューメディア私の頭の中を出る

楓楽

先日のこと、出かけきわに、息子の部屋のオーディオにランプがひとつついたままなのに気付いた。消そうと思ったのだが、どのボタンを押せばよいのか皆目わからない。そこで、あちこち押ししていると、針がスーッと動き、レコードが鳴りはじめた。仕方なく一曲聴いて、またあちこちのボタンを押すと、こんなどうやらランプが消え、やっと出かけることができた。

夜、息子にその話をすると、あきれ果てたと言いたげな表情をかくさずに言った。

「シングル盤でよかったなあ。LPやったら三十分聴かんらんとこやったで」

このほかビデオも使いこなせないし、私専

用のものであるミシンすら、十四通りの縫い方のうち一つしか使えない。正確に言えば、使おうとしないふしもある。

新しいものについて行けないというより、拒絶反応も起しているようだ。

こうしたコンピューター・アレルギー患者を置き去りに、世の中はどんどん進み、便利になってゆく。そして、自動ドアひとつでもわかるように、それは当然のこととして受入れられてゆく。便利になるとは、つまり体を動かすことが少なくなるということだ。

しかし、ボタンさえ押せば用の足る暮しになると、運動不足による体力の衰えが、深刻な社会問題とならないうだろうか。

——あ、そうか。ボタンを押したら、じっと寝ているだけで運動した効果のある機械ができるのやろ。そやけど、なんや割れんよいうな気がするなあ——

今朝、私はこんなとりとめもないことを考えながら、よく晴れているのに、洗濯物を乾燥機にボイボイほり込んでいた。屋上まで階段を昇って干す労力を省き、これからプールへ行く。

運動不足解消のために——。

天の橋立吟行記（2月24、25日）

西口 いわゑ

林 はつ絵

いよいよ天の橋立ホテルへ到着。一風呂浴びて鬼遊先生の音頭で乾杯。白浜子さんの8ミリが追う。待望の全長五十cmばかりの蟹と悪戦苦闘。その間さすがに静か。

8ミリへ乾杯も一度やりなおす  
宴会場大皿の蟹先ずつつす  
満ち足れりかに一匹が膳にのる

杜的  
てる  
メ 女

総勢十八人、紫香先生の点検と共にバスは一路、天の橋立目ざして出発。中に四人のハンサムボーイが同乗。弾んだ空気が車内を渦巻き、ガイドさんの可愛い声が張切っています。おしゃべりに花を咲かせているうちに、

外は雪、日頃遅刻ばかりする誰かさんが一番乗りだったからなどワイワイ。紫香先生が盗聴器を目の前に置かれる。（紫香先生ならではの業）一瞬静か。何が盗聴されたやら。

川端文学の一節をお借りすると「トンネルを抜けると宮津湾だった」周囲に雪を配しての静かな海、絵心のないのが残念、千歩さんが羨ましい。

裏日本峠を越せば雪になる  
バス走る雪は真横に丹波みち  
関西の垢を丹後の雪へ埋め  
山椒太夫の屋敷の跡が泣いている

紀 雄  
みつ子  
き み  
はつ絵



出石の辰鼓櫓（左から年代、いわゑ、みつ子）

翌朝二十五日、紫香先生の先導で智恵寺文殊堂へ参拝、川柳上達を祈る。

雪踏んで文殊の知恵を借りに来る  
いよいよ城下町出石へとバスは向かう。

雪深き里の歴史は哀しすぎ  
出石焼、皿そば、城跡などなど見学。

一枚の絵からぬけ出す辰鼓櫓  
辻々に歴史の顔の出石雪

辰鼓櫓の雪をガイド自慢する  
バスはまた天の橋立へもどっていよいよ待

望の股のぞき、ケーブルを降りて展望台へ。  
楽しい場面をカメラもパチリ。

股のぞき人のすることまねてみる  
愉快な思い出を胸に掃路につきました。

橋立の旅雪舟の世界かな  
桂 香

往復富士の見えた旅

小出 智子

「NHK学園生涯学習講座」に今年から川柳が加えられ、そのための「川柳教室添削指導打合せ会」に出席すべく、栗先生、薫風さ

ん、柳宏子さん、鬼遊さん等一行五名は新大  
阪駅に集まる。

新幹線が京都を出て間もなく、窓の外を見  
ると、何と一面の雪景色に変わっている。みる  
みるうちに全く視界がないほどの吹雪になっ  
て関ヶ原辺りを通過した。何度も延着を詫び  
るアナウンスがあり、五十二分の遅れで東京  
駅に着いた。

会場はNHK青山荘、札幌から熊本までの  
川柳家三十二名が一堂に会し、四時から打合  
せ会が始まる。自己紹介の後、これからの添  
削指導について色々と説明があった。初めて  
川柳を志す人達に、納得される指導をしてい  
かねばならないし、現在の川柳を理解して戴  
くためにも、責任の重大さを痛感した。

八時過ぎ会が終る。さてこれからの時間を  
どうしようかということになり、妻や夫から  
解放された面々は、旅の一夜を如何に過さん  
かと顔を寄せ合う。川柳宮城野社の菅原一宇  
さんと札幌川柳社の斎藤大雄さんが、「一緒に  
していいですか」と声がかかり、近い処とい  
えば渋谷辺りというところで、寒さもいとわず  
繰り出した。ところが地下鉄を出るとき一字  
さんが、あわや大都会の人波に吞まれそうに  
なり、一番若い大雄さんが走って連れ戻され  
た。鬼遊さんは渋谷の街がお気に召したか、

「こんな夜は素晴らしいロマンに出逢えぞよな」  
とつきつきしている。薫風さんが折角の東京  
の夜だからと、川雑時代の満秋さん（東京在  
住）に電話をされると、程なく出向いて下さ  
って「やあやあ」ということになり、話に花  
が咲く、しばらく酒の酔いも手伝って楽しいひ  
とときを過した。

翌日は篠山の可住さんも帰りを一緒にされ  
ることになり、九時頃から浅草へ廻る。

仲見世はまだシャッターを開けていない店  
もあり人通りもまばらだったが、先ずは観音

## 生涯学習のNHK学園

### '86春の通信講座案内

川柳講座 リポート11回（添作4回、投句7  
回、作品コンクール1回）

教材 ☆川柳必携（初心者指導書）

☆川柳春秋4回発行（入選作発表、  
互選鑑賞、あなたの声投稿コーナ  
ー等）

☆作品コンクール発表号

☑川柳春秋の掲載内容

巻頭のことば、川柳ビッグ対談、川柳初心  
のところ、あなたの県の川柳結社、川柳スク  
ール、川柳作法、川柳なんでも相談、添削  
コーナー、投稿コーナー、投句作品  
☆一年をたのしみながら上達する通信講座の

さまへお参りして、仲見世をバックに写真を  
写したり、柳宏子さんが手工芸店へ足を止め  
たりして、しばらく浅草情緒を楽しんだ。

栗先生が「ここまで来たら親爺さんとこへ  
ちよつと寄っていかんと」といわれたが、咄  
嗟に何のことか分らなかつた。それは皇居の  
ことである。二重橋の前で記念撮影をしてか  
ら丸の内界隈を抜けて東京駅まで歩いたが、  
栗先生がお疲れではないかと気掛かりだった。  
帰りの車窓からは昨日より一層雪化粧した、  
美しい富士が一行を見送ってくれていた。

決定版です。

受講料 一カ年 一六、〇〇〇円

一三、〇〇〇円（家族）

申込み 千186 国立市富士見台二一三六

NHK学園川柳教室宛

☆申し込み用紙を同学園に請求のこと

申込み締切り 四月十五日

添削指導講師名

斎藤大雄・菅原一宇・渡辺蓮夫・尾藤三柳  
大野風柳・田向秀史・山田良行・鈴木如仙  
浜口剛史・加藤翠谷・野口初枝・大木俊秀  
片岡つとむ・西尾菜・磯野いさむ・永田帆  
船・広瀬反省・橋高薫風・西田柳宏子・森  
中恵美子・安井久子・住田英比古・小出智  
子・高杉鬼遊・奥田白虎・遠山可住・小林  
由多香・大森風来子・福田白影・宮本時彦  
外山あきら・吉岡龍城（三十二名）

# 初歩教室

題一花一

## 阿萬萬的

「花」はそれ自身は自然の摂理に従って咲いているのだろうが、人間が勝手に感情を盛っている。だから句にもなるのでしようが、ひがんな花昔の恋を思い出し

曼珠沙華真赤に咲いても淋しそう

(曼珠沙華の赤さえ淋しく思える日)

かすみ草いつかは主役の夢を見る

待つ事に慣らされてるシクラメン

ふるえるように咲いてる寒椿

紫陽花の定め哀しや散らず居り

枯れ姿大輪故に哀れなり

(大輪のいつそ哀れに枯れている)

温室の花は己をひけらかし

(あでやかな女にも似た蘭の花)

雨に濡れ海棠の花咲き匂う

崖ぶちに咲いた百合合誰を待つ

(乙女心に似て崖ぶちに咲いた百合)

枯菊にほのかに残るいい香り

(枯菊の香りをおしむ陽差)

仇花も咲かず苦勞はあつた苦

金吾 麻黄 通子 博子 兼治郎 凡太 円女 千代女 千代女 円女

野辺の花四季の常理を間違えず  
(四季それぞれに咲かせて散った野辺の花)

よめ菜摘む少女の髪の花かざり

花摘む子背一ばいに陽を浴びて

(花を摘む園児は春の陽を浴びて)

よく見れば売花に優るいぬふぐり

あでやかな花にもまさる野の一輪

雑草に生きたる花にはふり向かず

華やかな花ならず野辺の母子草

(おしべ めしべ それなりにある野辺の草)

そして押花や花言葉は懐旧の念をそそるものですね。人間で甘いもんでね。

押し花の真にあつた我が若さ

押し花に誓つた友情褪せている

花言葉少女の頃の甘い夢

還暦の夫に要らぬ花言葉

花言葉何でもないと知りながら

追伸へ書き添えられた花言葉

来る来ない花びらそんなこと知らぬ

花時計狂い出すのは何時の日か

(花時計止まってほしいとも思い)

花時計待ち人むなし時刻む

(花時計待つ身に速い時刻む)

花は亦病床の身を和ませてくれますね。

牛乳瓶一輪差しで甦り

(長期療養牛乳瓶へ花を活け)

梅だよりテレビで楽しむひとり部屋

(病床のテレビで見てる梅だより)

真っ直ぐに花束看護婦へゆく

金吾 温子 白峰 通子 ツヤ子 八重子 京子 かつみ 博子 温子 博子 凡太 春枝 八太朗 寿美子 白峰 露芳 明吉 白李

咲き誇る花に負けぬとりハビリ中  
(一輪差の花にリハビリ励まされ)

花は過去の苦しさを乗り越えて美しく咲く

ものでしょうか。

戎衣の胸に咲いた花の香まだ失せず

迎春花満州野の孤児庭に咲け

(いつになれば咲くのか孤児の迎春花)

花束を持つての墓参などは古き事など思い

出されて空飛ぶ雲にも迷ふを感じます。

好きだった花添え夫と亡くした夫

花の亡母と二人の謎を解く

雪掘つて墓に都会の花を立て

仏様に雑草ですがと許し乞う

花作り得意な姑で出不精で

花活けて床の広さに亡夫惚ぶ

水子像小さな花の絶え間なく

華やかな筈の花束も何故か涙を誘つて。

花束にそつとかくしている涙

披露宴の花束父母を泣かしとり

胸つまる花束娘から受ける式

(花束贈呈父母の涙を見てしま)

カーネーション受ける立場の母となり

(三人の子が夫々くれるカーネーション)

吉日の花を咲かせる祝いうた

(吉日の花に聞かせる祝いうた)

花束を高くと上げお立ち台

何げなく部屋の隅に活けられてある花も私

達の心を和ませてくれます。

明吉 喜代志 富江 方子 たかし 天人 保夫 てる 白李 久子 陽子 八太朗 繁男 豊太 やすお 新造

(花活けて女気のある部屋となり)

花一輪活けて空気を和ませる

芳水

(花一輪無人の駅を和ませる)

食膳に菜の花一枝添えられる

房子

(食膳に菜の花一家の灯が温く)

母優しトイレの中に花を立て

昭治

(母優しトイレの中にも花を活け)

だが造花ではね

窓口の造花は隅へ押しやられ

よし津

四季知らぬ花が香りを忘れてる

時事吟は時がたつと忘れられてしまふかも

吟平

走る華守るなでしこ機動隊

花と味国体選手を和ませる

京子

ここで春に先駆けて咲く椿の句を勝美さん

から二句いただきました。

風花舞う金屋の里の寒椿

勝美

成程 山の道の入口、金屋の海柗<sup>つ</sup>櫛<sup>つ</sup>市

の辺りの感じがよく出ていますね。

野仏に椿一枝挿す温さ

勝美

実感でしようが私なら中七の椿一枝を

種の花をとしてみました。

何れにしても春は待遠しいものです。

春の雪解けてそろそろ花の私語

章久

(雪解けへチロチロ路の臺の私語)

盆栽に一輪つける春を待ち

久子

(盆栽の梅一輪に春を待つ)

木枯に負けぬか咲いた花のあり

周三

(冬芽もう赤さが見えて来た温さ)

店先に春が来ている花の朝

実男

(店先に春が来ていた小さな花)

早咲きを商魂空輪のPR

保夫

ハハ越前岬から来た水仙娘のことですか。

花屋にはもう春が来た花ざかり

吟平

(花屋にはもう春が来たうたがあり)

花好きへ花が答えるドレミファソ

かすみ

(チューリップ音符の型で並んでる)

春を待つ一人の部屋の桜草

克子

春一番沈丁花の出番です

房子

(春一番へ香りを贈る沈丁花)

又故里の花は美しく記憶に残っていますね。

てる

りんご咲く一度は捨てた故里に

(捨てて来た故里の夢りんご咲く)

実男

京を出て目立たぬ茶の花通り過ぎ

(目立たないまま茶の花は白く咲き)

方子

山草が趣味で小鉢に夢を植え

(山草趣味小鉢に夢を植え)

方子

人生にも花のときあり、そしてしばむ時も

あるものです。

若者よ花もいつかはしほむもの

ツヤ子

売れ残る花も誇りが捨てきれず

(仇花となつてもプライド捨てきれず)

高代

転任の噂流れて花曇り

花賞で余裕出来たが財なし

孤舟

(失職へ無情な花の季節来り)

勇退の花道やはり肩が落ち

天人

もう一花定退前に転職し

(脱サラでひと花求める上に生き)

義男

花好きが少し褒められその気なり

昭治

(褒められてその気で花の苗を上げ)

花も実もないけど実年有難し

露芳

(倅の部でしょう花も実もないが)

自然はいろんな仕組を与えていますね。

種のため花の首切るチューリップ

兼治郎

(球根を太らす花の首を切る)

レンゲは蜂を招きいとい実を結ぶ

喜代志

(レンゲ草蜂を誘って実を結ぶ)

最後は花のETC。

すれ違い後から匂うもくせい花

八重子

(ジョギングで曲れば木犀匂う家)

花の枝吊した佳句が濡れていた

よし津

花活ける時の花瓶は我を殺し

義男

(花のいのちを活ける花瓶へ我を殺し)

花の精になつて幼子描いている

やすお

(花の精になつた心で描く童画)

花描き花の動きをじかに視る

稔

(写生する花は生きてる花の私語)

満ち足りて花屋から出る誕生日

春枝

税務署の帰りパーマし花を買い

悦子

(確定申告済まして花を買いに寄る)

風花よ別れ上手に消えてゆく

高代

(風花よ別れ上手に消えたひと)

題 「友達」 4月10日締切(6月号発表)

ハガキに5句以内

「公園」 5月10日締切(7月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一―九九

阿萬 萬的

読 む

有働芳仙選

読める字がこんなに少ない書道展  
 キンニクマン読む子の瞳が燃えている  
 嫁姑こころ読み合い丸く住み  
 週刊誌読んで浅知恵撒き散らし  
 人の腹読んだつもりが読まれて居  
 新築の書齋でマンガ読んでいる  
 背文字だけ並べていつか読むつもり  
 票読みをしているつもり握手せめ  
 読むうちに主義の違いを放り出す  
 読むうちに主義の違いを放り出す  
 台本を読む脇役の鼻めがね  
 読む暇のないのに本を持ち歩き  
 読む暇が出来た頃には眼がかすみ  
 物言わぬ男の腹を腹で読む  
 祝電の字は読まれずに以下同文  
 便り読む雨の飯場の裸球  
 武勇伝大声で読むおじいちゃん  
 小心で人の顔色ばかり読み  
 立読みははたき位で驚かず  
 読む事もおぼえ嬉しい一年生  
 六法を読んで父さん身構える  
 カンのいい嫁にお天気すぐ読まれ  
 弔辞読む代理に仏なじめない

重人 知恵子 右近 八太郎 本蔭棒 三和 諷云児 白峰 八重 新造 博友 雀踊子 繁子 代仕男 悟郎 里風 たず子  
 ハイウエイ広告ばかり読まされる  
 真実を読む目が欲しい情報化  
 読みかけのしおりへ亡母が生きている  
 霧囲気を読む来賓の咽喉仏  
 文芸欄読んで株価に縁がない  
 実年で眼鏡かけたたりはずしたり  
 一本の指見逃さぬセリoriの読み  
 弔電の肩書きだけを張り上げる  
 肚を読む無口な妻がいる安堵  
 裏ばかり読む癖ついたふしあわせ  
 書き終えた遺書読みなおす背が寒い  
 万歩計が読む実年の軌みかも  
 立読みで祝辞の欄を暗記する  
 読む度に拡大鏡が先に立つ  
 善人の手の内たわいなく読まれ

四郎 實代 昭代 正敏 豊 麻黄 喜与志 宵明 優 落児 雄々 三枝子 倫子 清治 弘朗 佳雲 文平 俊子 孤舟 愛論 砥代  
 声出して読んでごらんとミシン踏む  
 ライバルが読む新刊は俺も読む  
 その裏を読んで距離おくふところ手  
 姐は妻のリズムを読んでる  
 みんなして碑文の読めぬハイキング  
 あなたにもついて行きたい本を読む  
 地 天 軸  
 肚読めぬままに言葉がすれ違い  
 秒読みにになると扇子が動かない  
 虹汀  
 深酒は身体に毒よと胃が合図  
 その中間魔さんからくる合図  
 突然の空咳これは合図だろ  
 ラブコール愛はふたりだけのもの  
 母になる合図おなかで暴れてる  
 合図待つ裁きの庭へVサイン  
 目に見えぬ風の合図で四季めぐる  
 約束の合図と違うのに困り  
 嫌やと言う娘の合図  
 青空へ合図している葱坊主  
 合図等いらぬあなたの息づかい  
 空腹の合図に鳴かす肚の虫  
 懸命な女の合図が解らない  
 ウィンクに答えてくれぬ青い鳥  
 猫柳ふくらみ春を合図する  
 玄関で妻が進軍ラッパ吹く  
 春風に合図をもらう渡り鳥  
 タクト振る父の合図で手をつなく  
 退社ベル合図がそつとメモで来る  
 指笛で二つ並んだ影法師  
 初雪を神経痛が合図する  
 口笛の合図で窓の灯がゆれる

合 図

野中御前選

八太郎 大太朗 智恵子 寿美 道子 軒太楼 美穂子 弘朗 七面山 玉恵 輝月 里風 公一 秋人 孤舟 正坊 可住

イヤリング揺れてシグナル青となる  
ぼっくりと逝ける合図を祈願する  
規不風  
若者は良いなウインク派手にして  
ちよ  
春を呼ぶ合図のように牡丹雪  
どんたく  
負け犬の合図誰にも届かない  
重人  
指笛が鳴って二階の灯が消える  
宵明  
ネオンの灯妻のサインが届かない  
砥代  
口笛が娘をぬすむ合図とは  
三和  
人形がこつちを向いている合図  
忠三  
口笛の合図が窓にとどかない  
テ  
其の先は言わせない袖を引く  
素身郎  
いつ合図したのか二人だけ消える  
ちかし  
妻の眼の合図が盃重くする  
雀踊子  
うつくしく別れる女へ発車ベル  
枯梢  
発車ベル鳴ると絆が切れそうで

瞳の合図だけのナウな思慕もある  
多賀子  
知恵袋妻の合図で絞ろうか  
雄々  
最夜中のベルは計報の臭いする  
あき  
春風がやっつ届いて「サクラサク」  
高子  
妻の目がそれは駄目よという合図  
章久

北浜は指の合図で生きる町  
多駄子  
合図する鬼を一匹飼っておく  
地 脇  
天

十本の指が踊って朝の市  
明水  
目で合図命をつなぐメス握り  
軸

餌

中村 優選

欲望の餌食となった老いの金  
公一  
初孫と鳩に餌やる散歩道  
陽子  
仕舞い忘れたカラカラの餌と虫  
愛論  
宇宙食人間の餌できあがり  
三五鳥  
婦人会餌に女房は鉄砲玉  
諷云児  
甘い餌に乗ったむくいの針の山  
文平  
客を釣る餌に目玉の品ならべ  
軒太楼  
甘い餌につられて渡る丸木橋  
寿美  
撒いておくいつかは小鳥寄ってくる  
実  
ネオン街餌は電話の甘い声  
四郎  
たぷりの餌で生簀の魚太る  
あやめ  
芋の蔓食べた昔を忘れまい  
たず子  
病棟の窓に餌づけの鳥の声  
今子  
鞭と餌だけで猛獣動かない  
みのる  
野良猫が餌を待ってるごみ出し日  
博子  
可愛がることにひ弱な餌を与う  
与呂志  
旨すぎる餌にかくれた落し穴  
サワ子  
餌代の採算とれぬ魚籠の嵩  
どんたく  
餌付した小鳥の愛のこまやかさ  
美津枝  
親鳥に首を伸して軒つばめ  
寿恵子  
旅立ちにも一度念押す猫の餌  
兼治郎  
かたつむりの餌になります春の雨  
玉恵

餌ねだる平和の使徒に兎が惑い  
大柏  
餌代を稼ぐ日銭に飢がある  
雀踊子  
手を打てば餌かと寄ってくる金魚  
やすお  
檻に住み餌の良し悪し申されず  
千秀  
風見鶏餌置く方へ翫びかわり  
智恵子  
パンダの瞳笹のみどりに母国恋う  
よし津  
餌をやれば仁義しっぽをふる野犬  
紀雄  
釣り餌を外せば温い風が吹き  
伊津志  
別荘の犬がロースを食へ飽きる  
耕花  
愛嬌よし餌も喰わない陶狸  
章久  
注連の稲穂へ冬の雀たち  
芳子  
票田へ撒餌のように出す賀状  
悠泉  
いい餌に飼慣らされためだか衆  
豊

青春の構図に甘い餌がある  
三枝子  
白鳥に餌を撒く人の白い息  
右近  
餌運ぶ父の背中を信じ切る  
市朗  
贅沢な撒き餌に馴れて浮不動  
幸一  
ほどほどの高さに餌が置いてある  
道子  
飽食の鳩がまたいだパンの耳  
高子  
鉤針の殺意を知らぬ雑魚の群  
地 枯梢  
天  
平等に餌を与えて愛の笛  
雄々  
鯛を吊るつもり粗品に泣かされる  
軸

# 柳界展望

集録・板尾岳人

相性・淡い・アイドル

ハガキ大にて各題各名別

出句料 千円

賞30位まで・〆切り3月30

日・投句先下22横浜市神奈

川区松ヶ丘八四 清水みつ

る方

主催・横浜川柳懇話会

★第16回紋太忌川柳大会

日・4月27日(日) AM 11時

所・兵庫県福祉センター13

階大会議場

渚 長谷川 好子選

渡る 加藤きよと選

夜 高島 真砂子選

書く 岸下 吉秋選

数 土田 欣之選

途中 松村 喜よし選

匙 池田 南岳選

加速 藤本 静港子謝選

各題2句・欠席投句拝辞

〆切り12時・会費千円

主催・ふあうすと川柳社

後援・神戸新聞社

★寺尾俊平句集「葦川」発

刊記念川柳大会

日・7月13日(日) AM 9時

所・岡山ロイヤルホテル

詳細公号

主催・「俊平さんのところ  
を覗いてみませんか」をす  
める会

★第5回新京都誌上句会

「奥」前原勝郎・村井見也

子・足立玲子共選、はがき

にて〆切り5月10日消印ま

で 各題3句

投句先下604京都市中京区姉

小路通柳馬場西入ル京都新

京都社 投句料無料

★第17回川上三太郎賞募集

雑詠5句・未発表作品

〆切り・4月20日着・千円

同封のこと

投句先下956新津局私書箱15

号・柳都川柳社

★合同句集「風」出版記念

川柳大会

日・6月15日(日) AM 10時

所・松江温泉・なにもわ別館

事前投句〆切り5月15日

花 時実 新子選

明るい 柴田 午朗選

朝 天根 夢草選

仏 山根 鼻人選

金築 雨学選

当日出句

笑う 室田 千尋選

浜田義一郎 監修  
八木 敬一 校注

## 誹風 柳多留 四篇

七百二十句の句解と、わかり易い語釈  
のついた、本誌の古句研究でおなじみの  
八木敬一先生の労作の著書です。

■定価 五百六十円

発行所 社会思想社

生きる

流れる

飾る

声

各題2句〆切AM11時

主催・風の会 後援・島根

県川柳協会

▽同人消息△

■京都市傷痍軍人会・妻の

会大会において戦傷病者の

福祉向上に功績のあった山

本規不風氏(同人)が表彰

された。

■大阪商工新聞(大商川柳)

塩満敏選

高杉 鬼遊選

津川 紫吻選

園田恵美子選

但見石花菜選

義理チヨコと知らずニンマ

り五十歳 渋谷 姫

行革のなき軍拉に年は明け

黒田 了一

■八木千代さん(同人) 3

月7日、近くに火災あり、

五軒目まで迫るも幸い風向

き変り類焼を免れた。

▽お便り△

■先般の当文化祭の折り薫

風先生より拝受しました色

紙大切にしております。

(浜本久仁於)

く何故か集中して物を書く

小生只今たいへん忙がし

紙大切にしております。

事が出来ず、すぐ疲れて寝てしまふ毎日です。

(柳楽 鶴丸)

悔み申上げます。会者常離さてさり乍らさりながら

(土居 耕花)

■竹原創立30周年を9月に迎えさせて頂きます。何んと申ししても小会は本社のお力添えを頼るしかありません。

(山内 静水)

■句集を出すことになって句の整理を重ねたが、その折り、その時の思い出が連

なつて少し湿っぽくなった。計報聞く一瞬空も山も寂し

(寺尾 俊平)

■本年1月号の中から極めて印象深い句があり、まつやま誌「あとがき」に借用させて頂きました。

聴えたら長い電話をするだらう。

北野 久子

この句の作者か周辺に耳の不自由な方があるに違いない。健常者に心身に障害を持つ人の痛みは分かるま

花 俊子

額価800円(送料200円)

い。作品の価値や味わい方も違ふということ痛いのほ

と悪い知らされた。川柳(まつやま) 合田桂水

▽句集発刊△ 中村俊子川柳作品集(花の雨)ふとしたきっかけて現代の川柳を知った著者の10

年史。花と人生を重ね合わせて描いた魅惑の300句。手に触れる坂の途中の沈丁

野瀬昌子

■同64P下段一行目「セレード窓辺の影を待っている」池田寿美子

▽訂正△

■2月号58P上段「地下茎に誰も気付かぬ出来心」

■3月号43P下段最終行

野瀬昌子

■同64P下段一行目「セレード窓辺の影を待っている」池田寿美子

## 第十回 全日本川柳大会

日時 昭和61年6月8日(日)午前10時開場

場所 大分県別府市南立石二一四一一七

鶴見園グランドホテル

宿題 第一部(事前投句)5月10日締切)

島 藤原時化緒 選

勝つ 仲川たけし 選

開く 内藤 凡柳 選

35×18センチの句箋一枚に一句宛記入、

無記名、封筒に住所氏名明記し投句料一

〇〇〇円(定額小為替、現金書留)同封

5月10日必着のこと。

投句先 千五四二大阪市南区谷町七丁目一ノ三九  
新谷町第二ビル二〇六号

## 宿題

第二部(当日出句・締切12時)

野村太茂津 選

茂る 黒田 高司 選

生きる 齊藤 大雄 選

道 池田 可宵 選

各部各題共二句、未発表作品に限る

当日出席者の会費一、五〇〇円(昼食記念品代共)

文部大臣奨励賞、川柳大賞は大会賞受

賞作品の中より後日、日川協理事全員

の選考により決定される。

## ▼別府大分観光その他

6月7日別府駅前午後1時30分集合

行先 別府→アフリカンサファリ→湯布院→

民芸村→坊主海地獄→午後4時鶴見園グランドホテル帰着予定

観光費用 金四、五〇〇円

▼大会懇親パーティー(前夜祭)

同日午後6時から午後8時

鶴見園グランドホテル大広間

会費 金八、〇〇〇円

▼宿泊 鶴見園グランドホテル

宿泊費 金七、〇〇〇円(朝食を含む)

▼右観光、前夜祭、宿泊希望の方は4月30日迄に左記へ

別府市天満町一六一三三 尾花白風

# 本社 三月旬会

三月七日(金) 午後六時

メンズフアツションセンター

2月17日に亡くなられた中島生々庵先生は生前、元気なときから「わしが死んだら葬式は柳宏子に頼む」と言っておられたとか。今月の柳宏子氏のおはなしは当然、生々庵先生の思い出。

「先生は『葉隠』の佐賀県人らしく剛気な半面、心やさしい方であった。6歳の時、父に死別、母は先生を連れて再婚、経済的な不自由はなかったものの、こうした幼時からの体験が、常に他人の気持を察するという行き届いた人格形成の土台になっているのではないだろうか。小児科の名医として逸話が多いが、日本人のこどもは、生後一年経ったら大人と同じ食事を出来るように育てよ。それには米が一番大事な食糧。子供の病気は親の責任」と徹底した育児ルールを説かれた。叱られた親には腹の立つ言葉も、第三者が聞くと至極もつともな説得力のある指示であった。」  
初出席は塚本きみ(京都市)、崎山美子(東

大阪市)。呼名賞は冬葉、愛論、洋敏の三氏。月間賞は栗主幹が獲得された。(史)

(進行)天笑 (受付)年代・冬葉  
(記録)射月芳・岳人・山久

出席者―笛生・作二郎・紫香・佳秋・春蘭

柳伸・雀踊子・紀雄・寿美子・白溪子・杜的  
武庫坊・年代・一郎・鬼遊・重人・冬葉・千代三・満津子・道子・喜風・勝美・英千子・隆二・眉水・水客・英子・はつ絵・いわゑ・栗・形水・美子・小路・楓葉・智子・智慧子  
蕉露・東雲・幸・愛論・雄次郎・幹齊・泰子  
史好・美房・吸江・信治・弥生・久子・藤子  
度・山久・文秋・たつお・湖風・正坊・幸生  
射月芳・柳宏子・悦郎・勝晴・凡九郎・白兔  
三男・萬的・トメ子・メ女・三十四・規不風  
きみ・柳影・狸村・洋敏・吐来・金太・章久  
頂留子・敏・天笑・月子・太茂津・美代子・  
美幸・憲祐・岳人・寿美・みつ子・俊平・一  
二三・薰風・寿子・佐久良

## 席題「税金」 片岡湖風選

相続の一部を処分させた税  
税務署を出ると春一番に会う  
税金はあなた任せの米洗う  
頭打ちしてから税に抜け目ない  
無人駅に税金すこし落ちていく  
申告書渡しおじぎを繰り返す  
税金が払える幸だと思つ

白溪子 冬葉 久子 久子 太茂津 信治 美代子

税務署へ行く白旗をポケットに  
脱税の数字よ何を信じよ  
申告をすませて春にまぎれ込む  
翔んでいる女で税に強くなり  
元気で税金ちゃんを払ってます

税金を払う先祖の樹を売って  
税金の話になるとむきになる  
税金の上手な納め方を聴く  
税務署を悪いと思つた事が無い  
税差別幸せらしき事という

胸算用に程遠かった還付税  
税金の戻りに一杯飲んで来た  
税金を納めた顔で空を見る  
税金がやよいの抄へ棲みつきの  
税務署で腹を立てると負けになる

督促のハガキに鬼の顔がある  
税金の行方をうたぐつた事がある  
税金を払いすぎてた丸い月  
税金のウツ慰めて花開く

税務署に表彰されてからの坂  
泣きごとを言うて小さな税済ます  
税務署へわたしの冬を置きに行く  
税金の使途に硝煙匂いだす

戻り税金の出費が待っている  
脱税へ虹の破片が身に刺さる  
税金で渴いた町を救えるか  
税務署でぬくみを説いている詩人

冬眠の森税金が押し寄せる  
脱税はせぬ腹芸をさぐり合う

信治 信治 寿美 三男 天笑 藤子 智慧子 吐来 水客 英子 勝晴 美幸 寿子 眉水 雀踊子 幸

柳伸 作一郎 美幸 寿子 智郎 幹齊 寿美 年代 天笑 紀雄 俊平

雀踊子 幸 眉水 寿子 美幸 勝晴 英子 吐来 水客 智慧子 藤子 天笑 三男 寿美 信治 信治

税金が重くて妻の手を握る  
税金の噂も飢えて春になる  
妻や子をとて愛している税吏  
申告の帰りに肉と葱を買う  
税金のはなしを暗い顔で聞く

席題「胸」

寺尾俊平選

沈黙の鳥が胸から飛びたたぬ  
すぐ胸を叩く男に距離をおく  
わが胸で夢喰べている青い鳥  
胸に手を当て危機抜けた音を聞く  
胸覗き観音さまに叱られる  
胸を病む少女で雨の詩を作る  
胸のうち聞く二次会へ従いてゆく  
春へふくらむ胸です路の臺に似て  
母さんの胸が謀叛を鎮めさせ  
石礫あなたの胸の奥辺り  
円高の胸中重い靴をはく  
救心を隠れて飲んだ初デート  
飛び込んだ胸は意外に狭かった  
胸算用よい事はばかり続かない  
胸の何処かに野火こうとうと燃やすなり  
シベリヤが胸の奥から消えやらぬ  
妻の笑顔にすこし胸がいたまぬか  
胸に棲む人とシヨパンを聴いている  
泣かせてくれる胸があるから逢いにゆく  
胸痛む噂を風が持つてくる  
コスモスを買う街にある父の胸  
胸三寸言葉をたたむむつかしさ

岳人 作二郎 射月芳 年代 湖風  
武庫坊 たつお 武庫坊 幸生 文秋 幸生 千代三 水客 萬的 道子 大茂津 幹齊 冬葉 楓楽 文秋 作二郎 重人 幸生 智子 たつお 月子 岳人 智慧子

美辞麗句胸の中までそうなのか  
胸襟をひらいて又も二日酔い  
啓蟄や胸のつかえも吐き出そう  
ボンと胸叩いておいてそれつきり  
相槌を打って胸のつかえが少しおり  
トランプのエース一枚胸にある  
胸底を見られたくないサングラス  
ふくよかな胸に明日の針がある  
生萎湯孤独な春の胸に沁み  
追伸の一行に胸あつくなる  
胸を病む過去の子で雪と言う  
妹と話す胸が動悸打ち  
今日は快晴ひと回り大きくなる胸  
胸の底まで閻魔から盗まれる  
しなやかにドキッとさせる事を言う  
そして笑って胸の痛みを喰いだす  
胸の奥見せてそのまま貝になる  
胸に枯野棲まわせ友がひとり減る  
わが胸の妻は木乃伊になりはてる

兼題「証拠」

藤村 女選

血液はあなたと同じA型よ  
のぼせてる証拠赤信号が目に入らぬ  
証拠はないが六感が利いている  
不吉の証拠か仏壇の花が落ち  
粉ごなのガラス集めている証拠  
証拠品そろえて相手の出方待つ  
好い加減な証拠マスコミ記事にする  
春が来る証拠乳房うずき出す

春蘭 吸江 三男 柳宏子 水客 弥生 楓楽 雄次郎 英壬子 笛生 雀踊子 洋敏 白兔 白兔 いわゑ 太茂津 みつ子 作二郎 俊平 鬼遊 満津子 冬葉 吸江 千代三 美子 白漢子 道子

藤井明朗喜寿祝賀

観桜川柳大会

日時 61年4月20日(日) 12時開場

会場 木次町社協 福祉センター(橋詰)

講師・選者 黒川紫香、岩本雀踊子

兼題 教える・若い・登る・感謝・

席題 2題 明るい・朗らか・各題2句

欠席投句の方は各題別紙500円

封入四月十日まで左記へ

〒699-13 島根県木次郵便局内

小林 延子宛

近畿文字放送作品募集

題 「仲よし」 3句

締切 4月10日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

九分九厘物的証拠出ぬ焦り  
 不覚にも証拠写真が残つてた  
 うすいうすい証へ孤児がしがみつ  
 フォーカスは証拠にすまい鬼の首  
 惚れている証拠に頬が赤くなる  
 二人の旅の証拠に拾う桜貝  
 他愛ない証拠つかんだ妻の眉  
 儲けてる証拠生活が派手になる  
 入れ墨の桜が証拠と恐れ入り  
 地動説それが証拠に四季があり  
 出張の証拠大阪駅で買い  
 俺の目を外らす一物ある証拠  
 二枚舌証拠はテープが握つてる  
 もう春の陽射しだ土筆顔を出す  
 妻の掌に証拠がいつも置いてある  
 何よりの証拠金さん肩を脱ぎ  
 尻尾掴まれているとは知らぬとほけよう  
 愛さめた証拠でしようか便り減る  
 ロス疑惑証拠ないのもどかしい  
 へその緒書きを証拠に産みの母と逢う  
 生きている証拠朝の髭が伸び  
 にんまりと妻が笑っている証拠  
 生きて行く証拠に地下足袋干してある  
 動かせぬ証拠知つてる花時計  
 回復の証拠お薬忘れがち  
 臍の緒の証しに残す子守唄  
 嫉妬した証拠が残る爪の跡  
 名が売れた証拠フォーカスに狙われる  
 儲けてる証拠にペンツ買いはった

小路 冬葉 雀踊子 幸生 紫香 幸 萬的 文秋 三十四 勝美 千代三 太茂津 章久 柳宏子 岳人 三男 柳宏子 博子 洋敏 たつお 杜的 信治 雀踊子 佳秋 久子 雀踊子 白峰 三男 金太

わさび漬買うのは旅をした証し  
 楽しむように証拠の品で攻める妻  
 人徳の証しは弔問客の列  
 証拠には勝てず重たい口ひらく

兼題「地図」 大路美幸選

頼りない地図で一日棒にふる  
 提灯がいつもゆれれる父の地図  
 がんご親父の地図がわかつてきた息子  
 方言がいつまで消えぬ亡母の地図  
 この地図からは急な坂など読みとれぬ  
 檜山の地図なら父の部屋にある  
 地図を辿ればおとぎ噺はきつとある  
 思い出の旅を小指で探す地図  
 少年に国境がない春の地図  
 世界地図抜け息子のエアメール  
 彩のない地図少年に与えよう  
 旅行地図お湯の温度は書いてない  
 春は鱗が賑やかになる岬の地図  
 二人だけ知つてる地図が貼つてある  
 地図にない街に光を求め住む  
 ミサイルがこちらを向いた極秘地図  
 バラ色の地図が薄れる倦怠期  
 定年の夫婦が探す花の地図  
 お寺さん中心に見た村の地図  
 若い血を躍らせて見た世界地図  
 旅の地図別のプランを詰めて置く  
 檜山のかすれた地図を捨てられず  
 定年の無職に今日の地図がない

作一郎 芳子 楓楽 女 月子 鬼遊 天笑 柳伸 白兔 湖風 年代 杜的 弥生 みつ子 俊平 白浜子 作一郎 小路 武庫坊 芳子 道子 山久 笛生 柳宏子 悦郎 はつ絵 美房

地図にない村で拾つた人の愛  
 子の街の地図が炬燵ですり切れる  
 丹念に空白うめる夫婦地図  
 日本地図一兵卒の血が滲む  
 修羅くぐる地図を子供に教えとく  
 テープルに冷めたコーヒーで地図を書く  
 ぬくもりを地図から貰い旅にいる  
 青年の地図突然に塗り替り  
 青丹よし奈良にやすらぐ地図がある  
 少しずつ縮まってゆく父の地図  
 子に譲る地図で左折は皆禁止  
 島の地図島に十字の墓がある  
 それからは地図を信用せぬか女  
 どんな地図描いているのか子の寝顔  
 父さんの地図で母さんまた迷い  
 ジャンケンに負けると地図は白くなる  
 地図を這う指はずんでる車椅子  
 息子たちの地図を問いつめたりしない  
 世界地図ここに私の恥がある  
 修羅を行く父は地獄の地図を持つ

吸江 耕花 金太 美房 妻子 白兔 水客 天笑 信治 智子 憲祐 作一郎 規不風 美代子 度 岳人 美子 天笑 重人 美幸

園山多賀子さん(出雲市)より  
 句集「婦唱夫随」出版記念として  
 金一封拝受致しました。  
 川柳塔社

兼題「選ぶ」 辻 白漢子選

法学部選んで悪の道走る  
 選ばれて利用をされただけの事  
 一言の多いおとこが選ばれる  
 カメラアイ選んだ女が振り向かぬ  
 選びたい人見当らぬ立候補  
 ネットアイを選んできたのは他人  
 祭る神選ぶ権利はこちのもの  
 人間が選ぶんやからこんなもの  
 欺しよい相手を選ぶ電話口  
 言葉ひとつ選べぬままにプロポーズ  
 ドラフトに選ぶ権利を奪われる  
 選ばれたものの戸惑うことばかり  
 ふところも知らず私立を子が選ぶ  
 酒癖が崇り幹事の選にもれ  
 しつかりと選んだ苦の離婚沙汰  
 こんなわたし選んでくれたのはあなた  
 爺ちゃんの一字をもらう名を選び  
 チャンネルを選ぶ権利は持っている  
 お互いを選びぬた離婚沙汰  
 ネットアイも靴も女房任せです  
 親よりも恋を選んだ置手紙  
 投票をする指先に嘘がある  
 パーゲンで選んだ品と見せず着る  
 さんざんに選び当たらぬくじを買う  
 大学を選んでは入れない  
 餞別の額で選んでいるみやげ  
 この次はあなたと違う人選ぶ

千代三 失名 紀雄 紫香 柳宏子 湖風 憲祐 凡九郎 洋敏 寿子 洋敏 形水 金太 トメ子 頂留子 正坊 女 芳子 幸一 天笑 たつお 寿子 美房 憲祐 洋敏 信治 泰子

強引に選ばれ強引に追い出され  
 後悔は同じどちらを選んでも  
 筈はなるべく小さいのを選ぶ  
 子に贈る言葉を選ぶ飲みづかれ  
 神様の選んだ男対女  
 選ぶ根拠はないが一票差し上げる  
 市場鋭い選球眼をもつ  
 自分の道を選ぶ大人になっている  
 その先は個性が生きる道選ぶ  
 本選ぶ顔で毎日読みにくる  
 病人へ明るい話題だけ選ぶ  
 両親と同居を選んで子が持てず  
 夫婦かなし死ぬ順番を選べない  
 嫁選び過保護は親に頼り切り

兼題「亀」 黒川紫香選

どんたく 史好 水客 美幸 幸一 度 智子 天笑 英子 たつお 弥生 信治 白漢子 英子 萬的 正坊 雀踊子 笛生 芳子 白漢子 智子 道子 狸村 楓楽 藤子 武庫坊

手打てば用の無い亀首を出し  
 謎のまま耐えてる飛鳥の亀の石  
 乙姫のつぶやき聞いた亀の耳  
 それからの浦島太郎知らずに亀も死に  
 亀の背は浦島太郎覚えてる  
 水槽の海亀首出すことに慣れ  
 昼寝する兎起こさぬ狡い亀  
 それからの亀ライバルにされてる  
 窓際の亀で甲羅を干している  
 懸命に子亀が戻る母の海  
 小心な亀で大きな甲羅持つ  
 ひたすらに歩くしかない亀の意地  
 せい一杯首をのばして亀花見

ちよつとしたはずみで亀は旅に出る  
 水ぬるむボツリと亀の首動く  
 旗立てた亀の話を孫にする  
 迷わずに土手に帰ってゆく子亀  
 雨止んで手玉まで亀が這い上り  
 仰向いた亀はあせっているのかな  
 子等の輪の中に動かぬ亀一匹  
 あれ以来自信過剰になった亀  
 マイペースを守り続けるうちの亀  
 泥亀が満足してる日向ぼこ  
 放生池亡母へ小さな亀放つ  
 叱られて亀と喋っている少年  
 すっぱんの首が伸びるも春だから  
 亀の甲一步も引かぬ意志があり  
 最後には勝つ気で亀のマイペース  
 海亀の来る晩沖も風いている  
 猿沢池亀も一しよに魅をもらい  
 亀さんは決して後をふり向かず  
 亀の池の亀にも自分の眠る位置  
 石つべて迷惑そうに亀動き  
 せっかちな亀が私の側に居る  
 天王寺を亀は一步も出たがらぬ  
 兎に負けぬ宿命を亀気付かない  
 時たまに浮世を覗く亀の首  
 スマートに走つてみた若い亀  
 天王寺の亀もめごとを聞いている  
 亀の背に散る花びらははなれない  
 春つらら亀の背中は乾ききる

作一郎 柳宏子 女 藤子 白漢子 智恵子 愛論 千代三 智子 悦郎 満津子 岳人 俊平 天笑 文秋 三十四 笛生 月子 萬的 愛論 隆二 英子 水客 鬼遊 みつ子 作一郎 栗 紫香

(清記・智子)



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。  
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

むらくも川柳会

藤井 明朗報

平和の鐘撞いても庶民の高枕  
すきま風枕気になる旅の宿  
逢えぬまま枕が濡れる祖国の夜  
立春へ大地も鼓動高鳴って  
お気軽においでと女独り住み  
向い風思わず髪へ手をのばし  
世間体気にし見栄張る妻の愚痴  
世間か色目で見られる若後家さん  
男と女の話とかく世間は触れたがり  
立春へ遠いどこかで春の音  
ひじ枕乳房ふくます母平和  
ふれあいの温みで世間広くなり  
ジーパンで気軽く春の旅たのし  
瘦我慢張って世間に義理を立て  
立春の朝からまたも雪の華  
若者の髪は男女がわからない  
結論が出て気軽さをとりもどし  
ねんころり枕は母の歌が好き  
それとなく世間話にして論し

三幸川柳教室

桜井 千秀報

早合点思わぬお荷物背負わされ  
諦める早さも大事と説く人生  
目の動き捉える術は母に負け  
早生まれハンディ背負ったランドセル  
地価上がる速さにかせぎ追いつかず  
娘の縁談わけもきかずにまだ早い  
願ひ事する間がほしい流れ星  
背信の明日へ堕ちてゆく速さ  
還付金もつけたような気にされる  
掃帚本能信じて放つ籠の鳥  
モンペ姿でも青春は光ってず  
窓の雪試してみたいが本読めず  
光栄に浴して気儘に振舞えず  
匙投げた生命に淡い灯がともる  
冷やかな光沢箱にある驕り  
月影の清さにこたわり溶けてゆく  
夜光虫人魚の溜息かも知れぬ  
平凡な母の生きざまいふし銀  
肩書きが取れても光失わす

打吹川柳会

奥谷 弘明報

敬老の一番風呂が肌を刺し  
ぬるま湯の中で決断下せない  
恍惚の父へせめてもの昼の風呂  
湯どうふを囲んでつつがなく暮れる  
湯加減を茶筌が一番知っている  
下手親父舞台は湯殿のど自慢  
もらい風呂肌肌につき合い丸く生き  
ぬるま湯にまれ目標を見失い  
何もかも聞かしてほしい酒を注ぐ  
すげ替えの手間だけ無駄な顔ならば  
今朝もまた生かさされている有難さ

川柳サークル卯の花

辻 白溪子報

円満の鍵は姑と嫁が持ち  
子の声が亡夫に似ている電話口  
ジュエータンの模様は欲しい秋の山  
あれこれと余白に地図を載せて見る  
迷いから決断せまる子の寝顔  
年末を横目に球打つ忙しき  
あれこれと迷って父と土をふむ  
苦勞して仕上げた子等は顧みず  
三ヶ日トラにもならず祝い膳  
虎の尾を大事に夢を持ち続け  
虎の威を借りず今年も生きたて行く松川芳  
竹の笹張り子の虎が重たかろ  
彫り上げた版画の虎に髭がない 河瀬芳子  
サファリーの虎吼えもせず起きもせず  
掛軸の虎が結納ガードする  
虎の尾を踏む思いするジャンプ台  
敵か味方か首振る虎になっている  
檻の虎草原の夢見てるだろっ  
教養も嗜着も揃って嫁さおくれ  
偉そうに揃えておけと電話口  
いい話で帰ってもらっ靴揃え  
揃ってもひとり足りない母の影  
掃帚の子揃いのエプロンははずせない  
吊り皮の揃って揺れている自由  
揃うのを待ちくたびれた千羽鶴  
十二支のハンコが揃う年賀状  
孫たちが揃う茶の間の鏡餅  
謀反する男が揃う三次会  
床柱だけが残った故郷の家  
床柱背にずっしりと鏡餅

いわ子 佳女 菊枝 節朗 吉朗 文子 庸子 亮二 敏正 春風 芳子 風児 明子 水客 一郎 散步 房露子 秀男 百合子 井寒 千歩 草木 如洲 和友 里代

珍客の背中見ている床柱  
 床柱つばき一輪にある簡素  
 踊つた妓が酌ぎに来る床柱  
 人生の節目節目を床柱  
 嫁さんが代々磨く床柱  
 北山の風の音きく床柱  
 紋付がとつても似合う床柱  
 結構な余生にふつと思つ齡  
 おみくじをひきなおしての初詣

種子 高子 白溪子 杜的 年代 鬼遊 紫香 梅風 スミニ

鐘だけは平和に鳴つてる京の寺  
 成人のどの瞳も希望の虹を見る  
 ヒーローの伝記悪女が書き替える  
 聞きあいた抱負を笑う福寿草  
 バス乗つて行けぬ体へ無料パス  
 衆生恩お世話になつた社と訣れ  
 京都まで羽織のひもを買いに行き  
 菜の花のそこだけ音の無き世界  
 植村客遊子報

女 美 津 栄 子 多賀子 惠美子  
 さと美 良太 志津 花代子 栄子 多賀子 惠美子  
 うっかりと本心吐いた日の誤算  
 座ぶとんを敷いて本音を喋り出し  
 当りそうな女の年齢を五つ引き  
 頼りない男だなあと金のこと  
 寅年にかけて手相も吉と出る  
 福笹をかつぎまっすぐ歩けない  
 自己主張やがては果てる柿の赤  
 赤旗を振つても貨車は動かない  
 西雲ひと旅ならまだ歩く  
 お祝いの言葉少なく酒となる  
 百八ツ聞いてから行く初詣で  
 ファミコンにTV取られた寝正月  
 孫の弾くピアノで合唱イブ更ける  
 子を信じ子を自慢して母の顔  
 負けて勝つ一歩ゆずつた老いの坂  
 年金に合せて暮す二十年  
 お年玉はずめば上る祖母の株  
 熟年が軍歌で気を吐く新年会  
 来る客へ見せまわつてるポチ袋  
 川柳わかやま 堀端

60年度各地柳壇賞

田中正坊氏に決る

選者 兎島与呂志

▽秀句

どのペンにかえてもやつぱり僕の文字

田中正坊

人それぞれ文字の上手下手はあつても、  
 心それわし方において変りは無と思つ。  
 だからペンをかえても自分の心と自分の書  
 き馴れた文字が可愛いと思つたろう。句  
 主の文筆多才は知られているし、美しい文  
 と共に文字に自信はあり、どう変えても僕  
 の文字で無ければならないのである。  
 各地それぞれの楽しい句会を育てられる  
 と共にこれからもいい句をお送り下さい。  
 素直な心の、誰にも納得の出来る句がやつ  
 ぱり好きな選になりました。これからも各  
 地柳壇の御支援お願い致します。

〈佳句十句〉  
 繕つてやるすべがない言葉尻 小川 恒明  
 屋上に立つと身投げがしたくなる  
 譲られた席が温いと限らない 福田 礼子  
 野心も捨てた男の無精髭 西田柳宏子  
 投げられた石をおろそかにしない 原 独仙  
 車井戸むかし昔の音がする 春城 年代  
 一人ぐらしせめて余白の白いシャツ 川上 弘生  
 石の位置決める庭師の小半日 高橋 操子  
 退職した日から時計が狂い出す 芦田 大輪  
 豊かさへ四角い西瓜売れている 信本 静江  
 信本 博子

▽各地柳壇賞の表彰を4月7日日本杜句会  
 で行います。

雑草で伸びよキラキラ光る子ら  
 さつぱりと明るい声の不合格  
 明るさが取り柄の母で好かれてる  
 梅便り雨戸を開ける様に言う  
 三男の嫁は明るい現代っ子  
 明るさが紙をはみだす子の自画像  
 懺悔したらしい教会を出る笑顔  
 食卓にいつも花あり明るい娘  
 明るさに戸惑い蝶は花を選る  
 編棒の先で筋道考える  
 筋道にある石ころは蹴飛ばされ

岳詩 実男 大鷹 越山 秋月 紅葉 紅月 悲秋 柏秋 みつこ サワ子 輝月 とし みね子 永楽 まち子 和子 客遊子 三男報 芳朗 豊太 照子 狂虎 紀美女 康勝 英子 雅代 紫香 雅子 紀久子

筋道に触れられたくない鏡  
 筋道のわずらわしさを唾う雲  
 反對の理由も筋道立っている  
 筋道が通つても寒風に会う  
 筋道をたてた話に立つ埃  
 筋道を通す素顔が濡れている  
 幾春秋終の港へ帆をたたむ  
 一枚の帆でかばい合つ夫婦舟  
 真帆片帆欲満載の宝船  
 拍手浴び風に耐えた帆が還る  
 妻の引く帆綱で風をまろくする  
 いたずらな波と風とが帆を試す  
 帆柱に生命をかけて明日へ漕ぐ  
 旅に病み母の港で帆を下ろす  
 絵の中の白帆に風は味方せぬ  
 空想の中で指揮棒振っている  
 空想の好きな女の温い部屋  
 空想の世界に女神置いてある  
 空想が消えるて風呂呼びたいな  
 名画でも買つて友達呼びたいな  
 想像の世界へ誘う白い紙  
 想像もいけどホントどうするの  
 おきな児が童話へ描くユートピア  
 空想ませて描く天平の桃の花  
 独りよがり所詮空想だと笑い  
 金がないから空想やといわれ  
 空想を広げ童話の主となる

川柳泉尾(前月分) 吉川

正子 武雄 正博 久子 ヒロ子 きみ 寿子 信秋 緑良 忠 光代 太茂津 克子 つる子 桂香 公子 幸 輝子 俊平 保夫 節子 信子 凡九郎 登志代 萬的 天彦 柳宏子 三男 三子 道子

寿美報

棘のあるバラが好きだと言う夫  
 遠慮なくくしゃみのできる間柄  
 冬にまだ馴染めずたそがれ人恋し  
 暑がりて寒がり夫婦共に老い  
 二頁目睡眠剤となる読書  
 スリラーを読めばもうすぐ夜があける  
 文庫本積んでマンガを読んでいる  
 ルビ付きの小説なつかし読書会  
 ペンネーム時には世間を狭くする  
 ペンネームあるが小説まだ売れず  
 石つぶて少し避けるペンネーム  
 手が届くけれどもこれは他所の柿  
 手の内を愛された作戦練り直し  
 アフリカへ読者の心の手を伸ばし  
 グラス手に溜息おんな華になる  
 後任の椅子に掛け手がかもつ決まり  
 温い手にふれてから立ち直り  
 父さんの手が温かった肩ぐるま  
 趣味の欄無難な読書と書き

川柳泉尾 吉川

多和子 伴子 トミ子 白水 満州子 敏 昭子 義一 淑子 葉子 弘子 吐来 文子 シマ子 美子 シメ子 美代子 寿美 恭子 弘子 弘子 三千代 伴子 葉子 文子 敏 多和子 弘子 トミ子

寿美報

手鍋下げ戦火のがれた金婚式  
 おでん鍋屋台で愚痴も煮えたぎる  
 われる鍋知っているのは七十年代  
 掃除機が何を飲んだのか二日酔  
 念入りに掃除に心もさんげする  
 大掃除ついでに心もさんげする  
 人生の出直し過去も掃除する  
 大掃除妻が握つた主導権  
 掃除してお喋りになった換気扇  
 Y.F.C 川柳会 人見 翠記報  
 おヒナさん一年一回の晴姿  
 早々に緑かすいで雑仕舞  
 山あいの雑木さむぎむささこなく  
 ほんぼりにおかっぱませた口をきき  
 ほんぼりに桃のつぼみのふくれよう  
 短冊を雛の絵にして風邪の部屋  
 受験期が迫ると母の百度石  
 嫁ぐ娘の春間近に雛飾る  
 風花や社葬に義理の顔がある  
 市場竜奇鍋にした氷点下

川柳たけはら

森井 蒼居報

ふゆはさむいなおちがいちばん  
 ゆきはチラチラうたてにける  
 しゆくたいを毎日ぐすぐすおられる  
 しゆくたいはがんばつたらできるよ  
 タコあげ大会友達ばかりよく上がり  
 お正月おもちをいっばいたべました  
 お年玉年に一度のたのしみだ  
 正月はいないと思つお年玉  
 夕焼けをみてると心がなごみます  
 新年の誓い今年は忘れまい

美代子 美子 義一 満州子 淑子 昭子 白水 シメ子 寿美 泰州 モトエ 久仁子 紅葉子 房子 よし津 翠記 節子 豊平次 四歳ちえ 六歳史子 小二晶美 小二晴美 小五純平 小一祐次郎 小三由博 小六鉄二郎 小六美保 中一早代



鉛筆に人それなりの削り癖  
犬猫も横文字入りの餌に馴れ  
よく食べた日を思い出すのろい箸  
日溜りの句座一輪の梅に沸く  
出かせぎの淋しき語る赤提灯  
拝観停止三年坂に人淋し  
建て売の値に笑われた預金帖  
駅の名をさかさに読んで居る園児  
憎しみが生きる肥しとなつて行く  
親と子の対話はずんで居る湯船  
ファミコンへ幼児の指が先に伸び  
電話料値上げて挨拶抜きにする  
正論を吐いて味わう孤独感  
豆よりもお菓子がほしい鬼が居る  
戦争の恐さ知らない子供部屋  
此の姑の息子と思つ日の隙間

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

寒餅が届いて里の味になる  
まだ本音脱いでは居らぬタバコの火  
ノの夢が果なく割れるシャボン玉  
ノラクロをむちゅうで読んだ発売日  
三対ゼロでペバはいつでも負けている  
露天風呂湯気の中から玉の肌  
明けましてと張り子の虎が首を振る  
旅人になって故郷を訪れる  
親子して漫画読んでる風呂あがり  
歌演技もひとつ出来ず脱いでみる  
地の底に汗で築いたアリの塔  
赤チャンの無心な笑に合ったバス  
口喧嘩を楽しんでいる老夫婦  
並以下の乳房が揺れるブルムーン

圭介 主介 たる子 だだし 達子 有佳 仙吉郎 頼一 静子 登志代 山久 温子 敏子 右近 亀男 弘一 弘生 十四郎 歌子 弘治 いわお 礼子 よしつぐ すみ 昌子 貞吉 武庫坊 佳秋 江助 寅之助 良征

トンビが泣いた島の夕日の無縁仏  
過去捨てた女を横に置いて寝る  
川柳塔きやらばく 石垣 花子報  
また一葉我慢できず秋が近く  
嫁姑我慢比べに負けられぬ  
胸の炎を静める我慢の筆を持つ  
夕焼け小焼け我慢の紐をやつと解く  
良い年を願つて悪女は鐘をつく  
我慢する度にふくれる坐りだこ  
これからの旅に悪女の面を買つ  
償いが叶わぬ月で悪女ぶる  
雨の日は窓の景色で我慢する  
じわじわと闇に我慢を強いられる  
悪女なら娶ろうママゴトにあきた  
我慢した瞳にまぶしすぎます夕焼けが  
悪女の面とれば菩薩の顔になる  
節々に滲む我慢の暦かな  
パーゲンの渦には悪女の面がない  
我慢からコバルト色の目に変わる  
あじさいのむくろ悪女と笑えるか  
歳月が我慢に勲章くれました  
淋しくて悪女が春の絵をさがす  
サークル檸檬 田形 美緒報  
豆がらで豆を煮ている日の自虐  
どうしても追い出さつてもり豆をまく  
豆すぎて困つて居りますあと始末  
豆の木をのぼりつめれば鬼の視野  
足の豆幾つ潰した山男  
福豆を取り合う程も福がなし  
豆ごはん炊いて春待つ掘炬燵  
道標辿つてゆかん亡母の豆

牧郎 紫香 伊都 時子 富枝 花子 八重子 とも子 千春 富美子 日枝子 より子 高代 美世 田鶴 荒介 夕子 千代 玲子 瑞枝 泰子 今日子 千代女 美房 智恵子 三四子 雅子 美緒

佳句地10選 (前月号から)

脇田米朝選

ふとん干す出稼ぎの父明日帰る シマ子  
亡き妻の磨いてくれた靴がある 水声  
怒つてる音まな板が可哀そう かね子  
面白のお方でちよつと不真面目で 美代子  
おたやんの面つけ何時も丸くいる 慶子  
嫁の手の中に割りたい皿がある 井寒  
糸切つて自分で重荷背負う風 狂虎  
札束と俺の誇りは換えられぬ 武雄  
プライドを捨てぬるま湯につかりすぎ 博子  
悔し涙の中に光っている誇り 柳宏子

五色豆ごつとい男の掌に不足 薫風  
翠洋会 中西兼治郎報  
兼治郎

豪雪が村の暮しを暗くする 春子  
騙されていながら上手だなと思つ 君子  
一DKの寮にも菜の花活けてあり さと美  
菜食に替えて美食に飽いた舌 美津枝  
父親の腰巾着で舌が肥え 為子  
鶯の春に先がけ舌足らず 文子  
大宰府の梅一輪に願をかけ 良江  
噂好き雀の舌がよくまわる 照江  
花好きで暮らして中を温める 宏子  
老犬の土と芝とを恋つており 光子  
祈りつつ小さな舌へ風邪ぐすり 綾子  
大死をしたのじゃないぞ九段坂

傷つける言葉はかくす舌の裏  
子は生まず独立独歩する暮し  
いい暮らしさせてやれない肩車

富柳会

藤田

泰子報

今日子

神様の怒りにふれたかとぶ帽子  
傘一つ夫婦で越えた水たまり

笑うとき泣くとき和服にある袂  
着飾っていても淋しい京人形

俺よりも上手に踊る影法師  
ざりざりのところでつづれ織るふたり

その和服女の過去が秘めてある  
女の手少し怒った振りをする

寒い夜妻の怒りが僕にくる  
高こつて困るが和服着たわが娘

娘の和服着せて脱がして畳む世話  
我が影を踏んで行けよと姑の声

人は皆喜怒哀楽の物物さ  
岩の影まねくすずらん恋してると

ときめいて少し和服の衿をぬく  
冬花火いかりはどんな色になる

カラカラと顔で笑っていた怒り  
針供養母から届く薄い影

助六の傘に団十郎の血が流れ  
ない袖は振れぬ和服のふところ手

ステージの傘はくるくる廻すもの  
三十年眠ったままにある和服

お互いの遠慮の傘に背が濡れ  
前を行くちよつと気になる傘の中

木綿縞似合う女にあこがれる

京都塔の会

松川

杜的報

栄

クラス会幸せは成績順でない

みつ子  
登志実  
いつを

美房  
富久一  
庄次

文次  
森下  
花梢

千代女  
伊庭勇  
中田勇

義雄  
花子  
静枝

綾子  
文子  
富美子

柳太  
岳人  
優

曲生  
弘生  
喜久

章久  
山久  
泰子

子

バックミラーに写る女はよく眠り  
サケ誕生アイヌの里の火打ち石  
くじ運の強い女の男運

着いて風呂たべてまた風呂起きて風呂  
手袋の先にたまっている不満

去年今年つき足してゆく縄梯子  
姉・三・六角：少女無心に毬をつく

頭割りへ部長の車代も入れ  
頭割り器用にこなす子沢山

先生は遠慮にしておく頭割り  
頭割り名ばかりの祝い持ってゆく

どの窓も和む団地の灯がともり  
女一人写経に和む夜のしじま

般若湯と言う名で父の顔と和む  
和やかに幹事祝賀の席を持ち

満ち足りた顔かな孫を抱く夫婦  
うす氷手で持ち上げる風の子よ

薄氷張っていますと月参り  
早春のかすかに動く薄氷

肩書を捨てればのれんの灯も和み  
頭割り大人も小人も差別なし

川柳塔まつえ二月例会 恒松

手加減の礫を父が投げて来る  
子への読み浅くて非行の芽が見えず

親子なら許せる甘い猫柳  
父と子の夢がはじけるシャボン玉

衣裳展母娘あれこれ夢を描く  
育つ程親子で描く夢がすれ

親子でもタブーな事は口を閉じ  
あや取りの親子に冬の陽が温い

里帰り親子話へ花が咲き

紫香  
和友  
花村

求芽  
武庫坊  
幸

杜的  
白溪子  
英子

飛鳥  
水客  
冬子

風云児  
鼓城  
敏正

メ女  
明代  
花代子

年代  
芳子  
巨詩

荒介  
芳枝  
みえ

昭二  
正朗  
ちかし

友子  
満江  
孝華

ピツタリと水も洩らさぬ七五三  
貨車消えてやがて廃止をたどる駅  
葬送曲聞かぬ振りして貨車走る

珈琲を濃いめに朝の貨車が出る  
檜山の貨車が素通りしてくれる

まだまだと父が引つ張る家の貨車  
枕木が少しゆるんだ父の貨車

子が巢立ち少しよろめく父の貨車  
赤子の貨車が五線譜を走る

ローカル線いよいよ貨車に用がない  
美しい笑いに男は騙される

天井の節目が笑う二日酔  
笑ってる方がいつしか呆けはじめ

笑う年話に洩れる高笑い  
受験子へ家中笑い消している

かごめめ輪だれかうしろで笑っている  
物陰でほくそ笑んでる仕掛人

ソビエトが笑うシャトルの木端微塵  
酒がする笑い上戸に泣き上戸

よく笑う男で誤解されている  
ひとときれの菓子で抹茶も味が出る

偏差値へ鉈振り下ろす審査員  
川柳しんぐう 川上

ひたすらな願いは一つ千羽鶴  
折り紙にたたんで心預けおく

千羽鶴に願いをこめて紙廃止  
患者からナース折り紙数えられ

折り紙のたまし船には乗つてみる  
ぬるま湯でクシヤミ出そうな貴い風呂

風邪薬持ってクシヤミの孫を追  
わざとらしいクシヤミが父の部屋でする

川上

沢水報

柳宏子  
昌子  
華水

紫香  
八千代  
豊太

しげお

緑良

長三  
芳子  
雄々

瑞枝  
多賀子  
由郎

妻範  
貞子  
鶴丸

巡歩  
鳳人  
代仕男

壯樹  
きみえ  
秀子

愚童  
壽美子  
吾作

翠星  
与根一  
静江

叮紅

柳宏子

昌子

華水

紫香

八千代

豊太

くつさめの練習をするコマージュナル  
ハックション誰かがわしを賞めとるな  
灰皿と思えぬ立派な灰皿で  
禁煙の証しに灰皿割ろう  
小六佳菜子

灰皿へもうひと言をねじ潰す  
禁煙の目に灰皿がこびを売る  
灰皿が凶器にかわるサスペンス  
冬日背に農夫春待ち土作り  
恵美子

色あせた夢抱きしめて冬芒  
冬仕度長期予報で又迷い  
地を這つて雑草冬へ立ち向う  
雪ちよつと降つて絵になる冬景色  
利次

石見川柳会  
天に向く角度を模索する男  
脱サラを妻の度胸が背なを押し  
もつと不幸な人をはげます旅の宿  
家計簿を静かに閉じる子沢山  
久美子

寝たきりへ読んで聞かせる今日の記事  
金婚へ積んだ二人の愛の塔  
角度かえ死角を狙うすきま風  
末つ子の度胸序列を狂わせる  
昭二

子の好意無にせず機上の人となり  
貧の手の思案に悩む子沢山  
秒読みの点滴を見る夜の長さ  
拍手の成人服がきこちない  
智恵

叩かれて納得いかぬ子の鳴咽  
呱呱の声女系を破る力こぶ  
札束を積んだ期待の背番号  
突き刺さる言葉角度を変えて聞く  
多賀子

二児の母女の自負にある度胸  
掻き捨ての旅で落とした恥の数  
幸一

放浪の旅から帰る母の海  
沢山の中で選んだ妻の愚痴  
わからぬが読んで安らぐお経本  
横文字の記憶ぬ社長の泣きどころ  
秋峰

叩かれた痛み残した手で握る  
多数決素直になれぬ手も叩く  
杖曳いて過去にはふれぬ力こぶ  
力こぶない母さんにある力  
重六

積めるだけ積んで日航落ちまいぞ  
迎え傘母は降り積む雪に佇ち  
思い出を残す旅路に母を連れ  
東大阪川柳同好会  
奇藤三十四報

理想像私の顔が邪魔をする  
理想の人とは互いに結婚出来ぬ娘  
理想像まあ聞いておく年になる  
建て売りがやたらに殖えた理想郷  
佐吉

社理想窓際族の振つた鈴  
恋人が出来て理想ひっこめる  
お腹がふくれない理想を追っている  
お互いの理想は言わぬぬ良夫婦  
喜風

理想です星座も趣味も合う相手  
理想の違ひもデートして好きになる  
日雇の理想に内助の妻が居り  
理想論子供に鍵を握らせる  
山久

理想はと若し聞かれたらどない言お  
老兵が勇気を語る勝ち戦  
断りを言える勇気がピルを建て  
習ひかけ恐さ知らずと言う勇氣  
恒明

蛮勇を誇る人あり冬の山  
本当の勇氣退くことを知る  
柳宏子

光る物外し再起の束ね髪  
一枚の絵馬に再起を賭けている  
西宮北口川柳会  
奥田みつ子報

かまくらぬくもり民話ひきつがれ  
しぶちんの金庫の鍵は錆びて  
眉引いた嘘がだんだん剥けてくる  
えべつさん万札入れたんわてどつせ  
右近

かけ一つしぶちん汁の音を立て  
神さまの代理が寄附を言うてくる  
谷越えて恩を返しにきた民話  
涙涸れおんな再起の眉をひく  
湖風

しぶちんが許欺に遭つたと言う噂  
谷底に女忘れ母の墓  
しぶちんが美人の妻を連れて  
田空の柁目酷しい冬の旅  
天樹

噂ほどしぶちんでない門構え  
代理の方がコイさんに気に入られ  
谷底に男が埋める古い傷  
電話口代理の者としらを切る  
米朝

弔辞読む代理に仏なじまない  
女一人写経に和む夜のじま  
胸にバラ代理小泣いたり笑つたり  
人形芝居が泣いたり笑つたり  
みち子

丸優を満三歳の孫が持ち  
眉のない顔に出会った朝の宿  
ふるりの谷あたたかく抱いてくれ  
甲銃の音が谷底まで響く  
房子

ささきらぎに島人形の太い眉  
眉染めてまだまだ色気あふれる  
生きて往く日日それれに有る谷間  
都市砂漠ピルの谷間の焼き芋屋  
陽露子

杜の坊  
正坊  
白溪子  
春蘭  
柳影  
郁栄  
和友  
保蔵  
凡九郎  
芳子

静子  
春子  
かすみ  
半歩  
園歩  
江美  
冬子  
風児  
正坊  
杜の坊  
白溪子  
春蘭  
柳影  
郁栄  
和友  
保蔵  
凡九郎  
芳子

紀雄  
廉

正一

静子

春子

かすみ



苦勞話合点上手に苦勞人  
涙した数が人柄光らせる  
くちびるを合わす寸前コマーシャル

熊本川柳會

有働

芳仙報

人ほめることを覚えて年を取り

光 子

本音しか言えずみんなに嫌われる

楓 楽

ためらつていた相手から来た賀状

月 洗

初詣で昨日の僕を捨てに行き

しゆくろ

市場籠女それなりの幸を入れ

哲 翁

肩に置く手が反応をたしかめる

起 生

真実がまだ見つからぬキヤベツ割く

アヤコ

子猫捨てた日は母猫の目をそらす

幸 子

鞭握る飴はそんなに甘くなし

俊 子

病室のラジオイヤホーンだけの笑み

昭 代

瀬戸内の主役が変わる日も近し

宵 草

披露宴主役の構図へ身をまかせ

一 進

向う見ずの主役にみんなんひこずられ

信 善

主役には安住できる丘が無い

博 友

狼の責めに似ているいじめっ子

照 路

エホバの証人エリイコーズ棒に振り

たけ志

里雪のタルマ目鼻の炭がない

進 平

この路地を曲がれば我が家の灯が洩れる

哲 郎

正論を曲げると喉が渴きだす

美智子

風雪に耐えて老樹のよく曲がり

健 一

堂々と男の道は曲がらない

玉 水

師と親を責めて野放しするいじめ

桃 風

また妥協きのうと同じわたし責め

吟 平

責めるのは明日にしよう夕陽がきれい

柳五郎

責めを負う覚悟で放つこの一矢

草 風

激昂の背筋を抜ける怖い風

進 洋

人生を曲がった腰が物語る  
孫たちがおやつ比べてジャンケンポン

曉陣川柳

稲田 豊作報

漢方薬飲んで孤老の昼下がり

拓 治

百薬の長と毎晩飲める口

中 建

乳を飲む横で上の手指を吸う

豊 作

次期戦の根廻しだった飲んだ酒

鼓 草

酒飲みの親に懲りてか子は飲まぬ

た み

妻の留守 俺には一升瓶がある

承 平

親馬鹿が感心 息子の飲みっぷり

行 江

今日はパパ飲む日とパスで御出勤

文 古

酒好きと知られお銚子寄ってくる

い わお

この一ぱい奮起の握手君と僕

八 恵子

大宇宙吾が腹中へ一と飲ませむ

和 江

酒飲んでるから父さんの物分り

文 古

甲斐性で飲むなら飲めとグチ言わず

鉄 火

川柳高知

珍 顔

一休みしようか駄馬に荷が重い

み づる

許す事覚え世間を丸く生きている

み どり

戦友の賀状どちらも生きている

菊 野

忙した屋台常連はつとかくて

か ず子

へたな嘘信じたふりで許し合っ

登 舟

歳末の暮しの中のいそぎ足

春 枝

歳末の子定を妻に合わせられ

牧 郎

歳末の市場福寿草を買う老夫婦

佳 風

人柄で売れております角の店

成 美

お人柄一言添えて和を保ち

朱 坊

退院は明日屋上で見る夜景

幸 泉

空想が空想を呼ぶ青い空

三 吉

悔い一つ残して明日の夢を見る  
明日信じて一人であうまいコップ酒  
明日のある男へ釘をさしておく

豊中もくせい川柳會

田中

スキップが弾む少女は二年生

正 坊

一二三弾みをつけて炬燵出る

き く子

包丁の音弾ませて孫を待つ

す 美子

適量を家で飲んでる潤滑油

よ し子

郷の浜石油の基地となつて消え

曲 手

煩惱が残り羅漢の手に怒り

富 子

乙姫は怒るかわりに玉手箱

武庫坊

怒る母より無言の父が怖かった

博 史

怒ってる方も泣いりる影法師

隆

山男怒る山ほど泣いりる持っ

福 一

腹立てた妻パーゲンを買いあさり

女

大声で怒ったあとの孤独感

正 坊

税務署でもう怒らない父である

登 志実

三代目まだ小抽出に銀時計

美 幸

タイムカード押せば会社の顔になり

春 子

駅長が時計を出すや汽車が来る

山 久

朝寝坊時計つかみさされた腕時計

紫 香

街中が時計があつて嘘つけす

洋 子

約束がとつてに過ぎた花時計

房 子

円高で論吉が笑う夢を見る

慶 子

宅地化でひばり鳴く田が残ってる

明

靴の脱ぎようで際立ち宴会族

満 女

川柳ひらい

薫 風

病妻の眠れる背に詫をする

照 路報

幕合いがだれて欠伸が右左

栄 翁

実年族孫に囲まれ三ヶ日

柏 峯

年の瀬も明日にせまつて幕となる

美 代志

アヒル

走馬灯墨絵になつて会いにくる

信念を貫き孤独な幕が下り

同情は禁物後が恐いから

墨染めの法衣に秘める血の騒ぎ

盃がコップに変わり唄が出る

産声に人生ドラマの幕があく

ダルマの目いまたつぶりと墨を吸う

掛け値なくいい子ですよとお墨付

幕切れの涙はわたしだけのもの

禁物の芝生へ優雅な鶴の舞い

幕合いのラインダンスで息をぬき

金釘流若水汲んで墨をする

黒幕に踊らされてるヤジロペー

墨つけた魚拓に自慢の鯛はねる

あの日から嫁との禁句こぼれ出し

このこぶし私の心碎かねば

紅つけて眉墨引いて八十の春

この先は飛び付く術しかない蛙

首振りの虎は言わないギブアップ

ポトリ散る女の夢が寒椿

股のぞき墨絵のような鳥の松

父ちゃんのこととは言うまい母子家庭

悪知恵が先廻りして舌をなめ

薔薇色の幕切れ信じ夢を追う

野良犬がニヤリ歪んだ背を笑う

幕引きに徹し拍手を背で聞く

煙幕を張るすべ知らず父の舟

乱読でまだ満たされぬ中に住む

様々の読みを抱いてるピカソ展

草屋根の下で民話は受け継がれ

かずを

敏和

博

方己

良一

せつ子

典子

美佐保

やすえ

幸江

裕子

ともゑ

千恵子

孝子

トモ子

志寿子

寿子

愛子

胤親

愛

年子

柳五郎

博友

青銅

草風

真備雄

照路

若句報

松女

幸苑

草に寝て空の無限へ拳振る

昇天しても地球に墓碑を建て

ウインクを愛すと読んでくれますか

かけもちの役者斬られて又出てる

地球からのがれる道が一つある

聖者にも通れぬ道がある地球

ルンルン二人のために廻る地球

読めるふりして立って見る書道展

親の剣をレールの幅がせま過ぎる

草薙の剣を捨てた国と父

行間をよまねば解けぬ父の愛

道草を食べて作戦練っている

かけもちの出来る秘書なら雇いたい

ミサイルも核も地球は乗せたまま

言い過ぎた一言が運変えました

青春のどつと倒れた草いきれ

雑草はさつとチンドン屋になれる

安楽椅子でマルクスを読み返す

裏ばかり読むマルクスにある孤独

夢が欲しくて一気に読んだハイネの詩

殺してと言っひとことを愛と読む

思いあぐねて地球儀に種子を播く

草もちは女の長い旅を知る

出来すぎの嫁で姑が落ちつかぬ

次の世紀は地球を月からみてる

わかあゆ川柳会

小砂

気短かさうかつに冗談話されぬ

顔よりも言葉にじむよい毛並

期待してかついで見たが毛並だけ

満春

英治

親洋

碧水

雄々

律子

康子

とみお

秋人

柳風

次男

みなど

かつみ

秋女

千秋

千え

完司

あきら

瑞枝

石花菜

荒介

文子

独歩

苦句

白丁報

翠星

秀穂

悦良

ヒテ子

深呼吸する日もありて八十二

毛並よい犬はマグムの膝で寝る

カットして若さをしばし買ってみる

出目金のあつけにとられたような顔

筆先が短かい余生の灯を燃やす

毛並など後で気がつく恋の櫛

急ぐなとやさしい声を背で聞き

玉手箱あけてはならぬ毛並かも

急がねば次への恋が待っている

北風が急かされて咲く枇杷の花

真実が短かい言葉の中にある

血統書付きを雑種がふりまわし

川柳ささやま

脇田

千大根堪えた寒さを語らない

赤い靴はいて冒険したくなる

流れつくところ根張るこぼれ種

中流の顔でどつかり鏡餅

力餅掲いで喜ぶ産見舞

スタートの騎手億万の鞭を打つ

何もかも黄金吉でスタートし

スタートがピシリと決まる呱呱の声

年金のしずくを壺にする貯蓄

積立てででつかい夢を追っている

じつくりと眼を入れてゆく虎の画布

干支の虎夫へ酌をつぎこぼし

2DKトラトラトラの飾り立て

正月は家でやさしい寅となり

スタートヘネジ確かめる夫婦独楽

虎の軸掛けて元旦世帯主

天病人

世似

英子

笑子

清泉

鈴江

かつ子

民子

恵美子

はるみ

歳栄

白汀

米朝報

久子

和子

テル

素水

米朝

百合子

ひか平

文平

ゆう也

貞子

法齊

美智子

静子

きしゑ

靖子

可住

右近報

孫はもうサンタ信ぜず十二月  
 麻雀に調子出たまま大三元  
 O型で僕の間評価され  
 真反對の性格なれど虫が好く  
 八百の寅千里まで走ろうぞ  
 円空仏冬の瞳を輝かし  
 繕うた下着いやがる子に育ち  
 新聞を読んで話の種にする  
 横に振る首を張子の虎は持ち  
 あの時善意が結んだ年賀状  
 シクラメン燃える姿で春を呼ぶ  
 老いは老い然るに今年の決意する  
 山削り海埋め立てて土地造り  
 芋判の寅は賀状で調子よく  
 削りたい過去の汚点が気になる日  
 鉛筆を削れば尖る日の焦り  
 この寒さ老いの仕事もはかどらず  
 名調子司會者宴会盛り立てる  
 長靴でくらしを立てる寡婦の汗  
 調子良い言葉に乗せられ老い悲し  
 木枯の底で待ってる春の土  
 虎視眈眈しのぎを削る舞台裏  
 静寂に堪えられなくて声を出す  
 過去の夢すべて打ち切る除夜の鐘  
 糸電話親子の対話つないでる  
 カルタ取り調子出て来たVサイン  
 バランスを取らずに削るから恐い  
 削ったり書き足したり原稿紙  
 七草粥息子も味わう歳になり  
 手拍子でやっ調子に乗って来る  
 嫁姑互いの心に裏表

新一郎 午郎 悟郎 繁子 仙吉郎 静歩 綾珠 好古 八重 寿美礼 右近 節子 テルミ はる子 道子 炉斎 亀男 登志代 ふみ だし 満津子 泰世 達子 山久 敏子 市郎 白峰 喜代子 笑風 久留美

初釣りを祝う小舟に注連かざり  
 身を削る親の思いで子は育ち  
 円高を理由に灯油値切る主婦  
 病人の調子明るい試歩の朝  
 よく飛んだ亡父が作った竹トンボ  
 円空が削れば木ツ端拜まれる  
 岸和田川柳会 植山 武助報  
 初心者をほめてその気にさせる腕  
 無駄骨を折つてのれんのにがい酒  
 声出して読みたい様なレター来る  
 ネオン街欲求不満を招いてる  
 一振りて数万円の仕度金  
 冷える地下ワイン原酒並ぶ樽  
 産室の一声父になる自覚  
 今朝も無事ひとり舞台の幕をあけ  
 今朝も無事ひとり舞台の幕をあけ  
 猫に鈴つける役目を負わされる  
 子宝にまだめぐまれず旅が好き  
 数珠をくる女ひとりの朝の冷え  
 大根がふつふつ煮える寡婦の膳  
 友達の多い分だけ達者です  
 鶯の子に鷹を夢見る親の欲  
 欲出したばかりに乗った口車  
 喝采の届かぬ位置で暮す父  
 ねむそうなマイクの声でサオー竹  
 勘忍の一字が浮き出る母の背  
 欲深い話の輪からそとと抜け  
 生きのびるいのちあらたに感謝する  
 川柳藤井寺 赤木 和子報  
 宝くじそとと調べてそとと捨て  
 地蔵花凍りついている戻り寒  
 国中が冷凍庫みたいな寒の入り

星斗 秀月 倫子 静子 公一 弘生 加代子 一弥 楽天 浪速子 ゆずる 佳生 ひでこ さい子 狸村 武栄 射月芳 富志子 希久志 勝晴 甘平 白光子 操子 志洋 与呂志 須美

想い出の手紙を焼いて夢を消す  
 大阪に八百八橋年明け  
 冷凍がとけ出してきた立話  
 欠席の理由にマスクがだしにされ  
 オリオン星降る夜は凍りつく  
 今ギョウザ食べたばかりというマスク  
 大和路のどこを掘っても出る宝  
 冬鳥に千両万両ピラカンサ  
 池の水波の形に凍る朝  
 目の中に入れても痛くない宝  
 六・六は矛盾だらけで纏まらず  
 ニューリーター大鏡を削る丙寅  
 賽銭の割に大きい願ひかけ  
 カラコロと古都往く下駄の懐かしく  
 新年会虫干し代りに着る着物  
 ならみ鯛にらみ返して買わず行く  
 寒気ピシピシ日本列島凍りつく  
 雪を着て凍と樅の木初日の出  
 追羽根は貧しい私の宝もの  
 追羽根をジーンズ打つように  
 わたくしの番はいつ来る宝くじ  
 め飾りつけて救急車が走る  
 花籠も綱が切れては飾られず  
 旅の路自販機がある父の酒  
 凍りつく心を溶かす誠意の目  
 月給を運ぶ宝の肩をもむ  
 古都税で凍てた山門京の寺  
 子には子の宝がまるおもちや箱  
 凍てる庭寒菊強く咲き揃い  
 子は宝産児制限してますが  
 南大阪川柳会 中川 滋雀報

治子 つや 吸江 作秀 比呂志 美代子 本蔭棒 伴子 義一 たかし 清心 秋園 哲正 うめ 美佐 和美 雅美 彩 初枝 繁雄 ふみ 祐二 末一 美恵子 昭子 麻雄 正枝 清子 和子

罰金を秤にかけている違反  
賞罰のない履歴書を書き潰す  
一枚の辞令は罰を積みたがる  
罪と罰いつしか己の影を踏む  
軽すぎる罰だと他人さんが言う  
罰の背に敵しい冬が棲みはじめ  
罰金はいつもすし箱さげてくる  
遊び過ぎた罰と浪人して言われ  
微力だがだれにも負けぬ愛である  
微力だが靴は毎日減っている  
やさしさがあるから微力気にならぬ  
針に糸通す位の微力でも  
微力にも頼る氷原犬の楯  
微力だが家に内助の妻が居る  
かえり血をあひせられている微力  
頼まれた方は微力と知っている  
女ひとりの力に軌む屋台骨  
微力でも愛は非行の道を断つ  
この僕に出来る微力の献血よ  
公約の微力は公務に使ってね  
時間給稼ぎ微力を足しにする  
無作法な手にブライトを撫でられる  
電話口無作法でないパスタオル  
無作法な孫叱らずに嫁を攻め  
無作法な親そのまを音が真似る  
無作法な箸で旨そな音で食べ  
女子大出名ばかり嫁に裏切られ  
無作法を眼で叱ってる顔に会い  
別口でその穴埋めはしはるらし  
別口で主人に保険かけていた  
別口の話小声になつてくる

柳宏子 冬葉 元紀 小雅子 恒明 悦郎 節子 綾珠 柳伸 千里 美佐女 春蘭 喜風 あいき 千梢 弘生 寿美 晴風 勝美 ハル子 雅風 律子 信治 善信 庸佑 頂留子 曲ん手 しんじ 凡九郎 外吉 滋雀

別口があつて相続もめて来る  
別口の金でピンチを切り抜ける  
別口でもつけた金は羽根があり  
吊橋にぼろい話が落ちている  
贈賄の筋書にあるぼろ儲け  
ぼろ口を妻の臍くりきいている  
ぼろいことある筈がない冬の街  
ぼろい仕事もたまにあるから夢を持つ  
ぼろ儲け彼は戦争を待っている  
ぼろかつた話ばかりをドヤで聞く  
ぼろ口の甘味に蜂の針が待つ  
ぼろかつた頃なつかしい茶屋育ち  
ぼろいこと考えている寒い街  
無作法は承知の上のほおかむり

菜の花句会 高杉 鬼遊報

寒い筈妻の心は北を向く  
井戸端で世間話が熱くなる  
風船の中はやさしい母の息  
明治にはモラルの乱れ目に余り  
他人のめし食べて世間を教えられ  
夫婦逆流はかり行きたがる  
乱れ髪女は深い業を持ち  
泥船に乗せたい奴が多すぎる  
乱れ打ち男心を隠さない  
はつきりと言うことがあり北を向く  
妻のいう世間体にも上中下  
北風を知らぬ茶の間の置時計  
花の売場で心の乱れ整える  
戦死者の煙が赤い色でたつ  
出稼ぎの帰りに北国水温む  
何はさてホカホカ弁当のある世間

洋二 隆二 山久 楓楽 眉水 雀踊子 智子 文秋 慶三 不二天 章久 公一 智慧子 鬼遊 蕉露 金太 春美 勝美 雀踊子 悦郎 糸葉 射月芳 凡九郎 鬼遊 頂留子 度 美智子 郁栄 喜風 栗

乱れ籠女の嘘も二つ三つ  
北を向く窓には鍵をかけておく  
ときどきは馬鹿の煙に巻かれよう  
日本語の乱れをナウいなどと言う  
紫の仏間の煙は母のもの  
乱れとぶ噂を火薬庫に運ぶ  
凍る海北の鴨は良く歌う  
火の気ないといこへ煙を立てたがる

駒つなぎ川柳会 里 小路報

休まず遅れず賞状にある重み  
思案顔しているようにうけとれず  
有力者死んで道路が立ち消える  
餅花があつちこつちに咲く師走  
遅刻して武蔵のように勝てるかな  
思案してどうなるでなしアパートで  
立ち消えにされては困る予約金  
暮の街ゆつくり歩いてつきあたり  
常連の遅刻末席空けて待ち  
立ち消えの噂再燃するたき火  
紅葉の道へ思案を捨ててくる  
年末のお陽様加速度つけて落ち  
お手当てが途切れ汐時とも思ふ  
やることはやつたと思つみそかさば  
遅刻した訳は聞かない花時計  
思案する時間も取れず子は育ち  
一二号買ったが後は出ていない  
年末も新春もなし素浪人  
一分の遅刻で未来図がかわり  
条件がむつかしすぎて立ち消され  
年末にしわよせが来るカード待ち  
遅刻する常連見込んである時刻

シマ子 健司 弥生 幸生 美幸 冬葉 柳伸 庸佑 幸治 弘生 春蘭 曲ん手 凡子 雅風 頂留子 真砂 喜風 月子 信治 外吉 重人 国公 規不風 文秋 天笑 恒明 花仔 萬的

全山紅葉思案は雨の日にしよう  
一票の格差へ立ち消え許されず  
長過ぎた青春の約束立ち消える  
歳の瀬に半音高い妻の声

責任がないので少し遅刻する  
キズのあるメロンも売れて年の暮れ  
窓がみな俺を笑っている遅刻  
思惑があるので思案などしない  
雨足もなぜか忙しい年の暮

思案などしない明日はきつと晴れ  
遅刻した廊下の足音を盗む  
立ち消えの話ばかりで木偶となる  
あてにしたお歳暮の酒まだ来ない  
手探りの人生遅刻ばかりする

石橋を思案の末に渡りきる  
案山子の思案来年がありますか  
立消えの線路が錆びたまま続く  
サラ金もやりくりをする年の暮  
いちばん近い人が遅れてやってくる

芋版も彫ってせわしい年の暮  
窓際へ着いた無遅刻無欠勤  
思案など変にするから踏んだドジ  
産婦人科から止められたハネムーン  
出稼ぎの父待ちかねる年の暮

立ち消えにさせぬタクトを母が振る  
鍋でこと足りた思案の阿呆らしさ  
尼崎いくしま川柳会  
角野かず子報

一粒の豆から生まれてくる童話  
騒音が不快で窓を閉めました  
番人がいないと油売りがり  
女房に花を持たせている甲斐性

伊三郎

美津枝 勝美 博子 寿美 冬葉 柳好 善信 山久 雀踊子 美代 新造 美幸 射月芳 白兎 金太 壯之助 智子 千代三 楓楽 凡九郎 浩一郎 柳宏子 柳伸 小路

粒よりの中で闘志がわいて来る  
ヒト粒で目がつぶれると教えられ  
果たし状女がたぐりて怖くなる  
亡夫の墓心当たりのないお酒  
すぐ返す金は名刺の裏で借り  
えべっさんさい銭拾い又拝む  
番人を立てて難儀な話聞く  
戸を叩くお隣さんに気がもめる  
オレだオレだと真夜中に戸を叩く  
一粒の真珠ローンで買う虚栄  
番人のいないお宮の朝詣で  
番人のふところにある色眼鏡  
無表情な番人が居る資料館  
何があるのか真夜中に釘の音  
一粒の芽が伸び音が聞こえ出す  
満ち足りて亡夫に手向ける白い菊  
コンテスト優秀つかぬ粒揃い  
留守勝ちな主人へ犬は尾は振らぬ  
朝と昼兼ねて気楽な老い二人  
まじないの包丁で風邪追払う  
小粒でも宝宝箱の中に居る  
喋ることいかに大事か知る病  
留守番の人生だった母の針  
八十になっても女死ぬまで女  
薄氷踏んでは剥がす目のうろこ  
たのしさとさびしさおいて孫帰る  
机のすみ暗号らしいキズの跡

川柳ひらい(前月分) 行吉  
いるものを捨てて整理が出来上り  
年末だ銀行もパトロール路線にし  
感謝状頂きはめがはずせない

おちこばれ親の欲目が捨てきれず  
責任を持たぬ奴ほどよく喋り  
一筋の道を極めた来たる無口  
松葉杖取れば私の足に無  
捨てた過去風物の噂が掘り返す  
無職の靴明日の朝へ磨かれる  
昨日のぐち捨てた笑顔のはれやかに  
幸せの画布へ感謝の彩を塗り  
古都税に坊さん我欲なお経読む  
銀行へとられた程の授業料  
このあたり防犯カメラを意識する  
いんぎんに無礼に銀行額を聞き  
鉄骨に冷たいローンの風が吹き  
たましいの埃はたいて明日を買う  
残り火を骨身惜しまぬ丸い背  
午後の五時妻のたすきへ始業ベル  
頼まれて活かす器用に感謝され  
この指止まれ止まれば恋の共犯者  
ほどほどの感謝で暮らす老夫婦  
欲捨てて見れば楽しい老いの春  
乗りおくれお好み焼のせいにする  
幸せは感謝の心をついに秘め  
初詣神はノートにつけてるか  
感謝の便りに並ぶ誤字当字  
感謝する老婆あちこち手を合わせ  
下着売場でオツと躡くとは不覚  
悪友の感謝は握手だけで足り  
コップ酒いっきに男の愚痴捨てる

照路報  
柏峯 美代志 トモ子

伊三郎

年代 保蔵 紫香 春子 伊升 貞子 歌子 玉子 牧郎 みち子 サカエ 定人 かず子 郁栄 幸次郎 静江 すえ 佳秋 一郎 かね子 正一 ときお かすみ 水声 はつ絵 君子 美代子

伊三郎

おちこばれ親の欲目が捨てきれず  
責任を持たぬ奴ほどよく喋り  
一筋の道を極めた来たる無口  
松葉杖取れば私の足に無  
捨てた過去風物の噂が掘り返す  
無職の靴明日の朝へ磨かれる  
昨日のぐち捨てた笑顔のはれやかに  
幸せの画布へ感謝の彩を塗り  
古都税に坊さん我欲なお経読む  
銀行へとられた程の授業料  
このあたり防犯カメラを意識する  
いんぎんに無礼に銀行額を聞き  
鉄骨に冷たいローンの風が吹き  
たましいの埃はたいて明日を買う  
残り火を骨身惜しまぬ丸い背  
午後の五時妻のたすきへ始業ベル  
頼まれて活かす器用に感謝され  
この指止まれ止まれば恋の共犯者  
ほどほどの感謝で暮らす老夫婦  
欲捨てて見れば楽しい老いの春  
乗りおくれお好み焼のせいにする  
幸せは感謝の心をついに秘め  
初詣神はノートにつけてるか  
感謝の便りに並ぶ誤字当字  
感謝する老婆あちこち手を合わせ  
下着売場でオツと躡くとは不覚  
悪友の感謝は握手だけで足り  
コップ酒いっきに男の愚痴捨てる

照路報  
柏峯 美代志 トモ子

おちこばれ親の欲目が捨てきれず  
責任を持たぬ奴ほどよく喋り  
一筋の道を極めた来たる無口  
松葉杖取れば私の足に無  
捨てた過去風物の噂が掘り返す  
無職の靴明日の朝へ磨かれる  
昨日のぐち捨てた笑顔のはれやかに  
幸せの画布へ感謝の彩を塗り  
古都税に坊さん我欲なお経読む  
銀行へとられた程の授業料  
このあたり防犯カメラを意識する  
いんぎんに無礼に銀行額を聞き  
鉄骨に冷たいローンの風が吹き  
たましいの埃はたいて明日を買う  
残り火を骨身惜しまぬ丸い背  
午後の五時妻のたすきへ始業ベル  
頼まれて活かす器用に感謝され  
この指止まれ止まれば恋の共犯者  
ほどほどの感謝で暮らす老夫婦  
欲捨てて見れば楽しい老いの春  
乗りおくれお好み焼のせいにする  
幸せは感謝の心をついに秘め  
初詣神はノートにつけてるか  
感謝の便りに並ぶ誤字当字  
感謝する老婆あちこち手を合わせ  
下着売場でオツと躡くとは不覚  
悪友の感謝は握手だけで足り  
コップ酒いっきに男の愚痴捨てる

照路報  
柏峯 美代志 トモ子

伊三郎

年子 かすを 敏和 博 方巳 胤親 せつ子 やすえ 良一 裕江 幸江 美佐保 孝子 典子 ともゑ 愛子 辰路 愛 千恵子 寿子 志寿子 アヒル 博友 柳五郎 青銅 草風 真備雄 照路

伊三郎

## 4 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
菜の花	10日(木) 夕6時より 大学・揃う・大切・詫びる	八尾西郷会館 近鉄大飯線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5-4-6 内海幸生
川柳塔まつえ	12日(土) 午後1時半より 匂う・絶頂・安堵	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳わかやま	13日(日) 午後1時より 磨く・花束・箱・約束	和歌山県民文化会館4F 中集會室(8号室) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	14日(月) 午後1時より 机・中心・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
堺川柳会	15日(火) 夕6時より 合格・コンパ・小雨・混線	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
高槻川柳サークル卯の花	17日(木) 午後1時より さわやか・決意・自由吟	高槻市民会館 301号室 阪急電車高槻下車5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-9 辻白溪子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富柳会	17日(木) 午後1時より 祈る・時計・味	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3-22-18 藤田泰子
南海電鉄川柳句会	17日(木) 夕6時より 弁当・月賦・スピーチ	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
南大阪川柳会	19日(土) 夕6時より 焼く・生きる・床しい・遠方	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川柳ねやがわ	20日(日) 午後1時より 自宅・花・新人	寝屋川市立総合センター1階会議室 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい川柳会	21日(月) 午後1時半より すい星・舞う・ブーム・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根駅下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
東大阪川柳同好会	26日(土) 夕6時より 福祉・借金・ボタン(釦)・上役	東大阪市社会教育センター2F 近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 斉藤三十四 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ川柳会	28日(月) 夕6時より 載せる・暗黙・肩・分け前	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里小路

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

# 本社4月句会

(詳細は表紙裏)

本社4月句会は中島生々庵追悼句会と致  
します。

小石奥さんも久しぶりにお元氣なお姿を  
見せて下さいますので、皆様方お誘い合  
わせの上、多数ご出席をお待ち申し上げ  
ます。

川 柳 塔 社

5月の兼題 「魅力」 「勉強」  
「魅誇」 「力り」 「勉豆」

5月の本社句会は7日(水)

## 『夜市川柳』募集

第11回

「鼻」

中尾藻介選

締切 4月30日

第12回

「仲居」

西尾 栞選

締切 5月31日

投句先

〒593

堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

# ● 募 集 ●

## 六月号発表表 (4月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選  
水煙抄(10句) 黒川 紫香選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
課題吟(各題5句以内)  
「しこり」 清水 一保選  
「値段」 中原 比呂志選  
「派手」 横地 雅風選  
★水煙抄欄の投句は本社同人に限ります。  
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

## 七月号発表表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選  
水煙抄(10句) 黒川 紫香選  
愛染帖(3句) 橘 高薫風選  
課題吟(各題5句以内)  
「恩」 仁部 四郎選  
「団地」 片上 明水選  
「交替」 藤後 実男選  
★愛染帖・課題吟へは同人誌友を限らず。  
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

4月の常任理事会は1日(火)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十一年三月二十五日印刷

昭和六十一年四月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

発行人 藤原 童心社

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三丁目二一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)261-6914番  
振替口座大阪8-133326八番

## 編集後記

☆四月月号を中島生々庵追悼号として靈前に捧げます。  
☆昭和四十年の改題以来表紙の絵を担当して下さっている直原玉青画伯は、生々庵・小石ご夫妻に絵の指導をされていまして、  
☆玉青画伯から四月月号の絵を受け取ったのは二月初旬のことだったが、この漏路の絵を下さった。生々庵先生には、もつとふさわしい絵もあるが、このような奇しき因縁を大切にしたいので、敢えて予定の表紙をそのまま使った。

☆葬儀に際してご交誼を賜わった川柳各会並びに各会の諸氏、藤島茶六日本川柳協合理事長はじめ、追悼号に寄稿せられた各位に心からお礼申し上げます。  
☆高知の誌友山下登舟さんも歿くなってしまわれた。先生と同じ病だったが、数年前奥さんと車椅子で会いに来られ、四十二キロではいかんと、蜂蜜やローヤルゼリーを送り続けて下さった。ゼリーはまだ三ヶ月分ある。はっと気付いて、恩返しが出来ていない人に死なれると、深夜の湯に浸ってやるせなく涙がにじむ。  
☆三月に入って「山内静水さん宛くなったのですか」との電話を次々に貰う。某川柳誌の誤った記事が原因らしい。生きているのに葬式をされた人もいて、その人は長生きをしたそう。それならめでたい話である。

☆NHK学園の添削講座に川柳が加えられ、川柳塔から七名が講師を担当することになった。NHKテレビの「よめやうたえや川柳天国」のフイパーぶりから学園が創設に踏み切ったという。この世界、数が絶対なのである。川柳界からもずいぶん傷されたが「燕雀いづくんぞ知らんや」と、今に見るの気概でいたが、川柳の質を高める大きなまとまりが、このように全国的に結成されたのは誠にありがたい。この次は、その次はと、川柳人の尽力で、大きいものを育て上げたい。

☆九月に予定の中国旅行の詳細は次号で発表します。ご期待下さい。(薫)  
▼原爆の図を描いて有名な丸木位里・俊さん夫婦の母親である、丸木スマさんの画展「花と人と生きものたち」を観に行きました。  
▼八十点ほどの絵が飾られてある。花あり、野菜あり人に鳥、犬、猫など、初めて幼児が絵を描く題材ばかりである。どの一枚にも華やかな色が満ち溢れ、色のとどかないところがない。  
▼人より大きな鳥がいたり狐のようなクマがいておばあさんと背比べをしていて。絵を見ていると涙が湧いてくる。本職の絵かきでないから上手とは言えない。しかし、これが絵だと感激させられる。

▼十五の時から一人で五反の田畑を耕し、姉と兄嫁につかえ働きつづけ、ヒロシマの原爆に遇って後、棄隠居をすすめられたが「働かずにいると、体じゅうが痛くなる」と言うスマさんに、俊さんが絵をかきことをすすめたのが、七十四歳になつてからである。  
▼朝から晩まで絵をかいていられる。「疲れたでしよう、少し休んだら」「日照りのときの田の草取りのことを思うてみい遊んどるようなもんよ」と、スマさんは笑う。楽しんで描いた絵は、観る人を楽しませてくれる。院展に三年連続入選。歳を気にするのは早い。(き)  
☆女から見ると、どんなときも男が立派に見えるのか、常日頃、我々男性にとって極めて重大な関心事に對し、前号の女性同人アンケートは大変辛辣に富む意見を示して下さい。十人十色それぞれお人柄個性がにじみ出ていて、なかなか面白い。早速、肝に銘じ、期待される男性像に近づきたいとは願うもの、正直日替わって道遠しの感である。☆「男が立派に見える」の連想でフト考えた。女が可愛く見えるのはいつだろう、と。もし、そういうアンケートを求められたら、どうしようかな。そうだが、こんなのがあった。「女といふものは、本来可愛く見きものなのです。可愛く見えるのではなく、オギヤと産卵声をあげてから白骨になるまで、性転換でもない限り、女という存在そのものが、いとしく、可愛いのだと思います。世の中には可愛い気のない女もいます。しかしそれはああこの人は女ではないのダ、と思うことにするのです。そうすれば大して腹も立たないでしよう。」  
☆アホらしの鐘が鳴るこの文章、いつ誰れが書いたものか。ただ、人生の哀しみはザインとブルンがしばしば一致しないことにある。それにしてもカワユイ男と、ゴリッパな女が多くなった、そう思いませんか。  
☆四月から男女雇用均等法が実施される。(史)

日刊

# 電波新聞

## 投稿欄案内

川柳 選者・橘 高 薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小 寺 正 三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

### 〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

### 〈投稿先〉

〒532-0001 大阪市北区中之島二丁目一・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

5つの個性・5つの色味!!

# アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



ななば戎橋筋本店  
ななば高島屋百貨店  
泉北高島屋百貨店  
京都高島屋百貨店  
阪神百貨店  
松坂屋百貨店  
千ごう百貨店  
京阪モール店

サンストア中之島店  
サンストア淀屋橋店  
アベノ近鉄百貨店  
上本町近鉄百貨店  
東大阪近鉄百貨店  
奈良近鉄百貨店  
京都近鉄百貨店

ななば新川店  
近のまち店  
下一手力店  
南海難波駅店  
国鉄大阪駅店  
梅田大丸百貨店  
堺車店



大阪・ななば



TEL 641-0551

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和六十一年三月二十五日 印刷  
昭和六十一年四月一日発行(毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通巻七〇七号 川柳塔 四月号

定価 五百円(送料五十円)